

ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2012

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 24 (2012) 年度

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 24 (2012) 年度



NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION , 2015

奈良市教育委員会

奈良市教育委員会

2015

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成 24 (2012) 年度

奈良市教育委員会

2015



TD第13次調査 第8発掘区 東大寺東僧房(太厨) (北西から)



DA第130次調査 第2・3発掘区全景（南から、北の高まりは西塔）



BG第2次調査 瓦窯跡全景（北西から）

例言

1. 本書は平成24年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財に関する各事業の概要を取録したものである。ただし、平成24年度に実施した調査のうち、平城京第663・666次調査については、次年度以降に報告の予定であるため、本書には取録していない。
また、平成22年度に実施した史跡東大寺旧境内第12次調査と、平成23年度に実施した史跡東大寺旧境内第13次調査については平成25年度に実施した史跡東大寺旧境内14・15次の成果とともに、本書に取録した。
2. 平成24年度の埋蔵文化財に関する各事業は下記の体制で実施した。

奈良市教育委員会事務局 教育総務部

文化財課

課長 中井 公

課長補佐 松岡満和（文化財総務係長事務取扱）

文化財総務係

主任 松浦五輪美

技術職員 大窪淳司

記念物係

係長 森下浩行

技術職員 小林広育

埋蔵文化財調査センター

所長 森下恵介

所長補佐 篠原豊一

調査グループ

主任 三好美穂 安井宣也 池田裕英 原田憲二郎

主務 原田香織 池田富貴子

嘱託職員 大原 瞳 奥井智子（現 京都市教育委員会）
宮本賢治（1月から 現 甲賀市教育委員会）

保存活用グループ

主任 鐘方正樹 久保清子 久保邦江 宮崎正裕 中島和彦

企画総務グループ

主任 秋山成人

事務職員 松村健次

主務 山前智敬

再任用職員 酒井真弓

3. 発掘調査、出土遺物整理、保存活用等の各事業に関しては、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良市文化財保護審議委員会などの関係諸機関よりご指導とご協力を賜った。ここに記して謝意を表する。
4. 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数となっている。報告した遺跡名の略記号は下記のとおりである。

HJ 平城京跡 DA 史跡大安寺旧境内 TD 史跡東大寺旧境内 TI 東市跡推定地
GG 元興寺跡 SD 西大寺跡 BG 白毫寺跡

5. 本書で使用した遺構番号は、一部を除いて調査ごとに付した仮番号である。遺構等の番号の前には、その種類に応じて以下の番号を付した。

SA (柱列・塼) SB (掘立柱建物) SD (溝・濠・溝状遺構・暗渠) SE (井戸)
SF (道路) SK (土坑) SX (その他)

また、遺構の大きさの数値は、すべて遺構検出面での計測値である。

6. 本文中で示した過去の調査の実施機関は、調査回数の前記に下記の略記号を使用し表記した。

国 — 独立行政法人奈良文化財研究所 (旧奈良国立文化財研究所含む)
県 — 奈良県教育委員会および奈良県立橿原考古学研究所
市 — 奈良市教育委員会

7. 本書で使用した遺物名称・形式・型式は、一部を除き下記の刊行物に準拠した。

奈良時代 軒瓦：『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会 1996
土器：『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』奈良国立文化財研究所 1976
『平城宮発掘調査報告書ⅩⅠ』国立文化財研究所 1982
古墳時代 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
弥生時代 土器：『奈良県の弥生土器集成』奈良県立橿原考古学研究所 2003

8. 発掘区位置図については、奈良市発行の「大和都市計画図」(1/2,500)を、また調査区位置図については、国土地理院発行の1/25,000の地形図を利用した。

9. 本文中において示した位置の表示値は、平面直角座標系第Ⅵ系(世界測地系)の数値である。なお、座標値の表・図中の標記については、単位(m)を省略した。

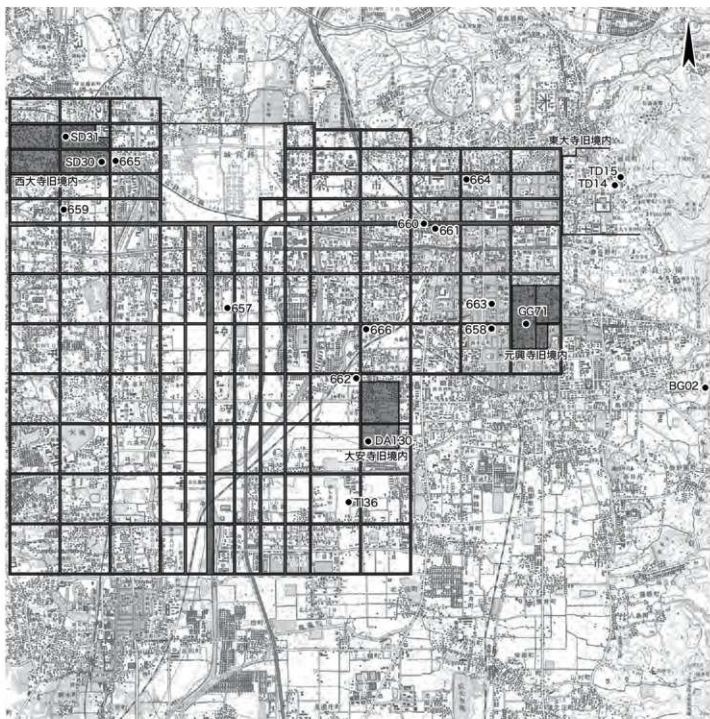
10. この報告に関する調査記録・出土遺物は、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 第1・3章の執筆は、当該調査と遺物整理を担当した埋蔵文化財調査センター職員が分担し、文責は各調査報告の文末に記した。第2章は分析機関の報告を再編集して構成した。

12. 本書の執筆および編集は平成26年度に行い、埋蔵文化財調査センター所長 森下恵介、所長補佐 三好美穂の助言を得て、原田憲二郎が編集を担当した。

目次

巻首図版	1、II
例言・目次	i～v
第1章 平成24年度奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告	1
1. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査	2
(1) 西大寺跡(西大寺寺地)の調査 第30次	3
(2) 平城京跡(右京一条二坊十三・十四坪)の調査 第665次	8
2. 平城京跡(左京四条一坊六坪)の調査 第657次	10
3. 平城京跡(左京五条六坊九坪)・奈良町遺跡の調査 第658次	16
4. 平城京跡(右京二条三坊十四坪)の調査 第659次	18
5. 平城京跡(左京二条大路)の調査 第660次	20
6. 平城京跡(左京六条三坊十六坪)の調査 第662次	21
7. 平城京跡(左京三条五坊八・九坪)の調査 第661次	22
8. 平城京跡(左京二条六坊一坪)の調査 第664次	24
9. 平城京東市跡推定地の調査 第36次	27
10. 史跡東大寺旧境内の調査 第12・13・14・15次	32
11. 史跡大安寺旧境内の調査	76
塔院地区の調査 第130次	77
12. 元興寺跡(東面回廊推定地)・奈良町遺跡の調査 第71次	86
13. 西大寺跡(政所院・正倉院推定地)の調査 第31次	88
14. 白毫寺跡(白毫寺境内瓦窯跡)の調査 第2次	93
15. 平成24年度実施小規模調査・試掘等一覧	97
16. 平成24年度実施踏査一覧	97
17. 平成24年度実施工事立会一覧	97
第2章 自然科学分析	103
平城京跡第665次調査における自然科学分析	105
第3章 平成24年度保存活用事業報告	113



平成 24 (2012) 年度 発掘調査位置図 (1/40,000)

平成24(2012)年度 奈良市教育委員会実施 埋蔵文化財発掘調査一覧

No	調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積(m ²)	担当者	事業者	事業内容	事業区分	届出受理番号
1	HU657	平城京跡 (左京四条一坊六坪)	西条大路三丁目 900番地	H24.5.9～ H24.6.5	232.5	原田香	個人	宅地造成 共同住宅新築	原因者	H23.3387
2	HU658	平城京跡 (左京五条六坊九坪)・ 奈良町遺跡	南城戸町56の一部 南袋町17の一部地	H24.5.28～ H24.6.6	50	安井・ 大塚	個人	賃貸住宅新築	原因者	H23.3364
3	HU659	平城京跡 (右京二条三坊十四坪)	青野町111-1他	H24.5.23～ H24.5.31	99	池田裕	職業実住宅	宅地造成	原因者	H23.3389
4	HU660	平城京跡 (左京二条大路)	芝辻町三丁目地内	H24.6.18～ H24.7.5	12.5	三好	奈良市長	二条筋地方特定道路 整備事業	公共	H19.3067
5	HU661	平城京跡 (左京三条五坊八・九 坪)	芝辻町地内	H24.7.5～ H24.9.14	70	三好	奈良市長	油阪在保山線地方特 定道路整備事業	公共	H24.3039
6	HU662	平城京跡 (左京六条三坊十六坪)	大安寺三丁目99-1他	H24.7.31～ H24.8.2	140	池田裕	阪八西エージェ ント	宅地造成	原因者	H24.3158
7	HU663	平城京跡 (左京四条六坊十一 坪)・奈良町遺跡	東城戸町23番1、31 番地	H24.8.23～ H24.11.22	450	安井・ 原田香	バナホーム(株)	共同住宅新築	原因者	H24.3067
8	HU664	平城京跡 (左京二条六坊一坪)	法蓮町1000-1他	H24.10.1～ H24.10.18	120	三好	奈良育英学園	校舎改築	原因者	H24.3117
9	HU665	平城京跡 (右京一条二坊十三・ 十四坪)	西大寺南町2368他	H24.12.6～ H25.3.12	880	安井・ 原田香	奈良市長	西大寺駅南地区土 地区画整理社会資本 整備総合交付金事業	公共	S63.3056
10	HU666	平城京跡 (左京五条四坊一坪)	大森西町181他	H25.2.12～ H25.3.15	308	原田恵・ 宮本	奈良市長	JR 奈良駅南特定土 地区画整理社会資本 整備総合交付金事業	公共	H12.3145
11	TI036	平城京東市跡推定地	東九条町443番2他	H24.7.17～ H24.8.1	167.5	安井・ 奥井	(有) ウエムラ	宅地造成・住宅建設	原因者	H24.3107
12	GG071	元興寺跡 (東面河内推定地)・奈 良町遺跡	芝新屋町1-1他	H25.6.25～ H25.7.10	37	池田裕	個人	個人住宅新築	緊急	H24.3058
13	SD030	西大寺跡 (西大寺寺地)	西大寺南町2440-1他	H24.5.28～ H24.8.24	553	池田富	奈良市長	西大寺駅南地区土 地区画整理社会資本 整備総合交付金事業 (平成23年度繰越)	公共	S63.3056
14	SD031	西大寺跡 (政所院・正倉院推 定地)	西大寺新田町501の 一部他14筆	H25.2.26～ H25.3.27	300	三好・ 池田裕・ 宮本	園ソニック	宅地造成	原因者	H24.3336
15	TD014	史跡東大寺旧境内	雑司町地内	H24.11.5～ H24.12.28	105	三好・ 池田裕	奈良市公共下水 道管理者 奈良 市長	都市水環境整備下 水道築造工事	原因者	H21.1176
16	TD015	史跡東大寺旧境内	雑司町地内	H25.1.7～ H25.2.1	40	三好・ 宮本	奈良市公共下水 道管理者 奈良 市長	都市水環境整備下 水道築造工事	原因者	H21.1176
17	DA130	史跡大安寺旧境内附石 橋瓦葺(菩提地区)	東九条町1350-1番地 他	H24.9.3～ H24.12.28	1026	原田恵・ 奥井	奈良市教育委員 会教育長	史跡大安寺旧境内保 存整備事業	公共	—
18	BG02	白毫寺跡 (白毫寺境内瓦葺跡)	白毫寺町392他	H25.1.21～ H25.2.15	20	池田裕	奈良市教育委員 会教育長	遺跡範囲確認調査	緊急	—

第1章 平成24年度 奈良市埋蔵文化財発掘調査概要報告

1. 近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業に係る発掘調査

奈良市教育委員会では、昭和63年度から近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内（総面積32万㎡）の発掘調査を継続して実施している。

平成23年度までの調査面積は、111,480㎡である。

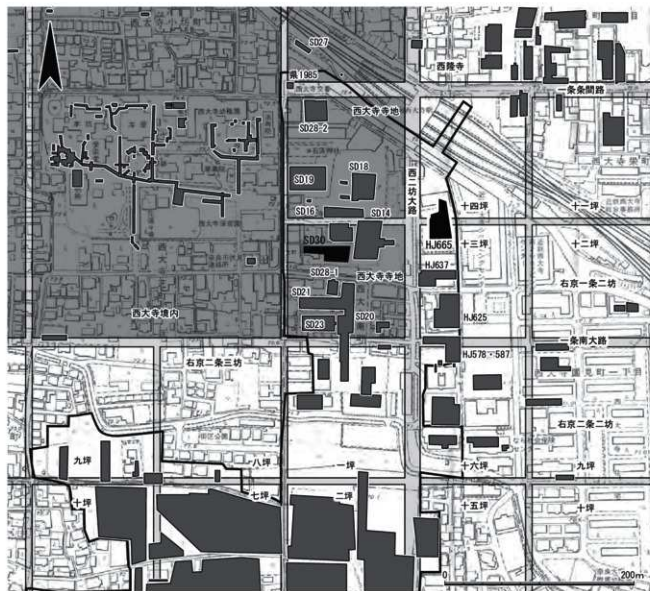
平成24年度は、平成23年度繰越事業として西大寺

跡553㎡（SD30次調査）、現年事業として平城京の右京一条二坊十三・十四坪内で880㎡（HJ第665次調査）の計1,433㎡の調査を実施した。

これらの発掘調査の概要と調査位置は下記のとおりである。

平成24年度近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業 発掘調査一覧表

遺跡名	調査回数	事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
西大寺跡	SD第30次	社会資本整備総合交付金事業（23種）	西大寺南町 2440-1 他	H 24.5.28 ~ H 24.8.24	553㎡	池田富
平城京跡 （右京一条二坊十三・十四坪）	HJ第665次	社会資本整備総合交付金事業	西大寺南町 2368 他	H 24.12.6 ~ H 25.3.12	880㎡	安井・原田香



近鉄西大寺駅南地区土地区画整理事業地内 発掘調査位置図 (1/4,000)

(1) 西大寺跡(西大寺寺地)の調査 第30次

I はじめに

調査地は西大寺の伽藍復原によると、主要伽藍地区東方の寺地部分にあたる。平城京の条坊復原では右京一条三坊四坪の北西部に位置する。調査地の周辺ではいくつかの調査例があり、東側で実施した市SD第14-1次調査、北側で実施した市SD第24次調査では、一条条間南小路の南側溝と思われる東西溝と、坪内道路を検出したほか、奈良時代から平安時代の掘立柱建物、溝、井戸などが多数見つかっている。

今回の調査は、四坪ならび寺地の利用状況をさらに詳しく知ることを目的に実施した。

II 基本層序

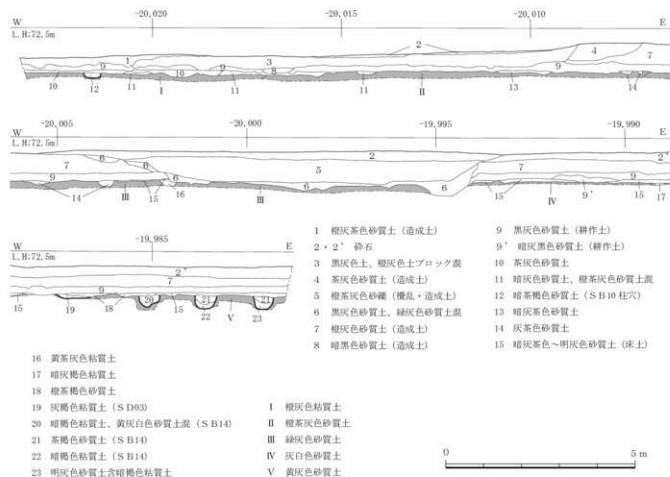
発掘区内の基本層序は、造成土、耕土、明灰色砂質土と続き、東半では現地地表下約0.7～0.8mで黄灰色砂質土、灰白色砂質土、西半では現地地表下約0.4～0.7mで橙茶灰色砂質土～橙灰色粘質土の地山に至る。遺構面の

標高は、東端から中央付近にかけて約71.3m、南西部で約71.2mと東から南西に向かって緩やかに傾斜している。遺構検出作業は地山上面でおこなった。

III 検出遺構

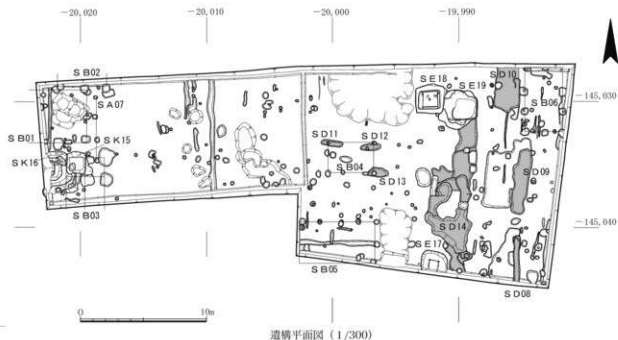
検出した遺構には掘立柱建物6棟(SB01～06)、掘立柱塀1条(SA07)、溝7条(SD08～14)、土坑2(SK15・16)、井戸3基(SE17～19)がある。以下、それぞれの遺構について述べる。詳細は一覧表にまとめた。

建物 SB01は、発掘区北西隅で検出した東西棟建物の一部である。西端は発掘区外西へ続く。SB02はSB01と重複して検出した南北棟建物の南側柱列である。重複関係からSB01より新しい。SB03はSB01の南側で検出した2間以上×2間の総柱建物。西側柱列がSK15・16に壊され、南側は発掘区外へ続く。SB04は、SD11～13と重複して検出した1間×1間の東西棟である。



発掘区北壁土層図(1/100)

(1) 西大寺跡(西大寺地)の調査 第30次



遺構平面図 (1/300)

SB05は、発掘区の中央南端で検出した東西棟建物で、SB04と東側柱列が揃う。SB06は、発掘区北東部で検出した南北棟建物で、西側柱列がSD08・09の溝心とほぼ揃う。SB03を除く建物の柱脚方は、一辺が約0.2～0.3mと小さいものが多い。SB01・03・05から8世紀代の土師器・須恵器、SB02からは8世紀末～9世紀初頭頃の黒色土器A類が少量出土した。

柱列 SA07は、SB03と重複して検出した掘立柱塼で、3間分を確認した。重複関係から、SB03よりも古い。発掘区外北へ続く可能性も考えられる。

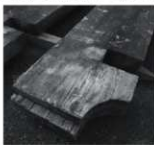
溝 SD08・09は発掘区の東辺部で検出した南北方向の溝である。2つの溝は溝心をほぼ揃える。SD08の北端とSD09の南端は約2m途切れるが、一連の溝と思われる。SD08の南端は発掘区外南へ続く。SD10は、SD09の北側で検出した南北方向の浅い溝で、SB06より新しい。溝心はSD08・09より約1.5m西へ寄る。SD10の北端は発掘区外北へ続く。SD08～10は坪内の東西約1/2付近に位置している。SD08から8世紀後半～9世紀初頭頃の土師器・須恵器が出土した。SD14は、SD08・09の西側約3mの箇所検出した南北方向の溝である。北端付近は深さ約0.1mと浅いが、中央辺りで二条に分かれて後、再び合流する部分で幅も広く、深さも約0.3mと深くなる。遺物の大半がこの地点から出土している。南端では北端と幅・深さともに規模が同じになり、発掘区外南へ続く。重複関係からSE19より新しい。SD14から8世紀後半～9世紀初頭頃の土師器・須恵器、軒丸瓦、埴、鉄釘などが出土。

SD11～13は、発掘区のほぼ中央で検出した東西方

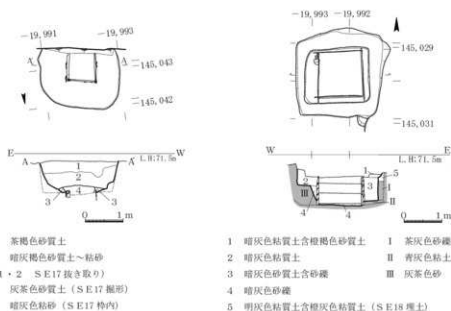
向の溝である。いずれもSB04より新しい。

土坑 SK15は発掘区の西辺部で検出した隅丸方形の、東西1.5m、南北1.7mの土坑である。底に暗灰色粘土が約0.2～0.3m堆積し、その上は黄灰色粘質土のブロックが混じる灰黒色砂質土で埋められている。13世紀中頃～後半頃の瓦器や土師器が出土した。ゴミ捨て穴と思われる。SK16は、SB03・SK15と重複して検出した土坑。西端は発掘区外へ続くので全形は不明だが、おそらく東西2.4m以上、南北3.3mの隅丸方形になると思われる。深さは西の壁際で1.2mまで確認した。8世紀後半の土師器・須恵器のほか木材の破片が出土。井戸枠を抜取った痕跡とも考えられる。SB03よりも新しい。

井戸 SE17は、発掘区東半の南端中央で検出した。掘形は東西2.1m、南北1.5m以上の平面隅丸方形で、掘形の約1/3と井戸枠の南辺は、発掘区外南へ続く。井戸枠の上部は抜き取られており、最下段の横棧と隅柱、折れた堅板が数枚残るのみであった。枠内は湧水が激しく崩落の危険があったため、遺構面から0.9mの深さまでの確認にとどめた。抜き取り穴から8世紀代の土師器、須恵器が少量出土した。SE18は、発掘区東半の北辺中央で検出した。掘形は、東西2.3m、南北2.4mの隅丸方形で、深さは1.05m。井戸枠は相欠き仕口型の方形横板組で、各段は太納等で固定していない。三段分残存していた。枠材の端が弧を描くように切り落とさ



井戸SE18井戸枠(取用材)



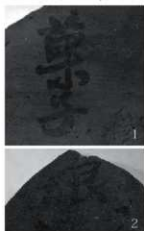
井戸SE17・18平面・立面図(1/100)

れており、床板材などを転用したものと考える。井戸底には拳大の小礫が敷かれていた。枠内から8世紀後半～9世紀初頭の土器、瓦類、墨書土器、刀子形木製品が出土した。SE19は、SE18と重複して検出し東西2.7m、南北3.0mの不整形の井戸。深さは検出面から1.2mある。井戸枠は抜き取られたらしく残存しない。8世紀中～後半頃の土師器・須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、埴などが出土した。

IV 出土遺物

土器類が遺物整理箱で12箱、瓦類が5箱、木・金属・石製品などが1箱、合計18箱分の遺物が出土した。内訳は、縄文土器、弥生土器、8～9世紀の土師器・須恵器・墨書土器・線刻土器・製塩土器・かまど・ミニチュア土器、9世紀代の灰軸陶器、11世紀前半の土師器、13世紀中～後半の土師器、瓦器、18世紀以降の陶磁器、8世紀代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・埴、石器(縄文時代石鏃、砥石)、木製品(井戸枠材、曲物底板、刀子

形木製品、箸)、金属製品(鉄釘)、自然遺物(桃核)である。SE18・19からは、漆が付着した須恵器壺体部片や墨書土器が3点出土。このうち2点は、「菓子」(1)、「良」(2)と読める。1は須恵器甕Cの体部外面下半に、2は須恵器杯Aの口縁部外面下半に記されている。2点ともSE18枠内からのものである。



上段:SE17(北から)、下段:SE18(南から)

V 調査所見

今回の調査では以下のことが明らかになった。

①坪内を東西に分ける1/2付近で、南北溝(SD08～10・14)を検出することができた。平行する2条の溝に挟まれた空間部分は、約1.0～3.0mの幅があり、坪内道路の存在を想定できる。北側で実施した市SD第24次調査においても、同じ坪内道路と考えられる遺構が検出されており、本調査区まで続くことが判明した。また、東西溝SD11～13も、坪内の南北1/4付近に位置していることから、区画溝になる可能性が考えられる。

②SD08・14は、出土土器の年代からみて、8世紀後半以降につくられ、少なくとも9世紀初頭頃までは機能していたと思われる。坪内道路が施工される以前の遺構にはSB01・03・04・06、SE19があり、坪内道路施工以降にSB02・05、SE17・18が構築されたと考えられる。遺構の重複関係や配置などを考慮すると少なくとも3時期以上の変遷があったことが窺える。

③今回の調査地は、東と北に隣接する調査地(市SD14-1次、市SD24次)に比べると遺構の密度が低く、宅地の利用状況が異なっていることがわかる。発掘区一帯に橙茶灰色砂質土の地山が広がっており、この砂層を50cmほど掘り下げると、粘土と砂が交互に堆積しており水分を多く含む地層になっている。また、遺構面から約1m掘り下げた砂層からは、縄文晩期の土器、石鏃が少量出土しており、奈良時代以降の生活の地盤は、縄文時代以降の河川などの流れによって堆積した砂層の上にあることがわかる。建物などを建てる場所としては適さなかったと思われる。(池田富貴子・三好美穂)

(1) 西大寺跡（西大寺寺地）の調査 第30次



発掘区東半部全景（南から）



発掘区西半部全景（東から）



溝 SD08 ~ 10・14 (南から)



発掘区西端部 (南から)

道構一覧表

遺構番号	棟方向	原積(間)	新行全長 新行×梁行 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法(m)		柱穴の深さ (m)	備考
					新行	梁行		
S B 01	東西	1以上×2	2.1以上	4.2	2.1	2.1等間	0.1~0.2	S B 02より古い。8世紀代の土師器片出土。
S B 02	南北	1以上×2	—	3.9	—	西から2.1-1.8	0.1~0.2	S B 01より新しい。8世紀末~9世紀初頭の黒色土器A類焼片出土。
S B 03	南北	2以上×2	3以上	3	北から1.5-1.5以上	1.5等間カ	0.2~0.3	S K 15・16より古い。8世紀代の土師器・須恵器片出土。
S B 04	東西	1×1	3.6	2.4	3.6	2.4	0.1~0.2	S D 11・12より古い。
S B 05	東西	4×2	6	3.3	1.5等間	北から1.8-1.5	0.2~0.3	8世紀代の土師器・須恵器片出土。
S B 06	南北	3×2	5.1	3	北から1.8-1.8-1.5	1.5等間	0.1~0.3	S D 10より古い。
S A 07	南北	3	4.8以上	—	北から1.5-1.8-1.5	—	0.08~0.18	S B 03より古い。

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
SD 08	南北方向	幅0.5×長さ3.5以上	0.15	8世紀後半~9世紀初頭	土師器杯皿類・甕、須恵器杯皿類・壺・甕、丸瓦、平瓦	坪内の東西1/2付近に位置する南北溝。溝心の国土座標値は、X=-145,042,000、Y=-19,985,600。
SD 09	南北方向	幅1.0~1.4×長さ5.2	0.1			坪内の東西1/2付近に位置する南北溝。溝心の国土座標値は、X=-145,036,000、Y=-19,985,000。
SD 10	南北方向	幅2.0×長さ3.6以上	0.1			坪内の東西1/2付近に位置する南北溝。溝心の国土座標値は、X=-145,030,000、Y=-19,986,300、S B 06より新しい。
SD 11	東西方向	幅0.5×長さ1.8	0.1			
SD 12	東西方向	幅0.6×長さ1.6	0.2			坪内の南北1/4付近に位置する区画溝の可能性あり。いずれもS B 04より新しい。
SD 13	東西方向	幅0.7×長さ1.6	0.2			
SD 14	南北方向	幅0.5~3.5×長さ12.8以上	0.1~0.3	8世紀後半~9世紀初頭	土師器・須恵器・黒色土器A類・黒書土器、軒丸瓦(型式不明)・埴	坪内の東西1/2付近に位置する南北溝。溝心の国土座標値は、X=-145,036,000、Y=-19,989,800、S E 18・19より新しい。
S K 15	隅丸方形	東西1.5×南北1.7	0.55	13世紀中頃~後半	瓦葺輪・皿、土師器羽釜、軒平瓦(6732K)・埴印平瓦(◎)・埴	S K 16・S B 03より新しい。
S K 16	隅丸方形	東西2.4以上×南北3.3	西壁際で1.2mまで確認	8世紀後半~	土師器杯皿類・甕	木材の破片等も出土。井戸枠の取残り穴の可能性あり。S K 15より古く、S B 03より新しい。

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	井戸枠		時期	主な出土遺物	備考
				構造	内法(m)			
SE 17	隅丸方形	東西2.1×南北1.5以上	隅形0.8 枠内0.9 まで確認	方形縦板組隅柱横棧留	一辺0.7	8世紀代	抜取り穴から土師器・須恵器	井戸枠は最下段の横棧よりはは抜取られている。
SE 18	隅丸不整方形	東西2.3×南北2.4	1.05	方形横板組	一辺1.3	8世紀後半~9世紀初頭	甕形…土師器・須恵器片枠内…土師器・須恵器・黒書土器、丸瓦・平瓦・埴、刀子形木製品	SE 19より新しい。
SE 19	不整方形	東西2.7×南北3.0	1.2	残存しない	—	8世紀代	土師器・須恵器・黒書土器、軒丸瓦(6281B・6281B A)軒平瓦(6664C)・埴	井戸枠は抜取られており残存しない。SE 18より古い。

(2) 平城京跡(右京一条二坊十三・十四坪)の調査 第665次

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では右京一条二坊十三坪の北西隅・同十四坪の南西隅と坪境小路にあたり、西二坊大路の東側に面する。地形的には秋篠川の沖積平野に位置する。現状は駐車場であるが、旧状は周辺より1.7m低い水田で、西二坊大路の遺存地割の水田との比高差はほとんどない。

十三坪内では、調査地の約70m南で市HJ第625次調査を実施し、地山上面(標高71.0m)で古墳時代前期の溝・土坑や奈良時代後半～平安時代初期の掘立柱建物・掘立柱礎・溝・井戸・土坑等を検出した。また、河川から弥生時代前期の土器が出土した¹⁾。十四坪内は未調査である。西二坊大路の遺存地割である水田で実施した市SD第14-2次調査では、耕土直下(標高70.0m前後)で江戸時代以前の河川を検出した²⁾。調査地も同様に低くなっていることから、坪境小路の位置を踏襲した河川の存在を想定した。

今回の調査は、十三・十四坪内の様相の確認と、古墳時代以前の遺構の確認を主な目的として実施した。

II 基本層序

駐車場に伴うアスファルト及び造成土(厚さ1.8～2.1m)、旧水田の耕土(厚さ0.1～0.3m)の下で沖積層の地山となる。地山上面の標高は69.7mである。

発掘区北東部では地山を1.6m掘り下げ、大別した層の層序が上から青灰色のシルト質粘土を主とするI層(厚さ0.9m)、黒灰色や暗灰色の粘土のII層(厚さ0.4m)、灰色砂質粘土のIII層となることを確認した。

なお、後述する河川1の底面下のI層下位に含まれる炭化材の¹⁴C年代測定で得られた年代値は、縄文時代中期後半の4,140±30年B.P.(補正)である。また、同II層上位で行った花粉分析では、コナラ属アカガシ亜属やコナラ属コナラ亜属等の樹木花粉が優占することがわかった(自然科学分析の項を参照)。

III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行い、縄文時代後期頃に埋没が進む河川1～3を検出したが、奈良時代の十三・十四坪に関連する遺構はなかった。

河川1・2は、幅2.0～3.5m、深さ0.5～1.2mで、発掘区南西隅で合流する。埋土の基本層序は上から灰色砂層、オリーブ灰色砂混粘土層、腐植を含む暗灰色粘土層、灰色砂層、腐植を多く含む灰オリーブ色シルト質粘土層やオリーブ茶灰色粘土層となる。

河川1の埋土のうち、腐植を含む暗灰色粘土層と腐植を多く含むオリーブ茶灰色粘土層で行った花粉分析では、コナラ属アカガシ亜属・コナラ属コナラ亜属やトリネコ属等の樹木花粉が優占することがわかった。また、後者の層の上面で採取した流木の¹⁴C年代測定で得られた年代値は、縄文時代後期後半にあたる3,310±30年B.P.(補正)である(自然科学分析の項を参照)。

発掘区西辺で検出した河川3は幅2.5m、深さ0.9mで、埋土は灰色のシルト質砂や砂礫である。

IV 出土遺物

旧水田の耕土から遺物整理箱1箱分の土器や丸・平瓦の細片が出土した。土器には、8世紀頃の土師器甕・須恵器甕と18～19世紀頃の肥前系磁器碗等がある。

なお、河川1～3と地山の出土遺物は無い。

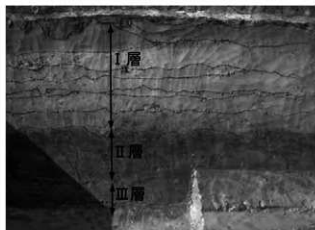
V 調査成果

奈良時代の平城京に関連する遺構は、江戸時代以降の切土によって消失していたことがわかった。

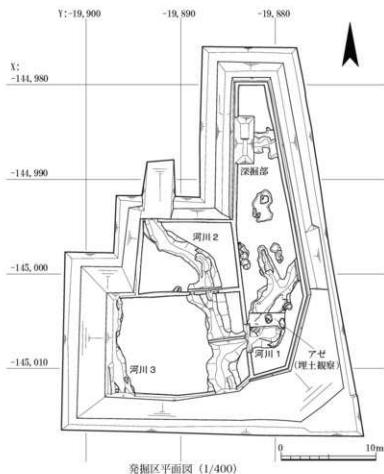
地山と河川の調査では、調査地付近が縄文時代中期後半から後期後半にかけては沼沢地や湿地で、同中期後半には秋篠川の沖積作用が盛んで砂泥が曝り返し堆積したが、その後沈静化し、同後期後半には浸食作用が進んで河川が形成されたことがわかった。花粉分析の結果からは、後背地がカシ林で、同後期後半には河川沿いにトネリコ等の湿地林が広がっていたことが推察できる。

地山や河川からの出土遺物が無いことや、南隣接地の市HJ第625次調査の成果から、調査地付近における人の活動は弥生時代前期以降と考えられる。(安井宣也)

- 1) 奈良市教育委員会「平城京跡(右京一条二坊十三坪)の調査第625次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成21年度』2012
- 2) 奈良市教育委員会「西大寺田境内の調査 第14-1-2次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成14年度』2006



発掘区北東部の地山土層断面(東から)



発掘区平面図 (1/400)



河川2北寄り完掘状態(北から)



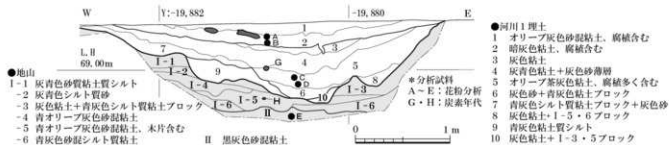
河川1・2完掘状態(北東から)



発掘区東半部(南から)



河川1アゼ南壁埋土断面(南から)



河川1アゼ南壁埋土断面図 (1/400)

2. 平城京跡（左京四条一坊六坪）調査 第657次調査

事業名 宅地造成
届出者名 個人
調査地 四条大路三丁目900番他

調査期間 平成24年5月9日～6月5日
調査面積 232.5㎡
調査担当者 原田香織

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京四条一坊六坪の南半部の中央西寄りにあたる。六坪で調査を実施するのは当調査が初めてであるが、周辺での調査結果は以下の通りである。

調査地の南約200mで実施した市HJ第65次調査(昭和59年度)では、左京五条一坊一坪において奈良時代前半～中頃には中心的建物と付属建物が検出され、当初は1坪を利用した宅地であったが、後に東隣の八坪を含む2坪以上利用した宅地に変遷したことが確認されている。また、北東約100mの市HJ第344次調査(平成7・8年度)では東一坊坊間路と四条条間路、北西約150mの市HJ第328次調査(平成7年度)では、朱雀大路・四条条間路と弥生時代の溝・河川、北西約200mの左京四条一坊二坪で実施した市HJ第609次調査(平成20年度)では、奈良時代の掘立柱建物・溝と古墳時代の溝・河川、西約100mの同三坪で実施した市第627次調査(平成21年度)では、奈良時代の掘立柱建物・溝と奈良時代以前の河川が検出されている。

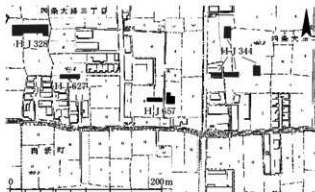
今回の調査は、六坪内の土地利用の様相と、平城京造営前の遺構の有無の確認を目的として、道路敷設予定地に、農業用水路を挟んで西・東の2カ所の発掘区を設定して実施した。

II 基本層序

上から耕土の暗灰色シルト・淡灰色砂質シルト(厚さ約0.2m)、床土の茶黄色粘質土(約0.05m)と続き、地表下0.2～0.3mで淡黄灰色シルト質粘土などの沖積層上面となる。ただし、西発掘区の一部ではこの上面に8世紀の土器類・瓦類を含む淡黄灰色砂混粘質シルトや灰黄色粘質シルト・シルト質粘土(0.05～0.2m)があり、奈良時代の整地土とみられる。

奈良時代の遺構面は沖積層及び整地土上面で、その標高は西から東へ向かってやや低くなり、西発掘区では約60.9～61.0m、東発掘区では約60.9mとなる。

なお西発掘区西端では、奈良時代の整地土直下で北西から南東に流れる河川の東岸寄り4.3m分を検出した。埋土は灰茶色シルト混砂で、深さは0.15m。さらにこの直下には茶灰色砂混シルト質粘土・粘土質砂で埋まる幅2m、



発掘区位置図 (1/5,000)

深さ0.2～0.3m程の河川が2条あり、東側の河川埋土から6世紀後半の土師器高杯・須恵器杯身が出土した。なお、底面の淡灰黄色粘質シルト～灰色砂はさらに東に広がっており、別の河川埋土の一部とみられる。この灰色砂から大和第VI様式の弥生土器大口壺・甕が出土した。

このほかにも、沖積層の表層部には所々で木炭や土器の細片が含まれる。

III 検出遺構

遺構検出は、奈良時代の遺構面である沖積層及び整地土上面と、整地土直下の沖積層上面で行った。

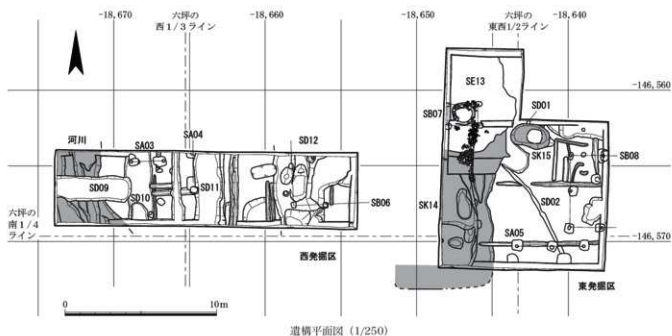
西発掘区では奈良～平安時代の掘立柱列2条(SA03・04)、掘立柱建物1棟(SB06)、溝4条(SD09～12)を検出した。東発掘区では古墳時代以前の溝2条(SD01・02)、奈良～平安時代の掘立柱列1条(SA05)、掘立柱建物2棟(SB07・08)、井戸1基(SE13)、土坑2(SK14・15)を検出した。規模などは表にまとめたが、概要は以下のとおりである。

古墳時代以前の遺構

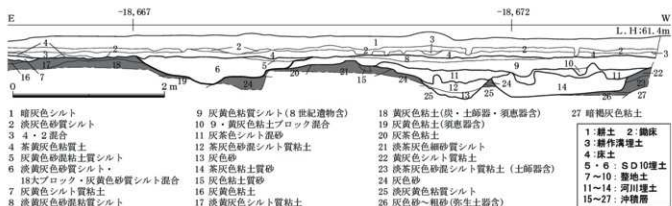
溝SD01・02 SD01は北北東から南南西に斜行する溝で、埋土は淡灰色砂である。重複関係からSK15より古い。SD02は北西から南東に斜行する溝で、埋土は2層あり、下層は淡灰色粘質シルト、上層は淡灰色砂である。重複関係からSA05より古い。どちらも出土遺物は無かったが、遺構の重複関係では奈良時代のものより古く、溝の軸が大きく振れることから古墳時代以前の遺構と判断した。

奈良～平安時代の遺構

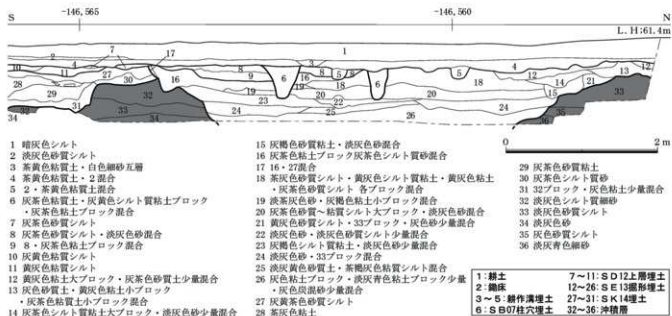
掘立柱列SA03 東西1間の柱列であることから門の可能性が高い。重複関係からSD10より新しい。



遺構平面図 (1/250)



西発掘区南壁土層図 (1/50)



東発掘区西壁土層図 (1/50)

2. 平城京跡(左京四條一坊六坪)第657次調査

遺構一覧表

遺構番号	掘方向	堀幅(間)	桁行全長		梁行全長		柱間寸法(m)		堀の出入	柱穴の深さ	備考
			(m)	(m)	(m)	(m)	(m)	(m)			
SA03	東西	1	2.1		2.1		2.1		0.45、0.47	門か、坪の西1/3ライン付近。S D 10より新	
SA04	南北	1以上	2.0以上		2.0		2.0		0.55、0.59	坪の西1/4ライン付近。S D 11より古	
SA05	東西	2以上	4.4以上		西から2.3-2.1				0.37～0.58	坪の南1/4ライン付近。西端は東西1/2ライン付近	
SB06	南北?	1以上+1以上	2.6以上	2.1以上	2.6	2.1			0.35～0.42	S D 12より新	
SB07	東西	1×1	2.0	1.4	2.0	1.4			0.50～0.62	S E 13に伴う礎屋	
SB08	東西	1以上×2	2.1以上	4.7	2.1	北から2.3-2.4				0.50～0.77	

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	時期	主な出土遺物	備考
S D 01	斜行溝	長さ0.3以上・幅約0.2	0.1	不明	遺物なし	S K 15より古
S D 02	斜行溝	長さ3.5以上・幅約0.2	0.1	不明	遺物なし	S A 05より古
S D 09	東西溝	長さ4.9以上・幅0.6	0.25	8世紀後半	土師器類A・杯小皿・高杯・甕、須恵器・杯小皿・杯蓋・甕A・甕・甕小鉢、須恵器杯A・杯皿・皿A・杯蓋・須恵器杯A・甕A・平瓦・埴、埴屋(上・中層)	南1/4ライン付近、S D 10より新
S D 10	南北溝	長さ5.0以上・幅1.6～1.8	北0.1～南0.3	8世紀	土師器杯小皿・甕、須恵器杯小皿・杯蓋・甕、丸瓦	西1/3ライン付近、S A 03・S D 09より古
S D 11	南北溝	長さ5.0以上・幅1.5～1.7	北0.3～南0.35	8世紀	土師器杯小皿・甕、須恵器杯B・杯小皿、丸瓦・平瓦	西1/3ライン付近、S A 04より新
S D 12	南北溝	長さ5.0以上・幅1.15～2.0	北0.4～南0.5	8世紀後半～9世紀初頭	土師器類A・杯小皿・皿A・杯小皿・杯蓋・高杯・鉢か・甕、須恵器杯AかB・杯小皿A・杯蓋・漆付甕・甕、丸瓦・平瓦・埴	S B 06より古
S K 14	長方形?	東西5.4以上7.2以下・南北10.2以上	0.65	8世紀半ば～9世紀初頭	(下層) 8世紀半ば～後半:土師器・杯小皿・皿A・杯蓋・高杯・埴、黒色土器A類、須恵器杯A・杯皿・皿A・杯蓋・須恵器杯A・甕A・平瓦・埴、埴屋(上・中層) 8世紀末～9世紀初頭:土師器類A・皿A・皿B・高杯・甕A・甕、黒色土器A類、須恵器杯A・杯B・杯L・皿A・皿C・杯蓋・甕・甕蓋・高杯・甕、製瓦土器、丸瓦、平瓦・埴、磚口	東西1/2ライン付近、S E 13より古
S K 15	楕円形	東西2.5・南北1.6	0.2	8世紀	土師器杯小皿、甕、須恵器甕、平瓦	S D 01より新

遺構番号	掘形			物		時期	主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	構造	内径(m)			
SE13	不整形	東西4.7以上・南北6.9以上	2.0以上	上段: 門形石積	(直径約0.8)	不明	[掘形] 8世紀: 土師器杯小皿・甕、須恵器甕、丸瓦(體・小體数) 8世紀末～9世紀初頭: 土師器類A・甕、黒色土器A類、須恵器杯A・杯B・皿C・杯蓋(飯用取あり)・片口鉢・甕・甕蓋、製瓦土器、丸瓦・平瓦・埴(約内) 9世紀後半～10世紀初頭: 黒色土器A類、土師器類A・皿A・杯蓋・高杯・甕、須恵器杯A・杯小皿B・杯蓋・甕小鉢・甕か・甕・甕蓋、製瓦土器、丸瓦・平瓦・埴	
				下段: 一木張り板葺	直径0.95			

掘立柱列 SA 04 南北1間以上の柱列で、西発掘区外北へ続くこととみられることから塀の可能性が高い。重複関係からSD11より古い。

掘立柱列 SA 05 東西2間以上の柱列で、東発掘区外東へ続く塀か、建物の北側柱列の一部である可能性がある。

掘立柱建物 SB 06 南北1間以上、東西1間以上の建物の南西隅部分あるいはL字型の塀と考えられ、西発掘区北東外へ続く。北方向でやや西に振れる。重複関係からSD12より新しい。

掘立柱建物 SB 07 東西1間、南北1間の建物で、位置から後述するSE13に伴う井戸屋形とみられる。柱穴は、礎敷を覆うSD12の埋土の上から掘られていることから、井戸構築当初にはなかったと考えられる。

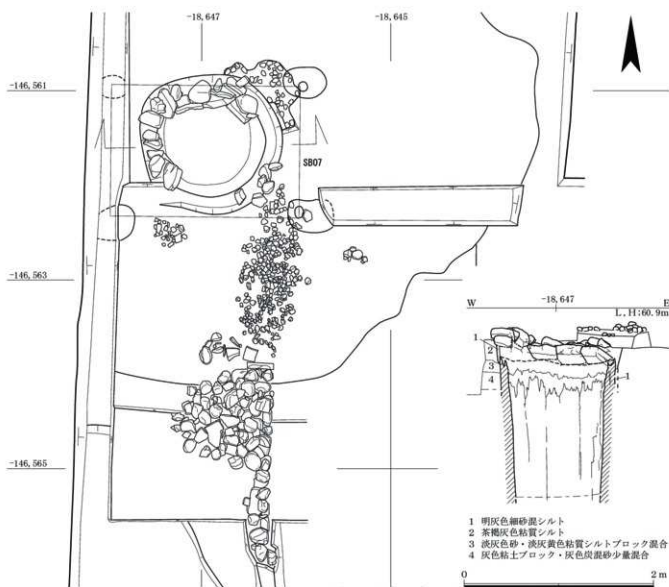
掘立柱建物 SB 08 桁行1間以上、梁行2間の東西棟建物の西部とみられる。柱穴の断面調査で、北側柱列の東の柱穴と南側柱列の西端の柱穴が同じ位置で掘り直

されていたことを確認したことから、建替えを伴う改修が行われたとみられる。

溝 SD 09 東西方向の溝で、西は西発掘区外に続き、東端はSA03の南面にかかる手前で終わる。溝底はほぼ水平である。埋土は灰色砂質土で、8世紀後半の土師類の破片などが出土した。重複関係からSD10より新しい。

溝 SD 10 南北方向の溝で、溝底は北から南に向かって低くなる。埋土は淡灰黄色砂質シルトと黄灰色粘土ブロックか混ざったもので、8世紀の土師類の破片などが少量出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。重複関係からSA03・SD09より古い。

溝 SD 11 南北方向の溝で、溝底は北から南に向かって低くなる。埋土は主に灰黄茶色シルト質粘土と淡灰色細砂の混合土で、底部には灰茶色シルト質粘土が堆積する。8世紀の土師類の破片が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。重複関係からSA04より新しい。



井戸SE15平面・断面図(部分、1/40)

溝SD12 南北方向の溝で、溝底は北から南に向かって低くなる。埋土は上下2層に大別でき、下層は茶灰色粘質土で、8世紀後半以降の土器類の破片などが出土した。上層は灰茶色砂混砂質シルト・灰黄色砂質～粘質シルトで、東肩を大きく浸食し、西発掘区東外へ広がる。土層観察からあふれた埋土の一部は、SE13の南半部からSK14上面に及ぶとみられる。上層埋土から8世紀後半～9世紀初頭の土器類の破片などが出土した。重複関係からSB06・07より古い。

井戸SE13 礎敷・井戸屋形SB07を伴う井戸で、掘形は大きく、北と西は東発掘区拡張区外に続いており全形は不明である。井戸枠は丸太を削り抜いたもので、その上部の西から北側にかけて、20～30cmほどの自然石を用いた円形の石組が一段残る。丸太材の上端はかなり腐朽しており、石組との接点はないが、北側には石組と

の間に埴か内側に倒れかけた状態で並んでいる。この部分については丸太材の外側に埴を立てて並べ、その上に石組を置いていたとみられる。

礎敷は2種類ある。一つは掘形上面に5cm大の小礎を敷いたもので、主に井戸枠の南側に残るが、もとは枠の周囲全体に敷かれていた可能性がある。上面の標高は60.7mで、石組の上面と揃う。もう一つは15cm大の礎と埴の破片を用いたもので、井戸枠の南側の小礎敷をはさんだ1.5mのところから、東西約1.0m、南北2.1mの範囲で残る。東辺は南北方向に直線的に揃えられ、小礎敷との境となる北辺の東端には埴を立てて埋め込んでいる。上面の標高は60.8～60.9mで小礎敷より一段高い。

枠内は検出面から約2.0mまで掘り下げた。上から0.6m下までの埋土は暗灰色シルト、0.6～1.25m下は礎敷に用いられていたとみられる15cm大の礎と埴の破



西発掘区全景(東から)



西発掘区全景(南西から)



東発掘区全景(北から)



SE13 礎墩部分(西から)



東発掘区拡張区(北から)

片で埋まっており、井戸廃棄時に意図的に抜き取られ枠内に投棄されたとみられる。1.25m以下の埋土は、腐植土と砂との互層で、土器などの遺物はほとんど含まれない。

掘形埋土から8世紀の土器類などが少量出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。礎墩には8世紀末～9世紀初頭の土器類などが含まれる。枠内の礎や埠で埋まった上面から9世紀後半～10世紀初頭の黒色土器A類碗が出土した。また重複関係から後述するSK14より新しい。よって、SE13は8世紀末～9世紀初頭に築かれ、最終的に平安時代前期に廃棄されたとみられる。

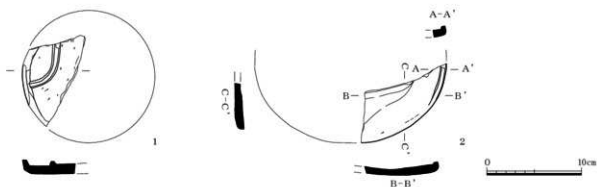
土坑SK14 大型の土坑で、北はSE13が重複して確認できず、南・西は東発掘区外に続くが、東・西発掘区のすぐ南で行われた擁壁工事の掘削部分の観察によって

南端が確認できた。深さは0.65m。埋土は3層に大別でき、下層は茶灰色粘土、中層は茶灰色砂質土、上層は灰黄茶色砂質シルトで、下層から8世紀半ば～後半の土器類、上・中層からは8世紀末～9世紀初頭の土器類などが出土した。重複関係からSE13より古い。

土坑SK15 平面楕円形の土坑で、埋土は灰茶色砂質シルトである。8世紀の土器類などが少量出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。中央付近に上面から別の土坑が掘り込まれている。

IV 出土遺物

遺物整理箱39箱分ある。大半が奈良時代の土器・瓦類だが、河川や各遺構から出土した弥生～古墳時代の土器類も多く含まれる。これらの中に陶甎の破片が2点あ



陶器実測図(1/4)

り、図示した。

1は直径14cmの円形に復元できることから円形硯とみられる。破片の大きさは9.7×6.7cm、残存高1.5cmで、全体の1/5ほどが残る。外堤側面から硯面にかけては自然軸が厚くなるため調整は不明。海部はナデ、硯部はケズリで調整し、内堤を貼付ける。硯部は外堤の際近くまでほぼ全面に使用痕跡がみられる。SD12上層埋土から出土した。

2は風字硯とみられるもので、破片の大きさは5.5×9.0cm、残存高1.75cmである。幅は20cm前後に復元できるが、全長は不明。平面形は楕円形状になると思われる。外堤側面から硯面にかけては自然軸が厚くなるため調整は不明。硯面は中央部をやや窪ませて全体をナデで調整する。使用痕跡は窪み部分を中心とみられる。SD11上面の耕作溝から8世紀の土器類・瓦類とともに出土した。

また、今回の調査では埴の破片が113点出土した。このうちSD12上層埋土から46点、SE13の礎敷や枳材及び枳内から40点出土した。埴には2種類の規格があり、1辺が30cm前後の1尺角の正方形のものと、短辺が15cm前後の半尺の長方形のものがある。厚さはどちらも6～7cm前後である。転用材として各所から集められたものの可能性が高いが、宮や寺院以外からこれほどの量がまとまって出土することは珍しい。

V 調査所見

今回の調査で得られた成果は以下のとおりである。

まず、平城京造営前の遺構については、SD01・02を検出したが時期は不明である。西発掘区西端で検出した河川の出土遺物から、付近に弥生時代後期後半及び古墳時代後期後半の遺跡が存在することが推察できる。市HJ第328次調査で弥生時代後期末の河川が検出されており、関連する可能性がある。

また、六坪内の土地利用の様相については、これを検討するためのいくつかの手掛かりが得られた。

市HJ第344次調査で確認した東一坊坊間路の道路心座標を基準に潮出した六坪の東西1/2ライン付近に、SK14の掘形の東肩、SA05の西端の柱穴が位置する。同様に潮出した西1/3ライン付近に、門の可能性のある掘立柱列SA03、塼の可能性のある掘立柱列SA04、南北溝SD10・11がある。また、市HJ第344次調査で確認した四条条間路の路心から潮出した六坪の南1/4ラインの付近には、東西溝SD09とその延長線上に掘立柱列SA04の南端の柱穴、掘立柱列SA05がある。以上の点から、六坪南半部が東西1/2や1/3、南北1/4に区画して使い分けられていた可能性が考えられる。遺構の重複関係から最低2時期以上の変遷があったことがうかがえる。

さらに、平安時代の遺構として井戸SE13を検出した。SE13と同様に礎敷を伴う井戸は、平城宮・平城京で以下の例がある。

- ①国平城第241次調査(平城宮造酒司地区)¹⁾
SE15800(井戸枳:丸太削り抜き、井戸屋形あり)
- ②市HJ第331次調査(左京四条四坊十二坪)
SE66(井戸枳:方形横板組)
- ③市HJ第335次調査(左京四条四坊十二坪)
SE67(井戸枳:丸太削り抜き)
- ④市HJ第440次調査(左京一条三坊十三坪)
SE12(井戸枳:井籠組)
- ⑤市HJ第520次調査(左京一条三坊五坪)
SE05(井戸枳:方形横板組)

①～③は奈良時代後半頃、④・⑤は平安時代前半頃のものである。②～⑤は大型の掘立柱建物に伴うことから、貴族の邸宅あるいは公的機関に伴うと考えられる。今回出土した陶器についても貴族の邸宅や公的機関から出土することが多く、このことから9世紀代にこの地域に上記のような邸宅や施設が存在する可能性が高いと考えられる。

(原田香織)

1) 奈良国立文化財研究所「1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報」1994

3. 平城京跡 (左京五条六坊九坪)・奈良町遺跡の調査 第 658 次

事業名 賃貸住宅新築

届出者名 個人

調査地 奈良市南城戸町 56 の一部、南袋町 17・18 の各一部

調査期間 平成 24 年 5 月 28 日～6 月 6 日

調査面積 50㎡

調査担当者 大原 瞳・安井宣也

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると左京五条六坊九坪の北西隅にあたる。中・近世の奈良町遺跡の一面で、南城戸町と南袋町との町境付近にあたる。

近接地で過去に実施した調査が少ないことから、建物予定地で遺構の遺存状態を確認するために試掘調査（市 2012-1 次調査）を実施した。その結果、北西部の 3ヶ所の試掘坑で 17 世紀に埋没した池の跡を確認したことから、遺構が残ると判断した部分に南・北 2ヶ所の発掘区を設定し、調査を実施した。

II 基本簡序

上から黒褐色土（近・現代の造成土、厚さ 0.3～0.5 m）、暗灰褐色土や灰褐色土（厚さ 0.2～0.4 m）と続き、北発掘区では現地表下約 0.5 m で黄褐色粘質土、南発掘区では同約 0.9 m で黄褐色礫土の地山に至る。

地山上面は江戸時代以前の遺構面で、一覧表で記す 17～18 世紀の SK06・07 が地山上面から掘削されていることを南発掘区西壁の土層観察で確認している。その標高は北発掘区が 74.1 m、南発掘区が 74.3 m である。

III 検出遺構

北・南発掘区とも地山上面で遺構検出を行い、江戸時代の土坑を検出した。概要は一覧表の通りである。

なお、奈良時代の平城京に関連する遺構はなかった。

IV 出土遺物

遺物整理箱で 12 箱分ある。大半が江戸時代の土器類で、他に平安時代以降の瓦類がある。

土器類には 17 世紀前半～19 世紀代のものがあり、土器には土師器皿・炮烙、瓦質土器鉢、陶磁器には肥前産碗・皿、信楽産播鉢がある。

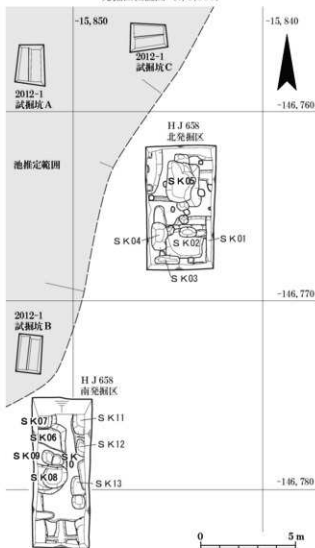
V 調査所見

今回の調査では、17 世紀後半～18 世紀の土坑を主とした江戸時代の町屋の様相を示す遺構を検出した。遺構の検出状態から、調査地周辺の町屋は 17 世紀後半に形成され、池の埋め立てを伴う大がかりな敷地造成を伴ったことがうかがえる。

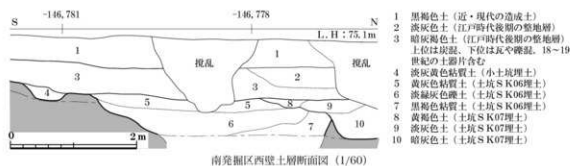
奈良時代の平城京に関しては、空閑地であったか、後世の造成の際に消失した可能性がある。（安井宣也）



発掘区位置図 (1/5,000)



HJ 第 658 次・試掘 2012-1 次調査 遺構平面図 (1/200)



北発掘区 (南から)



南発掘区 (南東から)

遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
SK01	方形	南北 2.4 以上・東西 0.3 以上	0.3	17 世紀後半	国産陶磁器 (肥前産碗・皿、瀬戸美濃産碗、信楽産插鉢)、平瓦・丸瓦	
SK02	方形	南北 1.6・東西 2.0	0.1 ~ 0.2	17 世紀後半	土師器皿・炮烙、瓦質土器、国産陶磁器 (肥前産碗か皿、瀬戸美濃産碗)、平瓦・丸瓦	
SK03	槽門形	南北 0.5・東西 1.3	0.2	17 世紀後半~18 世紀	土師器 (皿・炮烙)、国産陶磁器 (肥前産碗)	重複関係から SK02 より新
SK04	槽門形	南北 1.5・東西 0.8	0.6	18 世紀前半	土師器皿、瓦質土器、国産陶磁器 (肥前産碗・信楽産插鉢)	重複関係から SK02 より新
SK05	方形	南北 2.2・東西 1.5	0.5 以上	18-19 世紀	土師器皿・炮烙、瓦質土器鉢、国産陶磁器 (肥前産碗・皿、信楽産插鉢、瀬戸美濃産皿)、軒平瓦・丸瓦・平瓦	
SK06	方形	南北 3.7・東西 1.5 以上	0.5	17 世紀中頃~後半	土師器皿・炮烙、瓦質土器深鉢、国産陶磁器 (肥前産碗)、軒平瓦・丸瓦・平瓦	
SK07	槽門形	南北 0.6 以上・東西 1.0 以上	0.3	18 世紀前半	土師器皿・炮烙、瓦質土器深鉢、国産陶磁器 (肥前産碗)、軒平瓦・丸瓦・平瓦	重複関係から SK06 より新
SK08	槽門形	南北 1.2・東西 1.3	0.3	18 世紀前半	土師器皿・炮烙、瓦質土器、国産陶磁器 (肥前産碗・大皿・盤、信楽産插鉢)、軒丸瓦 (右三巴紋)	重複関係から SK06 より新
SK09	槽門形	南北 0.6・東西 0.6	0.6 以上	18 世紀代	土師器皿、瓦質土器、国産陶磁器 (信楽産插鉢)、平瓦・丸瓦	重複関係から SK08 より新
SK10	槽門形	南北 0.6・東西 0.6	0.2	18 世紀代	土師器皿、瓦質土器、国産陶磁器 (肥前産碗、信楽産插鉢)	重複関係から SK09 より新
SK11	槽門形	南北 1.1 以上・東西 0.6 以上	0.2	18 世紀前半	土師器皿・炮烙、瓦質土器 (鉢)、国産陶磁器 (肥前産碗・蓋、信楽産插鉢)	
SK12	不整形	南北 0.9・東西 0.5 以上	0.3	18 世紀代	土師器皿・炮烙、瓦質土器、国産陶磁器 (肥前産碗、信楽産插鉢)、軒丸瓦 (左三巴紋)	
SK13	槽門形	南北 1.1・東西 0.8	0.2	18 世紀代	土師器皿・炮烙、瓦質土器 (蓋)、国産陶磁器 (肥前産碗、信楽産插鉢)、平瓦	

4. 平城京跡（右京二条三坊十四坪）の調査 第659次

事業名	宅地造成	調査期間	平成24年5月23日～5月31日
届出者名	株式会社 栗実住宅	調査面積	99㎡
調査地	奈良市青野町111-1他	調査担当者	池田裕英

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原によると右京二条三坊十四坪の西辺中央にあたる。この十四坪で発掘調査を行うのは初めてであるが、調査地の東約100mの地域では近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴い、発掘調査を継続して行っており、縄文～中世の遺構が数多く見つかっている。

当該地は平城京西辺の丘陵地に位置する。西隣接地とは約2m、北隣接地とは約1mの比高差がある周囲に比べて低い土地で、南隣接地には「藤ノ谷」との字名も残る。これらのことから、遺跡が削平されている、あるいは谷のため遺跡が存在しない可能性を考慮し、事前に遺構の有無を確認するための試掘調査を行った（市2012-2次）。試掘調査は敷地の東端部と西端部とに2箇所を発掘区を設けて行った。その結果、奈良時代の柱穴や土坑を検出し、遺構が残存することが明らかとなったため、発掘調査を実施したものである。調査は宅地造成の道路敷設予定地に東西33m、南北3m（面積99㎡）の発掘区を設定して行った。

II 基本層序

調査地の旧地形は北西から南西方向に下る丘陵縁辺の傾斜地であったようで、発掘区中央から南寄りには南に向かって緩く傾斜している。

発掘区の層序は、発掘区北半では暗灰茶色土（旧耕土・土層図2）を除去すると現地表下0.2mで茶黄色土（15）の地山にいたる。発掘区ほぼ中央から南は暗茶灰色土の下に褐灰色砂質土（3）、暗茶黄色土（4）と続き、現地表下0.4mで茶黄色土（15）の地山にいたる。地山上面の標高は75.5～75.7mである。遺構は全て地山

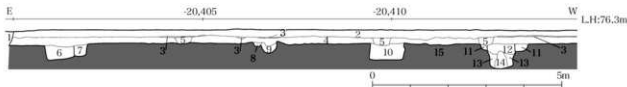


発掘区位置図 (1/5,000)

上面で検出した。暗茶黄色土（4）には地山の茶黄色土が混入することや後述する柱穴の深さからみて、遺構面は幾分削平を受けているようである。

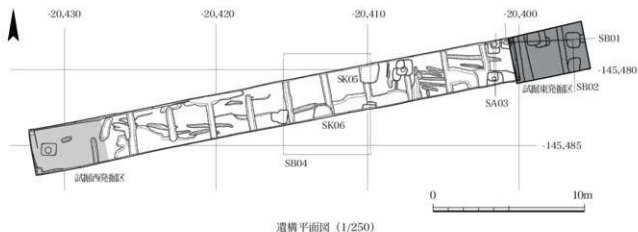
III 検出遺構

検出した遺構は奈良時代の掘立柱建物、掘立柱列、土坑である。SB01は東西2間分（4.8m）を検出した。柱間は2.4m（8尺）等間である。掘立柱建物の南北棟建物の南妻もしくは東西棟建物の南西隅部と思われる。SB02は桁行1間（2.4m）以上、梁行2間（4.8m）の南北棟建物で、柱間は2.4m（8尺）である。柱穴の平面規模は概ね一辺0.8mと比較的大きく、残存した深さは0.3mである。SA03は南北方向の掘立柱列で、柱間は2.4m（8尺）である。SB04は南北棟建物の一部と思われる。東西方向の柱穴の間隔が6.0mであることから、東西2間、柱間3.0m（10尺）の建物と考えたい。SK05は東西1.3m、南北1.3m以上、深さ0.4mである。埋土から奈良時代の土師器杯、須恵器杯蓋、杯B、皿A、甕片が出土したがいずれも小片で時期は特定できない。SK06は東西1.3m、南北0.8m以上、深さ0.4mの土



- | | | |
|----------------|-------------------|-------------------|
| 1 試掘トレンチ埋め立て土 | 6 褐灰色土・茶黄色土混合土 | 11 灰褐色土・茶黄色粘土混合土 |
| 2 暗茶色土（旧耕土） | 7 暗褐色土・茶黄色土混合土 | 12 暗茶褐色土・粘黄色粘土混合土 |
| 3 褐灰色砂質土 | 8 暗褐色土・暗褐色土混合土 | 13 暗褐色粘土（暗褐色土混じる） |
| 4 暗茶黄色土 | 9 褐灰色土・暗茶黄色土混合土 | 14 暗灰色土 |
| 5 灰褐色土・茶黄色土混合土 | 10 暗灰茶色土（暗褐色土混じる） | 15 茶黄色土（地山） |

発掘区南壁土層図 (1/100)



遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模 (間)		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		礎の出 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
		桁行 × 梁行	間			桁行	梁行			
SB01	不明	東西2間以上		4.8	-	2.4	-	-	0.2	
SK02	南北	2以上 × 2		2.4以上	4.8	2.4	2.4	-	0.3	
SA03	南北	2以上		2.4以上	-	2.4	-	-	0.2	
SB04	南北	不明		不明	6.0	不明	3.0	-	0.2	

遺構番号	敷形			主な出土遺物	備考
	平面形	平面規模 (m)	深さ (m)		
SK05	隅丸方形	1.3以上 × 1.3	0.4	奈良時代土師器杯、須恵器杯蓋・杯B・皿A・甕	
SK06	楕円形	0.8以上 × 1.3	0.4	奈良時代土師器 (器種不明)	

坑である。埋土から奈良時代の土器片が出土したが小片のため詳細な時期は不明である。

IV 出土遺物

本調査で出土した遺物は整理箱で1箱に満たない。奈



発掘区全景 (東から)

良時代の土師器 (器種不明の食器類・甕)、須恵器 (杯・杯蓋・皿・壺・甕)、丸瓦、平瓦、鎌倉～室町時代の瓦器椀、輸入青磁 (龍泉窯系)、輸入白磁 (華南産) があるが、いずれも小片である。輸入青磁・白磁は包含層からの出土である。

V 調査所見

本調査では奈良時代の掘立柱建物、掘立柱列、土坑を検出した。発掘区の南北幅が狭く、建物の規模等は不明であるが、宅地として利用されていたことは確実である。平安時代以降の遺構はなく、長岡京遷都以降水田化が進んだものと思われる。水田耕作に伴う素掘溝からは鎌倉時代から室町時代の瓦器片が出土しているものもあるが、国土方取方位にほぼ一致するものと方位北でやや西に傾き、地割と直行する南北溝もある。後者は現在の東で北に振った地割が施工されてから以降のものであろうが、時期が判明する遺物が出土していないため、それがいつ頃であったのかは不明である。地割が傾く理由としては旧地形や耕作に伴う水利の影響が考えられよう。

平城京西辺は尾根と谷が入り組んでおり、当時の程度宅地として利用されたのがよくわからない地域でもある。今回の調査では掘立柱建物や柱列を検出することができ、従来調査事例が少なかった平城京西辺の丘陵地での居住地の様相、また、平城京廃絶後ほどなく水田化した様子を明らかにすることができた。(池田裕英)

5. 平城京跡（左京二条大路）の調査 第660次

事業名 二条線地方特定道路整備事業
届出者名 奈良市長
調査地 奈良市芝辻町三丁目内

調査期間 平成24年6月18日～7月5日
調査面積 12.5㎡
調査担当者 三好美穂

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では左京の二条大路（二条五坊五坪付近）の路面上に該当する。周辺では、二条大路北側溝や東五坊間路などの条坊関連遺構を検出している。さらに、調査地西100m地点で弥生時代後期後半の弥生土器を含む河川を確認している。こうした成果を踏まえて、奈良時代およびそれ以前の遺構の様相把握を目的として調査を実施した。

II 基本層序

発掘区内の基本層序は、約1.0mの造成土以下、黒灰色粘土（厚さ約0.2m・旧耕作土）、灰色砂および小石混じりの青灰色粘土（厚さ約0.1m）と続き、表土から約1.3mで青灰色粘土（標高約68.5m）の地山となる。

III 検出遺構

地上上面で、土坑2、小穴3個を検出した。SK01は、東西2.7m、南北1.1m以上の平面方形で、深さは0.5～0.65mを測る。埋土は上下2層に分かれ、上層は青灰色粘土混じりの灰色砂（約0.1m）、下層は暗灰色粘砂（0.5～0.65m）である。肩部はほぼ垂直に掘られており、土坑底は凹凸状で北端中央部が約0.65mと深い。SK02は、SK01の東肩と接して検出したもので、東西0.25m以上、南北1.1mの方形で、深さは約0.2m。埋土は黒灰色粘土で、出土遺物はない。SK01・02は、埋土や掘形の形状がよく似ており、同一時期に掘削されたものと考えられる。この他に、発掘区の南端で小穴を3個検出した。いずれも径約0.2m、深さは約0.1mである。柱痕跡は検出できず、出土遺物もない。

IV 出土遺物

遺物はすべて小片で、主にSK01から出土した。SK01から弥生土器、5世紀中頃の円筒埴輪、8世紀代の土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯A・皿A・壺・甕、丸瓦、平瓦、17世紀代以降の土師器皿、陶磁器が少量出土。

V 調査所見

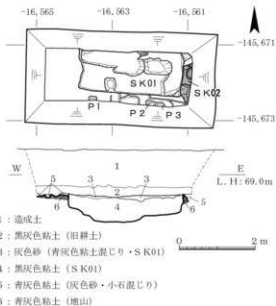
過去の調査成果から、本発掘区は二条大路の路面上に位置していると考えられるが、路面の整地などの痕跡は確認できなかった。土坑は掘方の形状から江戸時代の粘土採掘坑と考える。また、円筒埴輪が出土しており、周辺には古墳が存在していた可能性がある。（三好美穂）



発掘区位置図 (1/5,000)



発掘区全景（西から）



遺構平面図・発掘区北壁土層図 (1/100)

6. 平城京跡（左京六条三坊十六坪）の調査 第 662 次

事業名 宅地造成

届出者名 株式会社八州エイジェント

調査地 奈良市大安寺三丁目 99-1 他

調査期間 平成 24 年 7 月 30 日～8 月 2 日

調査面積 140m²

調査担当者 池田裕英

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では、左京六条三坊十六坪にあたる。十六坪内では昭和 60 年に本市が東三坊大路とその西側溝の検出を目的に HJ 第 87 次調査を行ったが、西側溝を特定するには至らなかった。

II 基本層序

発掘区内の層序は、造成土である黄色シルト質粘土(土層図 1) 以下、黒褐色砂質シルト(2)と続き、現地表面下 1.3 m で灰オリーブ色砂(3)にいたる。この砂層以下 0.6 m まで掘り下げたところ、砂やシルト、粘土層が続き、発掘区全体が河川であると判断した。

III 検出遺構

発掘区全体が河川で、南北幅 6.5 m 以上ある。堆積土からは 8 世紀～16 世紀までの土器、陶器片が出土した。これらの遺物から、8 世紀にはこの場所に河川があり、16 世紀頃に埋没したと考える。

IV 出土遺物

河川の堆積土から 8 世紀の土師器・須恵器片、丸瓦・平瓦片の他、13 世紀の瓦器片や 16 世紀の陶器片が出土した。いずれも小片のため、詳細な時期は不明である。

V 調査所見

本調査地の北に流れる水路は五条大路南側溝の遺存地溝とみられるが、それに近接する位置で南北幅 6.5 m 以上の河川を発見した。この河川が南側溝にあたるかどうかは現時点ではわからない。調査地の西約 200 m には

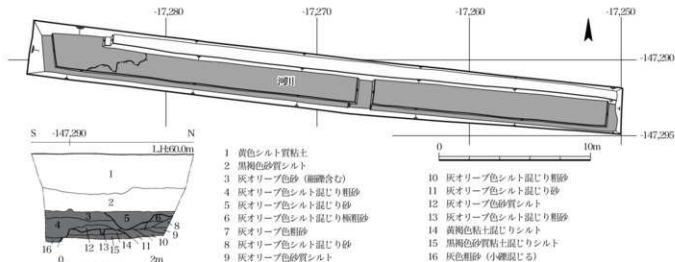


発掘区位置図 (1/5,000)

平城京の東堀河があり、地形の高低差からみてそこへ注いだ可能性が高いと考える。また、平成 2 年度に本調査地の東約 700 m で実施した HJ 第 195 次調査では五条大路南側溝が想定される位置で幅 17 m 以上の東西方向の溝を検出しており、関連に留意したい。(池田裕英)



発掘区全景(西から)



遺構平面図 (1/250)・西壁土層図 (1/80)

7. 平城京跡（左京三条五坊八・九坪）の調査 第661次

事業名 油阪佐保山線地方特定道路整備事業
届出者 奈良市長
調査地 奈良市芝辻町内

調査期間 平成24年7月5日～9月14日
調査面積 約55㎡
調査担当者 三好美穂

I はじめに

今回の届出地は、旧市街がある断丘の西縁部から西側平野部分へとさしかかる付近に該当しており、敷地の東側と西側では約3.5mの標高差がある。西側の低い場所はJR関西線路があったところで、JR奈良駅連立立体事業に伴い線路は西隣へ高架化され、現在は側道用地になっている。

平城京条坊复原では、左京三条五坊八・九坪内に想定される場所に該当し、調査地周辺では、奈良県教育委員会の調査¹⁾によって、二条大路北側溝や三条条間北小路などの条坊関連遺構や奈良～平安時代の建物や井戸などが検出されている。

こうした成果を踏まえて、本調査では奈良時代の宅地の利用状況を目的として、東側の高い箇所に東発掘区（東西3.0m、南北5.0m）、西側の低い箇所に西発掘区（東西2.0m、南北20.0m）を設定し実施した。

II 基本層序

東発掘区 発掘区内の基本層序は、約1.3mの造成土以下、暗褐色土（約0.1m・旧耕作土）、明褐色礫土（約0.6m）、褐色礫（約0.2m）、黒褐色砂混じりの褐色礫（約0.2～0.4m）、茶灰色粘土（0.1m）、灰白色粘土と続く。

西発掘区 表土は約0.4mの厚さで改良されており、その下は一律ではないが、発掘区東半では黄褐色粘土（約0.2m・現代盛土）があり、表土下約0.6mで褐色系の礫層に至り、2.0m以上続く。

発掘区中央部付近では、改良土の直下が褐色礫（約0.8m）となり、表土下約1.0～1.4mで灰白色シルトに至る。礫層は、周辺の調査成果²⁾からみても断丘を形成している層であると考えられ、少なくとも西発掘区まで段丘が広がっていることがわかる。

III 検出遺構

東発掘区 地表面から約2.5m掘り下げたが、現代の窺丸、旧耕土層および遺物包含層を確認しただけで遺構を検出するまでには至らなかった。

旧耕土以下の堆積土は、後世に段丘上を開発する際に造成されたものと考えられる。円筒埴輪片や8～9世紀、15世紀、18世紀以降の土器が若干含まれていた。



発掘区位置図 (1/5,000)

西発掘区 断丘礫層である褐色礫土上で遺構検出作業をおこなったが、遺構を検出することはできず、出土遺物もなかった。おそらく、旧国鉄の軌道敷建設または撤去する際に遺構面は削平されたものとみられる。

IV 出土遺物

東発掘区の第7層明褐色礫層から13世紀代瓦器・土師器皿、8～9世紀代平瓦が、第9層黒褐色砂混じりの褐色礫層から5世紀中頃の円筒埴輪、8～9世紀代の須恵器甕、9世紀代土師器皿A、15世紀以降瓦質土器、18世紀以降の肥前系磁器碗が出土した。いずれも小片で少量である。

V 調査所見

届出地の2箇所に発掘区を設けて調査を実施したが奈良時代の遺構を検出することはできなかった。

東発掘区では、18世紀以降の造成土の上で耕作土を確認した。調査地北東部50m地点での発掘調査²⁾成果により、鎌倉～江戸時代には広く畑地として利用されていたことがわかっていく。少なくとも江戸時代には、本調査地まで畑地が続いていることが理解できた。

しかし、発掘区が狭小であったため、遺構面や地山を確認することができず、奈良時代当時は宅地内をどのように利用していたのかは不明である。（三好美穂）

- 注
- 1) 「三条五坊七・八坪の調査」『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）2001年度』奈良県立橿原考古学研究所
 - 2) 「平城京跡（左京二条五坊五・十二坪）の調査 第444・448・456次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成13年度』奈良市教育委員会



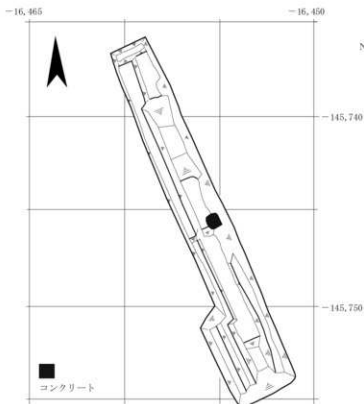
東発掘区平面図・東壁土層図 (1/200)



東発掘区全景 (北から)



西発掘区全景 (南から)



西発掘区平面・東壁中央土層図 (1/200)

8. 平城京跡（左京二条六坊一坪）の調査 第664次

事業名	校舎改築	調査期間	平成24年10月1日～10月18日
届出者名	学校法人奈良育英学園	調査面積	約120㎡
調査地	奈良市法連町1000-1番地他12筆	調査担当者	三好美穂

I はじめに

奈良育英学園校地は、平城京条坊復原によると、左京二条六坊のうち、一・二・七・八坪にあたる。今回の調査地は、このうちの一坪の北半部に相当する地点である。また、中世には東大寺郷と南都七郷の西にある興福寺一乗院門跡郷に含まれる場所でもある。校地内では、これまでに奈良県教育委員会が3回の発掘調査を実施し、奈良時代から近世の遺構を確認している。本調査地の北隣で実施された2006年度の調査では、奈良時代の遺構は検出されなかったが、平安時代時代から鎌倉時代の大溝や井戸などが見つかり、興福寺一乗院門跡郷の土地利用を考える上での新資料を得ている。今回の調査は、奈良時代の宅地や鎌倉時代の土地の利用状況を把握することを目的とし、旧校舎の基礎で壊されていた部分を選び、東西24m、南北5mの発掘区を設定して実施した。

II 基本層序

発掘区内においても旧校舎の建設および解体に伴う攪乱が多く認められ、遺構面が完全に壊されている箇所もあったが、基本的には、厚さ約1.0mの造成土・攪乱土の下に、暗褐色土（旧耕土）、黄茶褐色砂質土・鉄分が多く含まれた淡茶褐色砂・橙褐色土（床土）があり、発掘区西端では耕土・床土直下で遺構面である黄褐色粘土（標高約72.3m）になる。厚さ約0.7mの黄褐色粘土の下には砂礫層があり、西壁沿いで約0.4mまで掘下げたが出土遺物はなかった。発掘区東端から発掘区中央部付近までは、旧耕土の下が、灰色粘土ブロックを含む橙褐色土、灰色粘土と続き、小石混じりの灰色粘土。この下が河川氾濫層（検出面の標高73.0m）となる。基本的に灰色系粘土・シルトの互層で、木屑や8世紀代の土師器・須恵器、12～13世紀前半の土師器・瓦器が少量含まれていた。さらに河川氾濫層の下には、河川内の堆積層と考えられる灰色粗砂があり、発掘区西端まで続く様相を見せている。湧水が著しく河底まで掘下げられなかった。

III 検出遺構

遺構検出は、第16・26・27層および黄褐色粘土直上でおこなった。検出した主な遺構には、第26層上面で土坑（SK06）1、素掘溝1条、黄褐色粘土直上では12



発掘区位置図（1/5,000）

～13世紀の土坑（SK01～05）5、性格不明の遺構（SX07・08）がある。SK01・03～05は粘土を掘りこんでいることから、粘土の探掘を目的としたものと考えられる。本調査においても奈良時代の遺構は無かった。

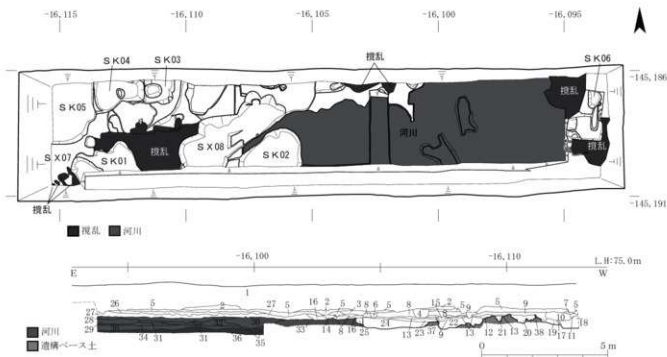
IV 出土遺物

遺物には、サヌカイト片、円筒埴輪片、6世紀代の須恵器片、8世紀代の土師器・須恵器片、丸瓦・平瓦、9世紀中～後半の灰釉陶器片、12～13世紀代の土師器・瓦器、軒丸瓦・軒平瓦、埴、種子か遺物整理箱で3箱分ある。量的には12～13世紀代の土器が主体を占めている。8～9世紀代の土器は、中世の土坑、河川氾濫層や攪乱から少量出土した。軒瓦には、左巻三巴紋軒丸瓦（1）1点、唐草紋軒平瓦（2）1点、軒平瓦の段頸片2点がある。いずれも平安時代以降のものと考えられる。

V 調査所見

奈良時代の遺構を検出することができなかったため、一坪内の利用状況は不明である。

平安～鎌倉時代については、粘土探掘坑を検出しただけで、建物や井戸などの遺構を確認することはできなかった。河川の氾濫により遺構が失われた可能性もあるが、これまでの奈良県教育委員会の調査成果からみても、遺構の密度は希薄である。ただ、瓦類が一定量出土していることから、近くには瓦葺きの家屋があったことが窺われる。調査地周辺は、興福寺一乗院門跡郷の緑辺部に位置すると思われ、もとより家屋などは少ない場所だったのであろう。河川の氾濫跡は、その後浸地となり、水田化していったようである。（三好美穂）



- | | | |
|----------------------|-------------------------|-----------------------------------|
| 1: 造成土 | 14: 灰色砂 | 27: 灰色粘土 (Fe 多い) |
| 2: 暗褐色土 (粘土) | 15: 黄褐色粘土+黒灰色砂 | 28: 灰色粘土 (小石多い) |
| 3: 褐色土 | 16: 淡灰色粘土 (Fe 分多い) | 29: 淡黒灰色粘土 |
| 4: 暗茶褐色土 | 17: 暗灰色粘土 | 30: 灰色砂 (淡黄褐色粘土ブロック混じる) |
| 5: 暗褐色土 (粘土) | 18: 暗黄色粘土 (粗砂混じる・SX07) | 31: 黒灰色粘土 (木屑含む) |
| 6: 褐色砂 | 19: 黄褐色粘土 (SK01) | 32: 暗黄灰色粘土 |
| 7: 褐色土 | 20: 暗黄色粘土+灰色粘土 (炭混じる) | 33: 灰色砂 (淡灰色粘土ブロック含む) |
| 8: 黄茶褐色砂質土 (床土) | 21: 灰色粘土 | 34: オリーブ灰色シルト |
| 9: 淡茶褐色砂 (床土・Fe 分多い) | 22: 黒灰色砂+茶褐色土 (SX08) | 35: 灰色シルト+灰色細砂・互層 (28~35: 河川内堆積土) |
| 10: 暗黄褐色粘土+褐色粘土ブロック | 23: 黄褐色粘土+灰色砂 | 36: 灰色粗砂 (下層河川内堆積土) |
| 11: 茶褐色砂 | 24: オリーブ灰色粘土+灰色砂 (SK02) | 37: 淡茶褐色粘土 (遺構面) |
| 12: 灰色粘土+黒灰色粘土 | 25: 暗灰色砂 | 38: 黄褐色粘土 (遺構面) |
| 13: 明褐色粘土 | 26: 橙褐色土+灰色粘土 (Fe 多い) | |

遺構平面図・南壁土層図 (1/150)

遺構一覧表

遺構番号	平面形等	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SK01	—	東西0.7× 南北1.1以上	0.5		出土遺物なし。	重複関係からSX07よりも古い。
SK02	—	東西2.6× 南北1.5以上	0.35	13世紀前半	円筒埴輪片、8世紀代須恵器杯B・甕、丸瓦・平瓦片 13世紀前半土師器皿・甕、 瓦器輪片	重複関係から河川よりも新しい。
SK03	—	東西1.2× 南北1.0以上	0.2	13世紀代?	土師器皿片	壁方の中央部が楕円形状に窪む。
SK04	—	東西2.0× 南北1.25以上	0.1		弥生土器片、瓦片	
SK05	—	東西1.65以上× 南北2.55以上	0.3		出土遺物なし	底部は平坦で、掘方壁面も垂直に掘られている。
SK06	楕円形	東西0.5× 南北0.6以上	0.1~0.3	13世紀以降	8世紀代土師器皿・甕片、 平瓦片、13世紀代瓦器輪	層位関係から河川よりも新しい。
SX07	—	東西1.15× 南北1.0	0.2	12世紀代	6世紀土師器壺・須恵器杯 H、12世紀土師器皿片	重複関係からSK01よりも新しい。
SX08	溝状	幅2.0× 長さ3.0以上	0.1~0.3	13世紀前半	13世紀前半土師器皿・瓦 器輪片、12世紀以降巴紋軒 丸瓦・唐草紋軒平瓦、丸瓦・ 平瓦片	重複関係からSK02・河川よりも新しい。



発掘区全景 (東から)



発掘区全景 (西から)



発掘区南壁・河川内堆積状態 (北から)

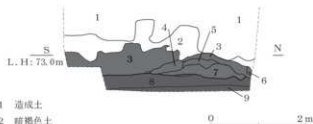


発掘区西壁・下層河川内土層堆積状態 (南東から)



1・2 (S X08 出土)

出土軒丸瓦・軒平瓦 (1/3)



- 1 造成土
- 2 暗褐色土
- 3 黄褐色粘土 (黒灰色砂ブロック混じる)
- 4 黄褐色粘土
- 5 灰色細砂
- 6 暗橙褐色粘土
- 7 明褐色粘土 (3~7: 遺構ベース土)
- 8 暗灰色細砂+暗灰色粗砂 (瓦層)
- 9 暗灰色砂礫

発掘区西壁土層図 (1/80)

9. 平城京東市跡推定地の調査 第36次

事業名 宅地造成

届出者名 有限会社 ウエムラ

調査地 奈良市東九条町 443 番 2 他

調査期間 平成 24 年 7 月 17 日～8 月 1 日

調査面積 167.5㎡

調査担当者 奥井智子・安井宣也

I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では東市跡推定地の北東部を占める左京八条三坊十一坪の北東部北寄りにあたり、地形的には能登川と岩井川が形成した東から西に緩やかに下る扇状地の扇端付近に位置する。

東に隣接する市 T1 第 3 次調査地¹⁾では、八条条間路の北側溝・路面と東三坊坊間東小路の東西両側溝(深さ 0.2m)・路面を検出した。西に隣接する同第 4・34・35 次調査地²⁾では、八条条間路が東堀河と交差する箇所に少なくとも 9 世紀中頃まで木橋が架かっていたことや、東堀河が 8 世紀後半に砂礫、9～10 世紀前半にシルトが堆積して埋没することを確認した。南西及び南に隣接する同第 5・22・30 次調査地³⁾では、8 世紀中頃～9 世紀初頭の建物・井戸等を検出し、8 世紀後半以降は坪内の北約 1/4 を画する位置に坪内道路を設け、宅地を南北に分割して利用したことを確認した。

今回の調査では、八条条間路南側溝及び十一坪北東部の宅地の様相確認を主な目的として、道路予定地に A・B 2 か所の発掘区を設定して実施した。

II 基本層序

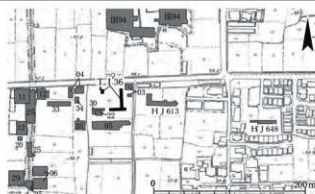
A・B 発掘区とも、上から造成土(厚さ 0.3m)、旧水田の耕土・床土(厚さ 0.3m)、平安～鎌倉時代の土器片等を含む灰黄褐色粘質土(厚さ 0.4m)、黄褐色粘質土の地山になる。

奈良時代の遺構面は地山上面で、その標高は A 発掘区で 56.9m、B 発掘区 57.2m である。

III 検出遺構

遺構検出は地山上面で行った。主な検出遺構は、東西方向の素掘り溝(SD012)、掘立柱列 6 条(SA578～583)、掘立柱建物 1 棟(SB584)、土坑 4 基(SK585～588)で、その概要は下記及び一覧表に示すとおりである。

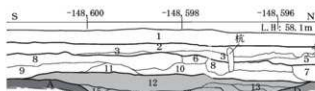
S D 012 A 発掘区では幅 4.5m、検出面からの深さ 0.9m で、底面の標高は 56.0m である。断面は逆台形。埋土は、主に暗黒褐色粘質土からなる上層、青灰色や灰褐色の粘質土・粘砂からなる中層、灰色粘砂や青灰色砂礫からなる下層に大別できる。溝心の座標は、(X,Y) = (-148,598.10,17,380.00) である。B 発掘区では幅 1.7m、検出面からの深さ 0.8m で、底面の標高



発掘区位置図 (1/5,000)



A 発掘区南部分西壁土層断面 (東から)



※ 南部分西壁土層断面に北部分東壁土層断面を反転のうえ、合成

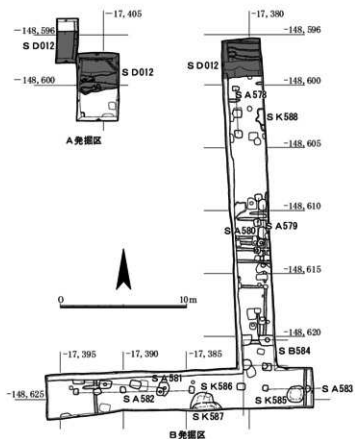
1 造成土	14 暗黒褐色粘質土	A 黄褐色粘質土
2 暗灰色粘質土	15 灰褐色粘質土	B 青灰色微砂
3 暗灰色粘質土	16 青灰色粘土	C 青灰色微砂
4 灰褐色粘質土	17 青灰色シルト	D 灰色砂礫
5 褐色粘質土	18 暗灰色粘質土	E 灰色細砂礫
6 灰褐色粘質土	19 灰褐色微砂	
7 暗灰色粘質土	20 灰色粘砂	
8 灰黄褐色粘質土	(灰少し混る)	
9 灰黄褐色粘質土	21 灰色粘砂	
10 灰黄褐色粘質土	(褐色粘質土混る)	
11 褐色粘質土	(砂多く混る)	
12 灰黄褐色粘質土	22 灰色粘砂	
13 灰色砂礫	23 暗灰色粘砂	
	24 青灰色粘砂	
	(砂少し混る)	
	25 灰褐色シルト	
	(有機物混る)	

【層の性格】

2～5: 耕土・床土
6～7: 埋埋土
8～11: 遺物包含層
12～25: S D 01 埋土
12～14: 上層
16～21: 中層
22～25: 下層
A～E: 地山

A 発掘区南北土層断面図 (1/80)

9. 平城京東市跡推定地の調査 第36次



遺構平面図 (1/300)



A発掘区北部分 (北西から)



A発掘区南部分 (南東から)



B発掘区全景 (南東から)



B発掘区東部分北辺（北から）



B発掘区南部分西平（西から）

遺構一覧表

遺構番号	検方	規模 (m)		掘行全長 (m)	築行全長 (m)	柱間寸法 (m)		堀の幅 (m)	柱穴の深さ (m)	備考
		掘行×築行	掘行			築行	掘行			
SA 578	南北	2	3.9			1.95等間			0.2	
SA 579	南北	2	4.8			2.4等間			0.5	
SA 580	南北	2	4.2			2.1等間			0.3	SA 579より新しい
SA 581	東西	3	6.9			東から2.4-2.4-2.1			0.2~0.4	
SA 582	東西	4	9.3			西から1.95-1.95-2.9-2.9			0.2	SA 584と柱筋同う
SA 583	東西	1以上	3.3			3.3			0.2	
SB 584	東西	1以上×2以上	2.1以上	5.4以上		2.1	1.8 2.1		0.3~0.5	北側付建物の可能性

遺構番号	平面形状	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主要出土遺物	備考
SD 012	東西方向	幅2.7~4.5・長さ30以上	0.8~0.9	8~9世紀前期	土師器甕・杯・皿・桶・高杯・甕、須恵器甕・甕・杯・蓋・鉢、製塩土器、丸瓦・平瓦・群瓦瓦 (7247 A)、木簡	B発掘区以南南側溝 B発掘区に比べてA発掘区の方が幅が広い
SK 585	隅丸方形	東西1.4×南北1.3	1.2以上	8世紀前~中頃	土師器甕・杯・皿・桶・高杯、須恵器甕・甕・蓋・杯・皿・杯蓋	井戸の可能性 SB584と位置が重複
SK 586	不整形方形	東西2.2×南北1.3以上	1.0以上	8世紀	土師器甕・杯、須恵器甕	井戸の可能性
SK 587	円形?	東西2.2以上×南北1.4以上	0.5	8世紀	須恵器甕	重複関係からSE 586より新
SK 588	不整形方形	東西0.6×南北1.7以上	0.2	8世紀中頃以降	土師器甕・杯・皿、須恵器甕・杯・蓋	

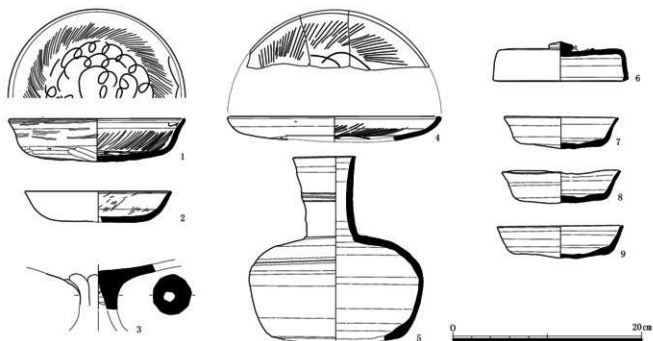
は56.2mである。断面はU字形。北肩付近は浸食され、南肩より0.2m低い。埋土は、上からA発掘区の上層と対応する暗褐色粘質土、同中層と対応する褐色粘質土、同下層と対応する青灰色砂礫となっており、暗褐色粘質土は北肩付近の浸食部分も覆う。溝心の座標は、(X,Y) = (-148,598.50,-17,380.00)である。なお、底面の標高は、市T1第4次調査で検出した東堀河東側の接続箇所とほぼ同じである。位置関係からみて、SD012は八条条間路南側溝と考えられる。

SA 578 ~ 583 B発掘区で検出した柱列群である。発掘区の幅が狭小であるため全容は不明であるが、SA578 ~ 581は建物になる可能性が高い。SA582とSA583の柱筋がほぼ揃うことから同一時期に構築されたと思われる。SA582の東端柱穴とSA583西端柱穴の

距離が約5.8mあり、この間は出入口の可能性がある。

SB 584 B発掘区南辺付近で検出した東西1間以上、南北2間以上の掘立柱建物。建物の東端と南端は発掘区外へ続く。規模等是不明だが、北附付きの東西棟建物になる可能性がある。北西隅の柱穴からさし銭が出土。

SK 585 掘方は二段掘りされ、検出面から約0.85m下で東西約0.9m、南北約0.8mの方形掘方になる。この掘方を境に上・下2層の埋土に大別できる。上層は黄灰色粘質土(厚さ0.1m)と土器片・炭化物を多く含む黄褐色または黄灰色粘質土(厚さ0.2m)との互層で、下層は砂混じりの青灰色粘土で湧水がみられる。各層からは8世紀代の土師器・須恵器が出土。基礎工事の関係から検出面から約1.2mまでしか掘削できなかったが、遺構の形状や湧水があることから井戸になると考える。



SK585 出土土器 (1/4)

SK 586 検出面から1.0m下まで掘削した。埋土は主に黄褐色や灰白色の粘土ブロックを含む灰褐色粘質土である。屈形の規模や埋土の様相から、埋め立てられた井戸の可能性はある。

IV 出土遺物

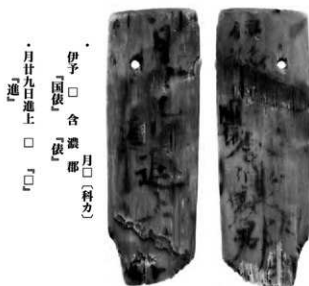
遺物整理箱10箱分の遺物が出土した。大半が8世紀代の土器類で、瓦類が2箱、金属製品や木製品が1箱分、木簡1点がある。

土器類 主な遺構から出土した土器類は一覧表のとおりである。ここでは土坑SK584出土土器を中心に記載する。土坑SK584からは、土師器、須恵器が出土。SK584の埋土は大きく2層に大別できるが、同一個体の破片がそれぞれの層から出土しており、堆積時期はほぼ同時期と考えられるため、一括して扱うことにする。

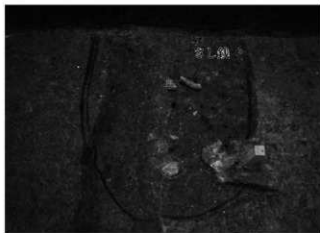
土師器には、杯A(1・2)、皿A(4)、碗、高杯(3)、甕、がある。杯A(1)は口径18.7cm、器高4.5cm。底部外面から口縁部下半まではヘラケズリ、口縁部内外面はヨコナデ調整。口縁部外面は、横方向の粗いミガキが、内面にはラセン状暗文、一段の斜放射状暗文、連弧状暗文が密に施されている。口縁部内面上半は器表面が剥離しており、連弧状暗文がわかりにくい。本来は周縁全体に廻っていたと考えられる。杯A(2)は、口径15.4cm、器高3.3cm。外面の器表面は剥離しており、調整は不明。内面の剥離が著しいが、わずかに斜放射状暗文が残る。斜放射状暗文は、二段になる可能性がある。皿A(4)は、口径22.6cm、器高2.7cmに復原出来る大型の皿である。器表面が増減しているが、底部外面と口縁部上部の一部

に砂粒が動いた痕跡が認められ、外面全体をヘラケズリで調整した可能性がある。内面にはラセン状暗文が施されている。碗は口縁部の小破片で形状が不明だが、碗Cになる可能性がある。高杯(3)は、心棒巻き付け技法により成形されており、脚部内面には粘土紐と棒のアタリの痕跡が残っている。外面の面取りは10角。残存状態からみて、口径が大きく開き、脚部は低いタイプの高杯になると考えられる。甕は図示できなかつたが、丸底で短胴の小型甕と丸底で中胴の2種類があり、いずれも体部外面全体に煤が付着する。

須恵器には、杯A(7~9)、皿A、杯蓋、壺L(5)、壺A蓋(6)、甕がある。杯Aは、丸みのある底部と斜め上方に開く口縁部からなる。7は口径12.1cm、器高3.4cmで、8は口径12.6cm、器高3.5cm、9は口径13.3cm、器高3.5cm。3点とも底部外面はヘラキリ、口縁部内外面はクロコナデ調整。底部内面中央には仕上げナデが見られる。これらは、形態的特徴や技法に共通性がみられ、同一工人による製品の可能性がある。壺L(5)は、丸みのある台形状の体部と細長い口頸部からなる。口径6.7cm、残存高19.4cm、体部最大径19.4cm。外面には自然軸が厚く付着しており調整が分かりにくい。口頸部と体部下半から底部外面にクロケズリ痕跡が残る。内面はクロコナデ。肩部の内面には、白色物質が付着している。壺A蓋(6)も外面全体に自然軸が均かっている。頂部外面には粘土層も付着している。口径14.3cm、器高4.2cm。これらは、土師器器器類の形態的特徴からみて8世紀前半から中頃のものとする。



SD012 出土木簡 (赤外線写真)
写真撮影・釈文協力：奈良文化財研究所



SB584 柱穴出土さし銭と出土状態 (東から)

八条条間路南側溝 SD012 からは、8 世紀中頃から 9 世紀後半頃と考えられる土師器、須恵器、白磁、製塩土器が出土した。須恵器壺 L の底部外面には糸切り痕が残るものがある。白磁は小片のため、どのような器形になるのか不明。内面には白釉が掛っているが、外面には釉が施された痕跡は認められなかった。釉調からみて、唐白磁と考えられる。

瓦類 東西溝 SD012 から軒丸瓦 (7247 A 型式) 1 点と丸瓦・平瓦が 1 箱分出土。軒丸瓦 7247 A は、東市 T1 第 4・10・14 次調査地からも出土している。

木簡 B 発掘区の東西溝 SD012 の青灰色砂礫層から文書木簡が 1 点出土した。長さ 11.3cm、幅 3.8cm、厚さ 0.6cm。「伊予□含濃郡」「月廿九日進上□」等の文字を確認した。「含濃郡」は神野郡 (のち新居郡、現愛媛県西条市・新居浜市) のことと推定される⁹⁾。

さし銭 建物 SB583 の北西隅の柱穴から出土した。錆化固着が進んでいるが、肉眼観察で 51 枚連なることを確認した。このうちの 2 枚に「和」の銭文を確認できることから和同開珎と判断される。紐は確認できていない。地鎖に関連する遺物だろうか。

V 調査所見

八条条間路南側溝と考えられる東西溝 SD012 は、形状や埋土・出土土器の特徴から以下の点がわかった。

①東から西に向かって幅が徐々に広がり、底面が緩やかに下って東堀河に接続する。

②深さは八条条間路北側溝 (深さ約 0.3m) や東三坊坊間東小路東・西側溝 (深さ約 0.2m) より約 0.7～0.8m 深く、東堀河 (同 1.7～2.0m) より約 0.7～1.0m 浅い。

③埋土は、東堀河と同様で、8 世紀後半～9 世紀初め頃に埋没が進んだ。

これらのことから SD012 は、東堀河と同様に上流側で河川と接続し、河川の水量を調整する機能を有していたと推察する。第 3 次調査の成果を踏まえれば、八条条間路南・北側溝の心々間距離は約 7.5m 前後になると推察できる。

宅地については、重複関係や位置関係から少なくとも 2 時期の変遷があり、小規模な建物や塀が散在する様相が推察できる。その時期は、建物 SB584 の北西隅の柱穴・土坑 SK585・土坑 SK587 の出土土器からみて 8 世紀中頃であることがうかがえる。

(安井宜也・奥井智子・三好美穂)

注

- 1) 奈良市教育委員会 『平城京東市跡推定地の調査 I』 1983
- 2) 奈良市教育委員会 『平城京東市跡推定地の調査 II』 1984
同上 『平城京東市跡推定地の調査 第 33・34 次』 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 18 (2007) 年度』 2009
同上 『平城京東市跡推定地の調査 第 3・34 次』 『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 19 (2008) 年度』 2010
- 3) 奈良市教育委員会 『平城京東市跡推定地の調査 III』 1985
同上 『平城京東市跡推定地の調査 第 22 次』 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 10 年度』 1999
同上 『平城京東市跡推定地の調査 第 30 次』 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成 14 年度』 2006
- 4) 池田裕英 『奈良・平城京東市跡推定地 (左京八条三坊十一坪)』 『本報研究』 35 本報学会 2013

10. 史跡東大寺旧境内の調査 第12・13・14・15次

I はじめに

奈良市教育委員会では平成22年度から平成24年度の3ヵ年をかけて、雑司町地内の史跡東大寺旧境内における都市水環境整備下水道築造工事に係る発掘調査を実施した。当該工事は、大仏殿の東および北東側にある講堂、塔頭等の下水整備を目的として公共下水道管を埋設するものである。工事掘削面積は899.41㎡である。

施工にあたり、大仏殿回廊や東面僧房、食堂院回廊など重要遺構が想定される箇所では、遺構の保護を図るため、設計段階から推進工法を採用している。発掘調査は、推進工法採用箇所を除いた部分で、工事着手前に行い、重要な遺構が検出された箇所は、設計変更等を事業主体と協議し、その保護を図った。さらに施工に際しては、工事立会を実施した。発掘調査は3ヵ年4次にわたる。

平成22年度に行なった第12次調査は、戒壇院へ登る北側階段付近から、大仏殿北面回廊の北西側に至る、総延長約220mの下水管理設ルートのうち、推進工法部分を除いた箇所を対象に、7箇所の発掘区を設定し、西端から第1～7発掘区とした。第1～5発掘区は西面中門から、東へ約120m～240m間となる。第6発掘区は大仏殿西面回廊北辺の西隣となる。第7発掘区は現

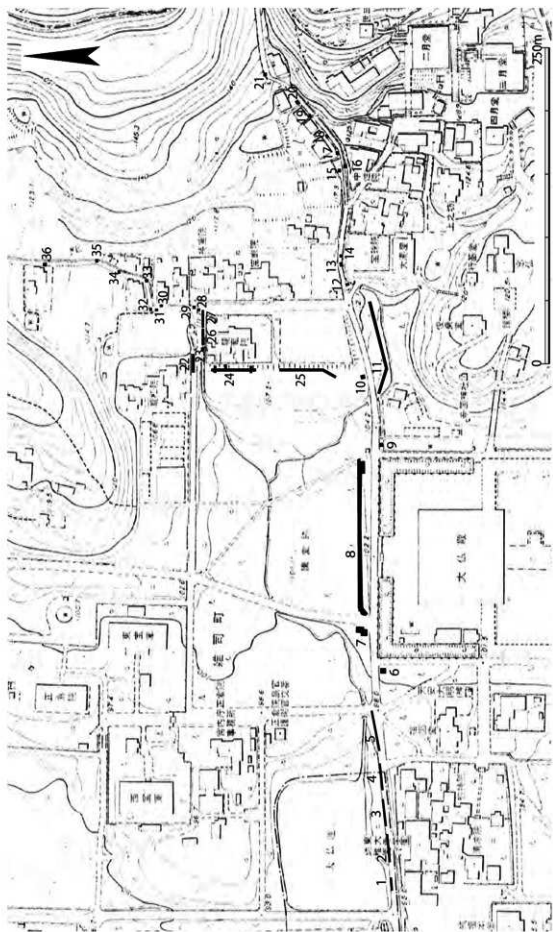
状では大仏殿北面回廊西辺から、北の正倉院方向に伸びる道との交点西端である。

平成23年度に行なった第13次調査は、14箇所の発掘区を設定して実施した。設定した発掘区の呼称は、平成22年度の東端発掘区第7発掘区の東側から平成23年度の第8発掘区～第21発掘区とした。第8発掘区は大仏殿北面回廊の北側である。現大仏殿の北側には石敷きの通路が走り、その北側は講堂跡の礎石に繋がる緑地である。この緑地部分の通路法面下付近に第8発掘区が位置する。第9発掘区は大仏殿回廊北東隅部の北東側である。第10～21発掘区は鐘樓がある丘陵と食堂院跡の間を通り、二月堂の北を東に向う道路上あるいは道路付近である。第11発掘区は食堂院跡の南側にあたる。

平成24年度に行なった第14次調査は4箇所の発掘区を、第15次調査は11箇所の発掘区を設定して行なった。平成24年度の調査対象地は、東大寺塔頭の龍藏院の西側に位置する駐車場および龍松院の南側を通る東西方向の境内道路と北東にのびる市道北部第109号線の路面上で、駐車場と龍松院前面道路を第14次調査として第22～25発掘区を、龍藏院北側道路から市道の調査を第15次調査として第26～36発掘区として実施した。

平成22～24年度 史跡東大寺旧境内の調査発掘調査一覧表

調査年度	調査回数	発掘区	事業名	調査面積	調査期間	調査地	調査担当者
平成22年度	T D 第12次	1～7	都市水環境整備下水道築造工事	145.3㎡	H 22.12.15～ H 23. 2.17	雑司町地内	原田憲
平成23年度	T D 第13次	8～21		465㎡	H 23. 7.21～ H 23.12.21		宮崎・原田憲 池田富・奥井
平成24年度	T D 第14次	22～25		105㎡	H 24.11. 5～ H 24.12.28		三好・池田裕
	T D 第15次	26～36		40㎡	H 25. 1. 7～ H 25. 2. 1		三好・宮本



史跡東大寺旧境内 発掘区位置図 (1/3,000)

II 各発掘区の概要

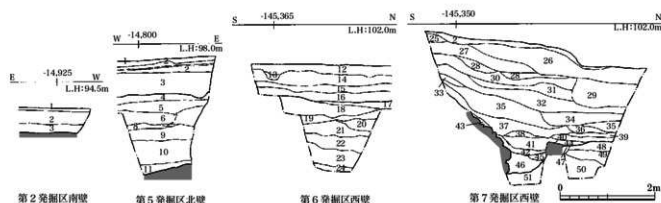
第1～5発掘区

現況では、西面中門から東方の二月堂へ至る道路である。旧地形復元¹⁾によると、若草山から西へ派生する大仏殿・戒壇院が位置する尾根と、正倉院が位置する尾根に挟まれた、東西方向の谷川の南岸付近に相当する。第1～4発掘区の南では1995・1996年度に、奈良県による東大寺学園幼稚園施設の新・改築に係る調査(第49・51次)が実施されており、戒壇院北面僧房および講堂との間の渡廊基礎や、戒壇院北面を画する掘立柱列と溝などが確認されている²⁾。

第5発掘区南では、1994年度に奈良県による指図堂西側の防災工事に係る調査(9424区)が実施されている³⁾。なお、第1～4発掘区北側には通称「大仏池」がある。この池は「多聞院日記」によると天正17(1589)年4月に作られたもので、谷川の出口に塘堤を築造して形成されたとみられている⁴⁾。

基本層序 第1発掘区から第5発掘区の基本的な層序

は、ほぼ同じで現道路の造成にともなうアスファルト(厚さ0.1～0.2m)・砕石(厚さ0.1～0.3m)・造成土(厚さ0.1～0.5m)と続き、造成土直下で、春日野礫層である黄褐色礫土の地山となる。この上面で遺構検出をおこなった。地山上面の標高は96.4～92.8mで、東から西へ下る。ただし第5発掘区東半では、地山が東に向かって急激に落ち込んでいた。調査区内の遺構面の調査終了後、落ち込みから約13m東の地点で重機による地山確認調査を行い、遺構検出面からの深さ約1.6m、標高約95.3mで、黄褐色礫土の地山を確認した。この箇所は旧地形では谷であったとみられる。谷の埋土は上から順に淡赤褐色土(厚さ約0.2m)、淡褐色土(厚さ約0.1～0.25m)、明黄褐色土(厚さ0.1～0.3m)、淡茶褐色土(厚さ0.05m)、淡黄褐色砂質土(厚さ0.1m)、暗茶褐色砂質土(厚さ約0.3m)、淡濁黄褐色砂質土(厚さ約0.5m)、黄褐色砂質土(厚さ0.1～0.2m)である。谷埋土からは、8世紀の平瓦しか出土せず、谷の詳細な埋め立て時期は不明である。



第2発掘区南壁

第5発掘区北壁

第6発掘区西壁

第7発掘区西壁

1 アスファルト	16 淡灰色礫土	31 黒褐色砂質土(炭化物多く含む)	46 灰色粘土
2 砕石	17 淡赤褐色砂質土	32 明褐色砂質土	47 暗黄褐色粘土
3 造成土(1と2と黄褐色土の混合土)	18 明黄褐色礫土	33 黒褐色砂質土	48 黄褐色粘土
4 淡赤褐色土	19 黄白色礫土	34 明褐色粘土	49 淡灰色粘土
5 淡褐色土	20 黄褐色礫土	35 茶褐色砂質土	50 淡灰黄色粘土
6 明黄褐色土	21 淡灰白色礫土	36 明褐色砂	51 オリーブ灰色粘土
7 淡茶褐色土	22 黄褐色粘土と黄褐色礫土の混合土	37 茶褐色砂質土(瓦類多量に含む)	
8 淡茶褐色砂質土	23 淡灰色礫土	38 灰色粘土	
9 暗茶褐色砂質土	24 淡灰色粘土	39 暗褐色砂質土	
10 淡濁黄褐色砂質土	25 2と高砂土の混合土	40 灰色土	
11 黄褐色砂質土	26 25と12の混合土	41 明褐色砂質土	
12 黒褐色土(表土)	27 明褐色砂質土	42 淡灰褐色粗砂	
13 淡茶色細砂土	28 褐色砂質土	43 黄褐色土	
14 明黄褐色礫土	29 灰色砂(瓦類多量に含む)	44 灰色土	
15 黄褐色細砂土	30 明褐色砂質土	45 明褐色粘土	

図1～7は、地山(黄褐色礫土)を示し、濃い線は石製遺構の埋材を示す。
第7発掘区西壁土層間のS001北側掘削台以下の土層は、第7発掘区北東部遺構区東壁の土層を反映合成した。

第2・5・6・7発掘区土層図(1/80)

検出遺構 第4発掘区西半では掘立柱列 SA01 を検出した。東西4間(7.2m)以上の掘立柱列で、西側は発掘区外へ続くと思われる。柱間は6尺(1.8m)等間である。東から1つ目と、3つ目の柱穴は、底に花崗岩を用いた礎盤が残っていた。

第5発掘区西端では土坑 SK02 を検出した。東西約0.9mで南北0.7mである。検出面からの深さは約0.05mしか残っておらず、遺物も出土しなかった。

第6発掘区

第6発掘区は大仏殿西面回廊北辺の西隣で、現状は西へ緩やかに下る傾斜地である。

第6発掘区の南西では、奈良県によって、1992年度に防災工事に係る調査(9202区)と1993年度に送電線埋設工事に係る調査(第38次)⁹⁾が実施されており、現地表は自然地形ではなく、奈良時代後半に盛土造成されたものと判明している。

基本層序 第6発掘区の層序は、黒褐色土の表土(約0.2m)の下に、東半では淡赤褐色砂質土(厚さ0.1～0.5m)があり、この直下の明黄白色礫土の上面で遺構検出を行った。西半では表土下に明黄灰色礫土(厚さ約0.2～0.3m)、黄褐色細砂土(厚さ0.1m)、淡灰色礫土(厚さ0.2m)があり、この下に淡赤褐色砂質土が堆積し、明黄白色礫土となる。遺構検出面の標高は東端で約101.5m、西端で約101.1mと、約0.4mの高差がある。この面での遺構は無かった。厚さ0.2～0.4mの明黄白色礫土には瓦の小片が含まれており、調査区内の遺構面の調査終了後、重機による地山確認を行った。結果、明黄白色礫土の下には、上から黄白色礫土(厚さ0.05～0.2m)、黄褐色礫土(約0.2m)、淡灰白色礫土(厚さ0.1～0.3m)、青灰色粘土と黄褐色礫土の混合土(厚さ0.2～0.3m)、淡灰色礫土(厚さ0.3～0.4m)、淡灰褐色粘土が堆積し、これらが盛土とわかった。淡灰褐色粘土層内である標高98.9mまで、重機による地山確認を行ったが、それ以上は重機のアームがとどかず、地山の確認を断念した。

第6発掘区の南西に隣接する奈良県の第38次調査では、標高98.0m程度で地山である濁黄褐色粘質土層を確認していることから、大仏殿西面回廊西側の盛土の高さは3.5m以上あったとみられる。

第7発掘区

伽藍復元では、大仏殿北面回廊と想定鐘楼との間に位置する。北西は西方向に流れる谷川である。

第7発掘区の東側では、1992年度に奈良県による防災工事に係る調査(9201区)が実施され、創建期の構築と推定される東西方向の石垣や石組溝が確認され、大

仏殿と講堂の境界部分の構造が判明している⁷⁾。

基本層序 第7発掘区の基本的な層序は、現道路の砂石(0.1～0.2m)、造成土(0.4～0.6m)の下に、明褐色砂質土(約0.3m)、黒褐色砂質土(0.1～0.3m)、明褐色砂質土(0.2～0.3m)、茶褐色砂質土(0.1～1.2m)があり、発掘区南半では、茶褐色砂質土層の下で石組遺構 SX02 を検出した。石組遺構 SX02 の上面の標高は、概ね101.0mである。

第7発掘区の遺構検出完了後、マンホール設置予定箇所である発掘区北東隅で、現地表下約3.0m、標高にして約98.7mまでを掘削し、茶褐色砂質土の下に、上から橙褐色砂質土(厚さ約0.1m)、灰色土(厚さ約0.1m)、黄褐色粘質土(厚さ約0.1m)、淡灰色粘質土(厚さ約0.3m)、淡灰黄色粘質土が堆積することを確認したが、これ以下は重機のアームがとどかず、地山の確認は断念した。周辺の調査例や現況から、第7発掘区全体が東西方向の谷の中で、黄褐色粘土層以下の堆積土は、谷の埋土とみられる。谷の埋土のうち、淡灰色粘質土からは11世紀後半以降の白色の土師質の碗が出土した。

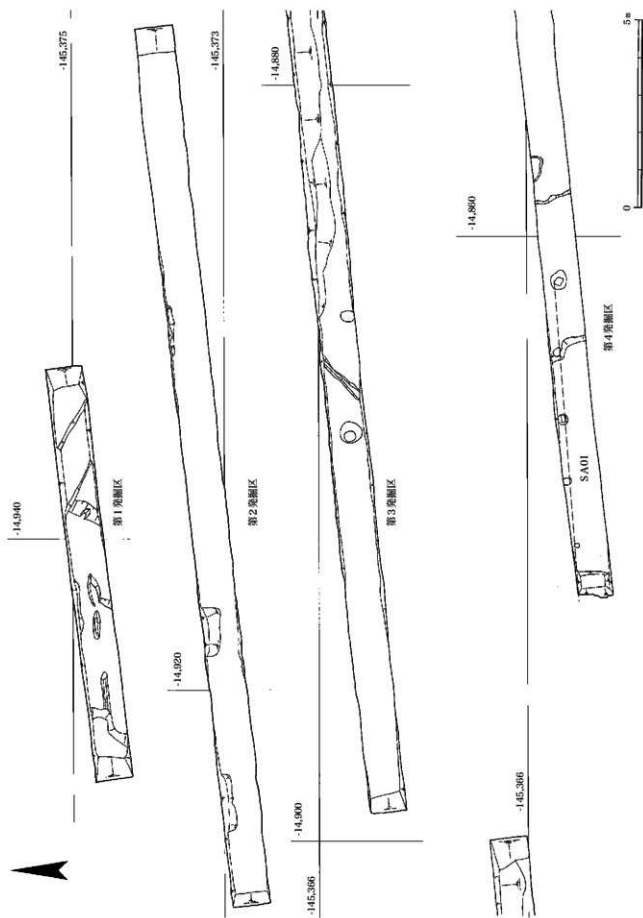
検出遺構 第7発掘区では石組溝 SD01 と石組遺構 SX02 を検出した。石組溝 SD01 は、東西方向の石組溝で、約1.5m分検出した。溝幅は南北側石の内法間で約0.7mである。南側石は5段、高さ約1.2m分、北側石は1段、高さ約0.25m分残存していた。北側石の検出面からの溝の深さは約0.6mである。溝内埋土は大きく2層に分けることができ、上層は明橙褐色砂質土で、下層は灰色粘土である。石組溝 SD01 北側石裏込め土は、暗黄褐色粘土である。石組溝 SD01 の調査完了後に北側石の北隣を掘削し、石組溝 SD01 の北側石は、谷の埋土である黄褐色粘土層を掘り込んで設置されていることを確認した。

石組遺構 SX02 は石組溝 SD01 の南側石上方で確認した。石組溝は3段分残存していた。石組溝 SD01 南側石の上に0.6m程度の厚さで、濁黄褐色土を盛り、その上に基底石を設置して構築しており、石組溝 SD01 より新しいとわかる。

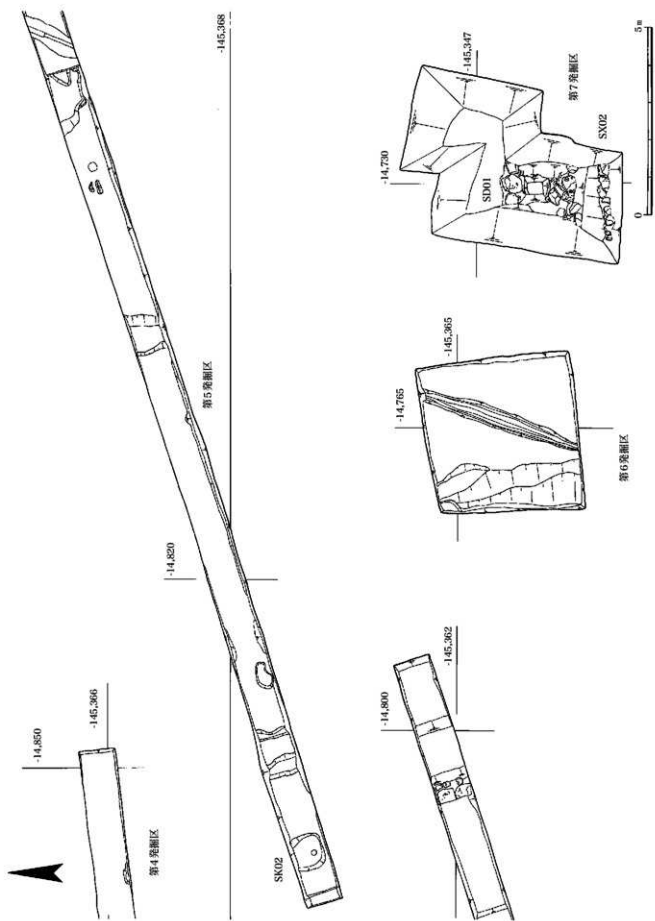
第8発掘区

第8発掘区は大仏殿北面回廊の北側で、地形復元によると、周辺は大仏殿や戒壇院が建つ尾根と正倉院が建つ尾根に挟まれた東西方向の谷の南岸に相当する。この谷の確認を主目的として、発掘区西端から調査を進めた。

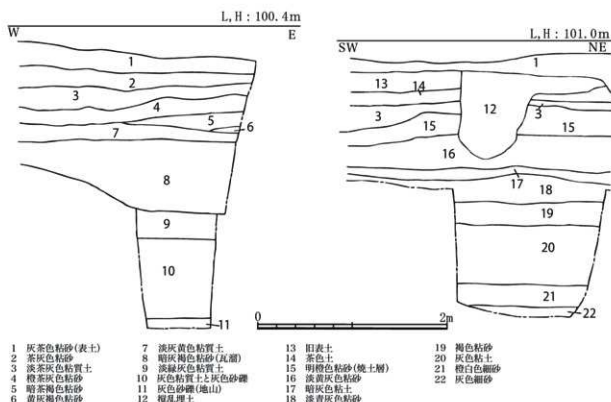
基本層序 発掘区西端から約10m分は、南北通路部分にあたる。厚さ約1.8mの造成土の下には、淡灰茶色埋没経過と周辺の調査で確認されている石組遺構の構築・廃絶時期、大仏殿と講堂を繋ぐ参道などの確認を主目的



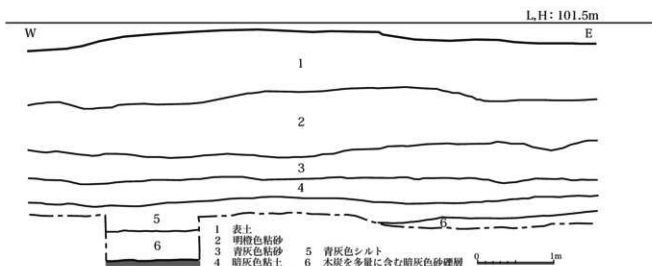
第1・2・3・4発掘区遺構平面図 (1/100)



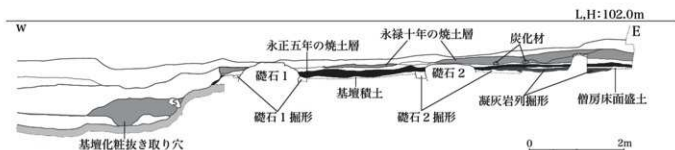
第4・5・6・7発掘区遺構平面図 (1/100)



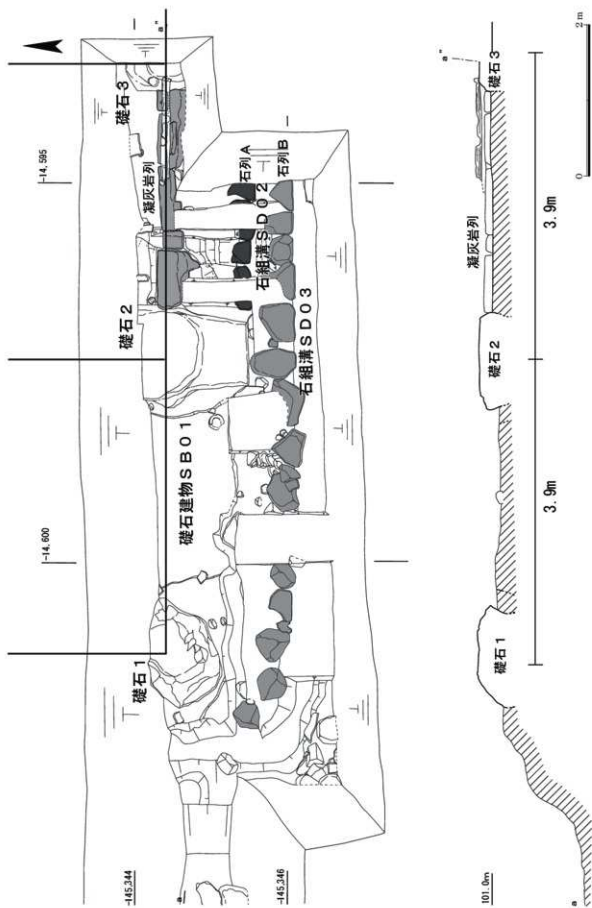
第8発掘区 西端(左)と中央部(右)の北壁土層図(1/40)



第8発掘区 東半部土層図(1/40)



第8発掘区 東端部 北壁土層図(1/80)



第8発掘区 東端部 遺構平面図および立面図 (1/50)

として、発掘区西端から調査を進めた。

基本層序 発掘区西端から約10m分は南北通路部分にあたる。厚さ約1.8mの造成土の下には、淡灰茶色粘砂(旧表土)以下、黄褐色粘砂、淡灰色粘質土などが堆積し、淡灰茶色粘砂上面から約0.5m下で、淡橙灰色粘質土へ粘砂に達する。当層の上面には灰色粘砂で埋没する瓦溜が一带に広がる。瓦溜は厚さ0.1～0.3mで、瓦溜上面の窪みには炭が堆積する箇所もある。瓦溜から奈良時代の瓦が大量に出土した。これらは、堆積状況から見て、土坑の一部や瓦を敷いたような性格の遺構とは考え難く、投棄した廃瓦である公算が高い。

この南北通路の約5m東の位置(X=-145,341.1, Y=-14,713.2付近)では、灰茶色粘砂(表土)以下、茶灰色粘砂、淡灰茶色粘質土、橙茶灰色粘砂、淡灰黄色粘質土などが堆積し、表土下約1.0mで暗灰褐色粘砂(瓦溜)に達する。この堆積は厚さ0.7m以上で、発掘区外北に広がる。この瓦溜から奈良時代の瓦が大量に出土した他、鎌倉時代の瓦や瓦器が少量出土した。堆積状況から見て、先の瓦溜と同様に谷に投棄した廃瓦と考える。また、この瓦溜の下には湧水が激しい淡緑灰色粘質土・灰色粘質土+灰色砂礫が厚さ約0.8m堆積し、現地地表下約2.8mで灰色砂礫に達する。この灰色砂礫も湧水は激しいが、上層に比べて堅く締まる。これらの状況から、灰色砂礫は谷の堆積土ではなく、谷南岸の地山の可能性が高い。灰色砂礫上面の標高は約97.3mである。

発掘区西端から東に約45m進んだ現大仏殿北門の北側(X=-145,346.3, Y=-14,679.0付近)では、表土以下、淡灰茶色粘土(黄色粘砂混)、淡黄灰色粘砂、暗灰色粘土、淡青灰色粘砂、褐色粘砂、灰色粘砂、橙白色細砂が堆積し、現地地表下約2.7mで灰色細砂に達する。灰色細砂上面の標高は約98.2mである。

北門の北東側(X=-145,346.0, Y=-14,661.0付近)では、厚さ約0.6mの表土下に明橙色粘砂(厚さ約0.6m)、青灰色粘砂(厚さ約0.25m)、焼土を含む暗灰色粘土(厚さ約0.25m)、青灰色シルト(厚さ約0.3m)が堆積する。現地地表下約2.0m(標高約99.3m)で、木炭を多量に含む暗灰色砂礫層(厚さ約0.3m)に達する。この暗灰色砂礫層から8世紀の木簡や墨書土器が出土した。直上の青灰色シルトは無遺物で、その上層の暗灰色粘土中から焼土、銅滓、溶着瓦片の他、12世紀の瓦器が出土した。この青灰色シルト層は、堆積状況から奈良時代以降の整地土である可能性が高いが、顕著な遺構は確認できなかった。この暗灰色砂礫層は、北門から東に約40m進んだ地点(X=-145,345.5, Y=-14,630.0付近)

の灰色砂礫上面(標高約99.7m)まで広がる。この灰色砂礫は発掘区東端の広範囲に広がり、堅くしまり無遺物であることなどからも整地土や谷の堆積土とは考え難く、地山と判断した。地山面は東へ向かって高くなり、北門から東に約57.5m地点(Y=-14,612.5付近)で約0.8m急激に高まる。この高まり部分(層房基壇)の基本層序は、表土以下、淡褐色砂質土、褐灰色砂、橙茶色細砂土、褐色砂礫土、青灰色粘土へ細砂土、淡黒灰色砂質土(焼土①とする)、濁青灰色砂質土、赤褐色砂質土(焼土②とする)、濁青灰色粘土と続き、標高約100.6～100.8mで橙白色～黄灰色粘土の地山に至る。

基壇西側の谷部分では、焼土①の上に暗灰色砂、暗灰色細砂、暗灰色粘土と続き、標高約99.8mで灰褐色砂礫土の地山に至る。遺構検出は、焼土①を取り除いた濁青灰色砂質土上面と、地山上に盛土された濁青灰色粘土の上面で行なった。第7発掘区東端で、礎石建物SB01と西方向の石組溝SD02・SD03を検出した。

検出遺構 東西方向に並ぶ礎石1・2・3、礎石2と3の間で地覆石である凝灰岩の切石列を検出した。検出位置から考えて、伽藍復原で想定される東面僧房(太房)の南端部分に相当する。礎石建物SB01とした。

濁青灰色粘土の上面で、礎石1と2の据付穴を検出したことから、この濁青灰色粘土は地山上に盛られた基壇の積み土と考えられる。層房基壇は地山を削り出し、大仏殿北側の谷の東肩部分を利用して築いている。また、発掘区の北壁土層断面で、基壇化粧土の抜き取り痕跡も確認している。礎石や基壇周りの状況から考えて、基壇高は約1mであったことが推察できる。

礎石の柱間は約3.9m、礎石1は三笠安山岩、礎石2・3は花崗岩である。礎石2・3の間には壁が想定でき、礎石1・2の間には構築物などは確認できないことから、太房の西端一間は通路であったと考える。

遺構の重複関係から、礎石を据えた後に凝灰岩の切石を据え付けているとわかる。礎石2ないし地覆石である凝灰岩切石の掘形から、13世紀代の土器が出土しており、礎石建物SB01は鎌倉時代に再建された太房と考えて矛盾はない。さらに、床面は焼土②で覆われていたことから、この焼土②は僧房が焼絶する要因となった永正5(1508)年の火災に伴う可能性が高い。

石組溝SD02は礎石建物SB01の廃絶後に造られた東西方向の石組溝で、石列Aを護岸とする。断面精査で、焼土②の上面で石列Aの掘形を検出した。礎石2よりも西側に石列が壊れない。東方からの排水溝と考えられる。

石組溝SD03は石組溝SD02に、暗灰色砂礫が堆積し、

石列Aも覆われて埋没した後、石列Aよりも約0.2m南側に石列Bを据え、護岸して造り直された東西方向の石組溝である。

SD03はSD02と同様に、東方からの排水溝と考える。また、SD03は奈良県の防災発掘調査9201区で検出したSD08の北列と一連の遺構と考えられる。最終的には、永禄10(1567)年の兵火に伴うと思われる焼土①でSD03も埋没し、廃絶している。

第9発掘区 大仏殿院の北東に設定した南北2m、東西2.5mの発掘区である。現地表下約1.0mまでは低圧電線の埋設土が続き、その下に灰色粘砂、白色粘土、明黄褐色砂質土、黄白色粘土、灰色砂礫が堆積し、現地表下2.0～2.5mで、淡オリブ色砂質土の地山に至る。地山の標高は北端で約102.0m、南端で約101.3mである。溝あるいは谷の北肩に相当すると思われる。遺構は無かった。

第10発掘区 伽藍復原では、東面僧房と食堂院回廊の間に位置する。駐車場の入口東寄りに設定した南北2m、東西2mの発掘区である。現地表下約1.0mまでは、造成土で、その下には暗茶褐色粘質土、茶褐色粘質土、黄灰褐色粘質土、黄茶灰色粘質土が続き、現地表下約1.8mで黄灰色砂質土の地山に至る。地山の標高は約104.5mである。遺構は無かった。

第11発掘区 食堂院跡の南側の北東から南西方向に傾斜する斜面地に設定した幅約1.5m、長さ約82mの発掘区である。発掘区南側には、鐘樓が所在する丘陵の北斜面と食堂院跡の南斜面との間の谷筋を通る水路が流れる。発掘区東端には食堂院回廊が想定される。

発掘区北側で実施された奈良県の防災発掘調査9719区では、近世の鋳造関連土坑と、9世紀前半頃に埋められた谷を確認している。基本層序は、暗灰～暗黒褐色粘

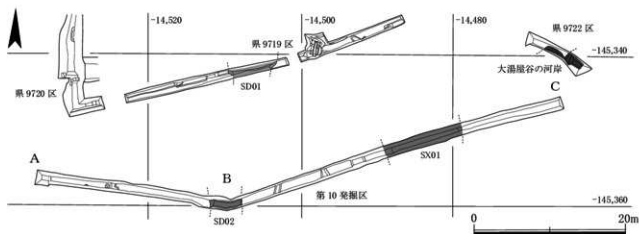
質土の表土以下、明灰色粘質土、暗茶灰色砂、黄茶灰色粗砂、暗灰色粘土などの粘土と砂の互層であり、東端では0.4～0.6m、西端では約0.7mの厚さで堆積する。現地表下約1.0mで地山の黄灰色砂質土～橙灰色粘質土に至る。地山の標高は東端で約109.5m、西端で約105.2mである。遺構検出は地山上面で行なった。表土には瓦や礫が多く混じり、造成された様子が伺えるが、表土下から地山の間は自然堆積のようである。

SX01は、発掘区の東寄りで確認した幅約10mの谷で、現地表下約2.0mまで掘り下げたが、地山は確認できなかった。SD02は、発掘区の西寄りで検出した幅約4.0mの南北方向の溝で、深さは約1.4mまで確認した。北壁の土層断面には、幅を狭めて掘り直されている痕跡が確認できる。8世紀の瓦片が1点出土。

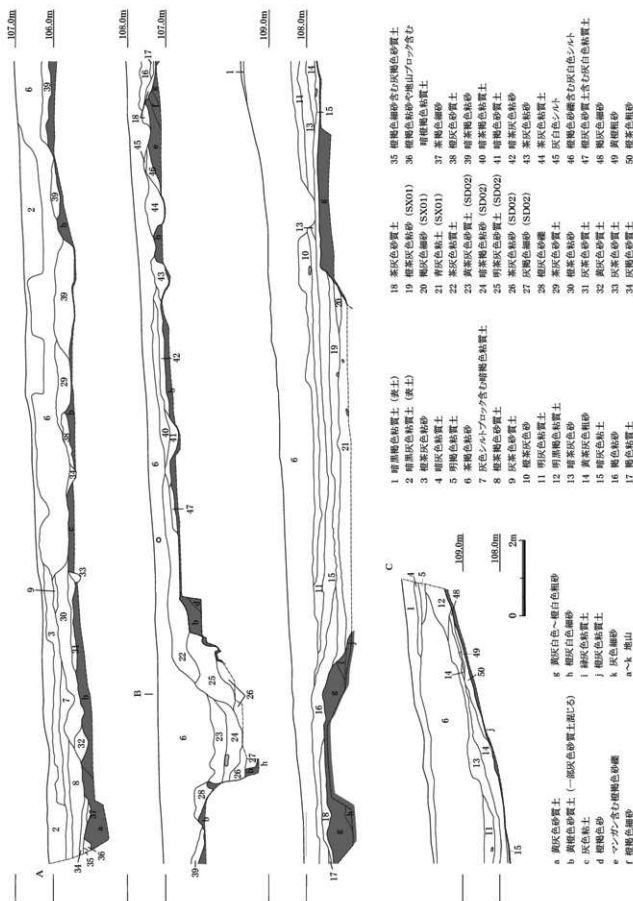
第12発掘区 二月堂へ向かう道路と、食堂院跡東の南北道路との交差点よりやや東寄りに設定した一辺1mの発掘区。コンクリート舗装と造成土以下、淡黄色砂質土、暗褐色粘質土と続き、現地表下0.5～0.7mで黄褐色砂質土の地山に至る。地山の標高は、北側で約112.3m、南側で約112.1mである。遺構は無かった。

第13発掘区 第12発掘区から東へ約14m付近で、水路の護岸石垣から約0.5m北に設定した東西1m、南北0.7mの発掘区である。石畳とその造成土以下、青灰色シルト、青灰色粘質土、暗茶褐色粘質土と続き、現地表下0.9～1.1mで、青灰色粘土の地山に至る。地山の標高は東端で約113.5m、西端で113.3mである。地山は発掘区北端でわずかに確認できるのみで、大部分が護岸石垣の裏込めで削られる。遺構は無かった。

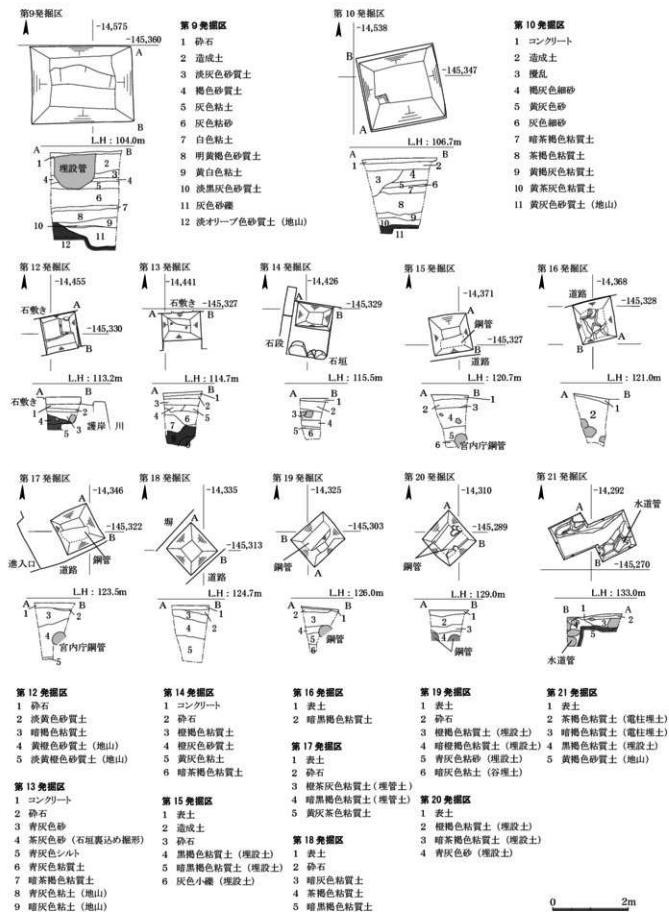
第14発掘区 第13発掘区から東約15m付近で、水路の護岸石垣から約0.5m北に設定した東西1m、南北



第11発掘区 遺構平面図 (1/500)



第11 苑園区 土層区 (1/100)



第9・10発掘区、第12～21発掘区遺構平面図・土層図 (1/100)

0.6mの発掘区である。現地表下約0.3mで、現代の平瓦を縦に敷き詰めている面を確認した。現在の石畳とコンクリートで舗装される以前の旧地表面の痕跡と考える。その下は橙灰色砂質土、黄灰白色粘土、暗茶褐色粘質土と続き、現地表下約1.0m（標高約114.0m）まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。暗褐色粘質土から8世紀の土師器・須恵器、瓦が出土。

第15発掘区 二月堂へ向かう参道との分岐点から北東へ約20m進んだ付近で、道路の北側に設定した一辺1mの発掘区である。表土、橙茶灰色土の造成土以下、黒褐色粘質土、暗黒褐色粘質土、灰色小礫と続き、現地表下約1.4m（標高約118.9m）まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。

第16発掘区 第15発掘区から南東約3.6m付近で、道路の南側に設定した一辺1.0mの発掘区である。表土以下、人頭大の礫が多く混じる暗黒褐色粘質土が堆積し、現地表下約1.3m（標高約119.4m）まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。暗黒褐色粘質土から8世紀の土師器・須恵器と12世紀後半の瓦器が出土。

第17発掘区 第16発掘区から北東約20m付近で、道路の北側に設定した一辺1.0mの発掘区である。表土、砕石以下、橙茶灰色粘質土、暗黒褐色粘質土、黄茶灰色粘質土と続き、現地表下約1.4m（標高約121.9m）まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。

第18発掘区 第17発掘区から道路沿いに北東約13m進んだ付近で、道路の北西側に設定した一辺1.0mの発掘区である。表土、砕石以下、暗灰色粘質土、茶褐色粘質土、暗黒褐色粘質土と続き、現地表下約1.4m（標高約123.1m）まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。暗灰色粘質土は現代の遺物を含み、茶褐色粘質土はしまりが弱く拳大の礫を含む。暗黒褐色粘質土から中世の土師器・瓦器や白磁の小片が出土した。

第19発掘区 第18発掘区から道路沿いに北東約14m進んだ付近で、道路の北西側に設定した一辺1mの発掘区。表土、砕石以下、橙褐色粘質土、暗褐色粘質土、青灰色粘砂、暗灰色粘土と続き、現地表下約1.2m（標高約124.6m）まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。暗灰色粘土以下は谷の埋土と思われる。

第20発掘区 第19発掘区から道路沿いに北東約20m付近で、道路の北西側に設定した一辺1.0mの発掘区である。表土以下、橙褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、青灰色砂と続き、現地表下約0.8m（標高約127.8m）まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。

第21発掘区 第19発掘区から北東へ約26m付近で、

道路の北側に設定した一辺1.0mの発掘区で、天地院跡に近接する。表土以下、茶褐色粘質土、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土と続き、現地表下約0.25mで黄褐色砂質土の地山に至る。地山上面の標高は東端で約132.3m、西端で132.1mである。遺構の有無確認のため、発掘区を北西へ1.0m四方拡張したが、電柱控えて地山が削平されており、遺構は確認できなかった。

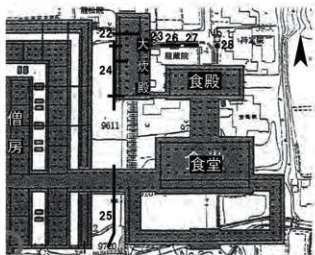
第22発掘区 発掘区を設定した東西道路は、東大寺の伽藍復原図では、食堂付属堂宇の大炊殿が確定されている。平成9年度に、東西道路の南辺部で奈良県が防災工事に伴う発掘調査（9710・9711区）を実施しており、大炊殿の背面にある奈良時代のもつと見られる東西方向の素掘溝を確認している。第22発掘区はこの時の発掘区と約2/3が重複するように設定した。

基本層序 道路は東から西へ下り勾配となっており、発掘区東端（路面の標高：約108.5m）と西端（路面の標高：約107.0m）では約1.5mの高低差がある。

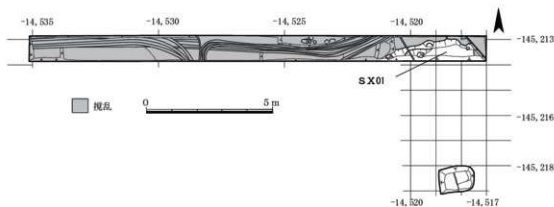
発掘区東端から3m付近は、アスファルト、砕石、攪乱土、灰色砂混じりの黄褐色粘土と続き、地表面から約0.6mで礫混じりの黄褐色粘土の地山（標高：約107.7m）に至る。これより西は、配管工事による攪乱土の堆積が約1.3m以上続く。

検出遺構 発掘区東端の地山直上で13世紀代の土坑（SK01）を1基確認したが、奈良時代の遺構は無かった。発掘区の約2/3は電気等の配管工事で遺構は壊されており、奈良県の調査で確認したとされる東西方向の素掘溝も再検出することはできなかった。

SK01は、地山上面で検出した約東西3.9m、南北0.8m以上で、検出面からの深さは約0.4mある。南半は発掘区外へ続く。埋土は淡黄灰色粘土で、軒丸瓦、丸瓦、平



伽藍復原図と発掘区位置



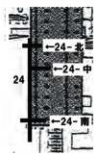
第22発掘区・第23発掘区遺構平面図 (1/150)

瓦、13世紀代の瓦器片が少量含まれていた。

第22発掘区 第22発掘区の南側を流れる小川の対岸に設定した一辺1.0mの発掘区である。表土(黒褐色土)の下に拳大の礫を多く含む明褐色土が堆積し、地表面から約0.5mで黄褐色粘土の地山となる。地山は北と西へ向かって下降しており、地表面から約1.1m掘下げたが地山は確認できなかった。

第24発掘区 発掘区を設定した敷地は、現在駐車場として使われており、東側にある龍藏院よりも約3.0m低い。伽藍復原では、龍藏院から駐車場北半部にかけては大炊殿が想定されており、第24発掘区は大炊殿の西辺～南辺部にあたる。調査は、南北発掘区(幅1m×長さ35.8m、面積35.8㎡)と東西発掘区3箇所(幅1m×長さ3～6m、合計面積16.0㎡)を設定して実施した。

基本層序 発掘区周辺の地表面は、全体的に北から南にかけて緩やかな下り勾配で、約0.4mの高低差がある。堆積土は一様ではないため、便宜的に発掘区に記号を付し説明する。中・北発掘区の東半部では、アスファルト・碎石、現代の造成土および擾乱土の下に、1～2層の堆積土(18世紀代の遺物含む)があり、地表下約0.6～1.4m(標高107.6～107.8m)で灰色砂混じりの黄～橙褐色粘土の土壌の積み土に至る。南発掘区東半部では、現代の造成土のすぐ下が積み土(標高:107.6m)または地山となる。積み土は黄褐色粘土～橙褐色粘土粒(5cm前後)が大量に含まれており、硬くしまる。積み土の西端部付近から溝状に土坑(SX06～08)が掘られており、埋土(瓦層)から大量の瓦と8～12世紀代の土器



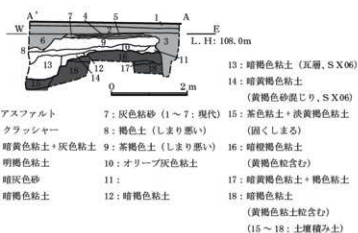
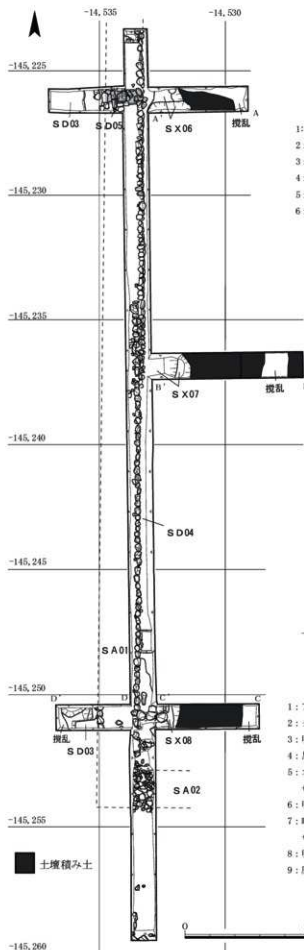
発掘区の記号

類が出土。南発掘区西半部では、現代の造成土・擾乱土の下には灰色粘土を含む黄褐色砂礫の南北塀SA01の基底部が残存していた。基底部は南北発掘区の西壁に沿うような状態で残存しており、上面には南北方向に2条の基底石が配されていた。

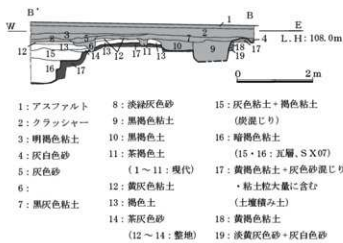
検出土構 北・中・南の発掘区の3ヵ所で、土壌を検出した。東西幅2.0～4.5m分を検出し、東端は発掘区外東へ続く。黄褐色粘土の地山から下層の整地土の上に、黄褐色粘土～橙褐色粘土粒(5cm前後)を大量に含む黄～橙褐色粘土を1～2層積み上げている。厚さは検出した地点により異なるが、0.2～0.3mある。遺物は含まず、非常に硬く締まる。土壌の検出面直上まで現代の擾乱が及んでいるため、積み土の上部はある程度度削平されていると考える。断続的にしか検出できなかったが、発掘区内の3ヵ所で検出した積み土は一連のものと考えられ、土壌の規模は東西約6.0m以上、南北約30.0m以上になると考える。今回は、土壌上で柱穴を検出することができなかったが、おそらく建物が構築されていたと推察する。

土壌の西辺部は、SX06～08で壊され、どのような形状になるかは不明だが、据え付け痕跡などの形跡もみられないことから、もともと外装施設はない可能性が高い。

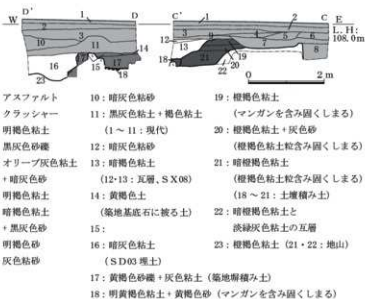
南北塀SA01は下層の整地土の上に黄褐色砂礫～灰色粘土を盛ったのち(東西幅約1.7m、厚さ約0.3m)、東と西端に人頭大の自然石を南北方向に1対に配列している。東側石列は南北約28.8mまで確認し、北端は発掘区外北へ続く。南端は東西塀SA02に接続すると考える。南北石列の軸は、北で東へ約0°10'振れる。中地点付近(X=-145,235.0)では配置が乱れており、部分的に2条に重複して配列されている箇所がある。石上面の高



東西発掘区南壁 (1/100) ※原図をリフレクトして掲載



東西発掘区南壁B-B' (1/100) ※原図をリフレクトして掲載



東西発掘区南壁D'-D・C'-C (1/100)

きが他所と異なる点から、部分的に補修した可能性がある。X = -145,235.0以北は、2～3段に石を積み上げている。

これらの構造からみて南北塀SA01は築地塀になると考える。築地塀の壁体は残存していないが、壁体土と考えられる黄褐色土（壁体崩壊土）が石列を覆いかぶさるように堆積していた。これらの層には遺物を含んでいなかった。

東西塀SA02は、南北発掘区の南端付近で検出した。地山のの上に自然石と褐色土で土壇状に盛土をしたと考えられるが、自然石は崩れており原形をとどめていない。本来の形状は不明であるが、幅は約1.6mある。東・西両端は、それぞれ発掘区外東・西へ続く。東西塀SA02は、南北塀SA01の南端と接続し、東西方向の築地塀の基礎部になると考える。

南北溝SD03は、南北塀SA01の西側で検出した南北方向の溝で、幅約8.0m以上、南北塀SA01の検出面からの深さは約0.7mある。南北溝SD03の溝埋土は暗灰色粘土で、8世紀代と考えられる丸瓦・平瓦、土師器片、須恵器片が出土した。溝の西肩は発掘区外となる。位置関係からみて、南北塀SA01の西側の雨落溝になると考える。

南北溝SD04は、南北塀SA01の東側で検出した溝で、幅は約0.5m以上あるが、東肩は土坑SX06～08によって壊されており検出できなかった。深さは、約0.3m。埋土から8世紀から12世紀代の土器類・瓦が出土した。南北塀SA01の東側の雨落溝と考える。

東西溝SD05は、南北塀SA01を横断して設けられた石組の溝で、暗渠になると考える。自然石を底面に据え、両側に自然石を二段に積み重ね側石とし、上面を約0.4m四方の平坦な自然石と凸面を上に向けた丸瓦で覆って蓋とし、蓋石の隙間に瓦や石片を詰めて築地壁体で覆う構造である。東西溝SD05の断面の内法は、幅約0.3m、高さ約0.25m。両端で0.02mの高低差をつけて水勾配とし、西へ排水したようである。また、東西溝SD05は改修された痕跡も留めており、自然石の底石から厚さ約0.1mの堆積土の上面に平瓦を据え底部としている。高低差はほとんどない。

土壇の西端では溝状の土坑SX06～08を検出した。いずれも土壇の西肩を壊して掘削されており、深さは約0.5～0.7mある。それぞれの埋土（瓦層）から8世紀から12世紀代の土器や瓦が大量に出土した。

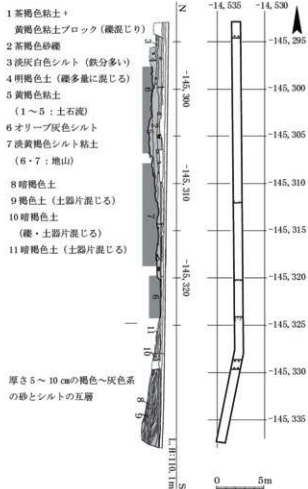
土坑SX06～08は、土壇を廃絶する際に掘削された遺構と考えられる。

第25発掘区

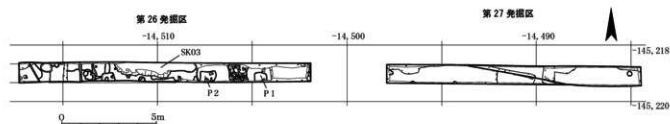
調査は、平成8年度に奈良県が実施した発掘区(9610-1区)の一部が重複するように発掘区(面積34.8㎡)を設定し、おこなった。

基本層序 現地表のアスファルトは、南へ約0.6m下り勾配となっている。その下に現代の盛土が、発掘区北端では厚さ約0.65m、南端では約0.35mある。現代盛土より下の状態は、X = -145,322.0付近では、盛土のすぐ下が地山（緑灰色シルト）となっている。地山直上の標高は105.8m。この地山は北と南へそれぞれ下降しており、X = -145,322.0付近から北は、土石流とみられる人頭大の礫を含んだ砂礫粘土が厚さ約1.0～1.4m堆積していた。X = -145,324.0付近から発掘区南端は、南への斜め堆積土が複数層認められる。これらは、大半が砂へシルト層であり、幾度か洪水を繰り返しながら砂へシルト層が堆積したと考えられる。地表面から約2.2m下へ掘り下げたが地山を確認することはできなかった。遺構は検出することはできなかった。

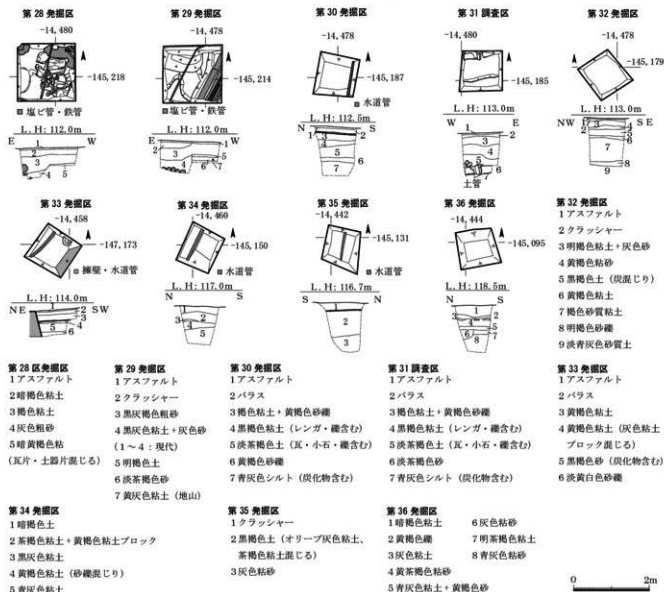
遺物は旧地表層と考えられる暗褐色土から土師器片が数点出土した。いずれも小破片であるため詳細な時期は



第25発掘区 平面図・東壁断面図 (1/400)



第26・27発掘区遺構平面図 (1/200)



第28～36発掘区遺構平面図・土層図 (1/100)

不明であるが、9世紀以降のものと同判断できる。

第26・27発掘区 龍藏院の北側の東西道路上西側に、東西15.4m、南北1.0mの第26発掘区を、その東側に東西13.5m、南北1.0mの第27発掘区を設定した。

第27発掘区の北端には、平成9年度に奈良県が実施した発掘区(9713区)の一部が重複しており、この時の調査では奈良時代の東西方向の掘立柱列1条と南北方

向の素掘り溝1条等が検出されている。

基本層序 現在の道路面の標高は、第27発掘区東端は111.3m、第26発掘区西端は108.7mで、比高差は約2.6mある。両発掘区ともアスファルトの下で、現代の平瓦を縦列にして横方向に並べた階段状の施設を検出した。瓦は、暗黄褐色粘土(第15層)に埋め込んで立たせていた。西から東にかけて地面の勾配があるため、土

留めも兼ねているものと考えられる。

第26発掘区は、階段状の施設を取り除くとすぐに地山となる。地山は、東から西にかけて下降しており、発掘区東端と西端の比高差は約1.2mある。

第27発掘区は、奈良県が実施した発掘区(9713区)を埋戻した土と配管によって大半が覆乱されている。地山の比高差は、発掘区東端と西端では約0.8mある。

検出遺構 第26発掘区では、ビット2・土坑1、現代の暗渠を検出した。ビットP1・2は、東西約0.7～0.8mの隅丸方形の掘方で、P2の掘方内には柱跡と考えられる痕跡が認められた。P1とP2の間隔は約3.0m。掘立柱建物または塼の柱穴になる可能性がある。出土遺物がないため時期は不明である。土坑SK03は、東西4.3m、南北0.7m以上の不整形なもので、北側は発掘区北へ続く。地山上面で検出した。埋土には砂混じりの暗灰色粘土が堆積し、礫や丸瓦・平瓦、12世紀代の土師器皿片が包含していた。土坑底部はほぼ平坦である。

第27発掘区では、発掘区東端に小穴を確認しただけで、他に顕著な遺構は無かった。

第28発掘区 第27発掘区東側の道路交差点で1.5m四方の発掘区を設け実施した。表土下(約0.2m)に水道管や電話・電気配管埋設に伴う覆乱土(約0.6m)がある。その下で現代の石組の暗渠を1条検出した。覆乱土からは13世紀代の土師器皿片が少量出土したが、顕著な遺構は無かった。

第29発掘区 第28発掘区の北東部に、1.5m四方の発掘区を設けて実施した。表土下0.05～0.2mで水道管・電話・電気配管埋設に伴う覆乱土を検出。発掘区南西部では表土下0.5mで黄灰色粘土の地山を検出。奈良時代の遺構は無かった。

第30～36発掘区 第30～36発掘区の大きさは約1.0m四方で、掘削した深さは約0.6～1.3mである。

第34・35発掘区では、表土を除去すると水道管が埋設された覆乱土となる。第34・35・36発掘区は、深さ1.0～1.3mまで掘下げたがいずれも現代の盛土である。第31発掘区では、表土から約1.0m下で現代の土管を使用した暗渠を1条確認した。各発掘区とも小規模であったため、地山面まで深く掘り下げることができず、奈良時代の遺構も検出できなかった。

Ⅲ 出土遺物

第12次調査では遺物整理箱で38箱分の遺物が出土した。出土遺物には、8世紀から9世紀にかけての軒平瓦・丸瓦・平瓦・土師器・須恵器、11世紀以降の土師器、12世紀から15世紀にかけての軒丸瓦・丸瓦・平瓦、

17世紀以降の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・土師器がある。瓦類の大半は、第7発掘区の明褐色砂質土層と、谷埋土である淡灰色砂質土層から出土した。

第13次調査では遺物整理箱で517箱分の遺物が出土した。その大半が瓦である。出土遺物には、8世紀から19世紀にかけての瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・垂木先瓦・文字瓦)、8世紀の土師器(土師器・須恵器・黒書土器・転用瓦)、9世紀の土師器(土師器・緑釉陶器・灰釉陶器)、13・14～15世紀の土器(土師器・瓦器・輸入陶磁器・国産陶器)、17世紀以降の土器(土師器・国産陶器・国産陶磁器)、木製品(木筒・楡扇・黒漆塗木製托・箸状木製品)、金属製品(鉄釘・縫)、铸造関連遺物(鑄羽口・溶銅・銅洋・銅滴・木炭)がある。その他に炭化部材、種子、獣骨、石材(凝灰岩)などもある。

第14次調査では遺物整理箱で206箱分の遺物が出土した。出土遺物には8世紀代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦・文字瓦・土師器・須恵器・奈良三彩・円面硯、9世紀代の土師器・須恵器・黒色土器A類・緑釉陶器・灰釉陶器・白磁・青磁・黒書土器、10世紀代の土師器、12世紀代の土師器・瓦器、13世紀代の土師器・瓦器類、その他に14世紀後半～15世紀初頭頃の土師器や製塩土器、炭が少量ある

第15次調査では出土遺物は少なく、8世紀代土師器皿片、12世紀土師器皿片、17世紀以降の土師器皿片・磁器碗片が少量あるのみである。

以下、第12～15次調査出土の軒瓦・道具瓦・文字瓦と第13・14次調査出土土器・木筒について報告する。

1. 瓦類

軒瓦 軒瓦は203点ある。各調査・発掘区別の出土点数内訳は別表のとおり6)で、TD第13次第8発掘区が出土軒瓦の大半を占め、TD第14次第24発掘区がこれに次ぐ。以下に型式・種が特定できる軒瓦等について述べる。なお、複数出土している軒瓦については、主として図示した軒瓦の製作技法を記述した。

軒丸瓦

1 (6133R) は内区に16弁単蓮華紋を飾る。間弁は無い。外区は珠紋をめぐらし、珠紋帯外側の界線は無い。西大寺の創建瓦のひとつで、第4期(757～770)。

2 (6234A) は内区に8弁複蓮華紋を飾るが、間弁が無く単弁にみえる。外区は珠紋をめぐらし、その内外に界線が有る。Aには蓮弁を高く彫り直し、弁間を突出させたものがあり、Aa・Abに区別されている。2は彫り直し前のAaである。瓦当側面上半部タテナデ、瓦当裏面丸瓦接合部はタテ方向のユビナデを施す。接合す

軒瓦出土点数一覧表

時代	図版番号	軒丸瓦								合計	時代	図版番号	軒平瓦								合計								
		7区	8区	11区	24区	26区	28区	24区	合計				7区	8区	9区	10区	22区	24区	合計										
奈良	1	6 1 3 3 R								1	奈良	23	6 5 7 2								1								
	2	6 2 3 4 A a	2						1	3		24	6 7 1 2 A										1						
	3	6 2 3 5 D	5							5		25	6 7 3 2 D											2	3				
	4	6 2 3 5 E	3							3		26	6 7 3 2 F a	5											1	2			
	5	6 2 3 5 F	4		4					8		27	6 7 3 2 F b													1	2		
	6	6 2 3 5 G	7							7		28	6 7 3 2 G														1	5	
	7	6 2 3 5 M a	2		3					5		29	6 7 3 2 H	12													1	13	
	8	6 2 3 5 M b	1		1					2		30	6 7 3 2 I															1	1
		6 2 3 5 M	1							1		31	6 7 3 2 J															1	1
		6 2 3 5 Q			1					1		32	6 7 3 2 V															2	2
	6 2 3 5	4		2					6	33	6 7 3 2 W															2	2		
	型式不明	17		3					20	34	6 7 3 3 A	2														1	1		
										35	6 7 3 3 F															1	1		
											型式不明	5														2	7		
									62																		46		
平安	10	東大寺10 4 A		11						11	平安	36	東大寺33 1 A	1		8												9	
	11	東大寺10 6 A							1	1		37	東大寺33 1 B															11	
	12	東大寺12 4 A		2	1					3		38	東大寺33 1 C																5
	13	東大寺12 5 A		1					1	1		39	東大寺33 1 新																1
	14			2					2	2			東大寺33 1	1															1
		型式不明		5					5	5		40	東大寺33 3 A																1
										41																	4		
										42																	1		
																											1		
																											1		
																											34		
中世	15	東大寺40 1 A		1					1	1	中世	43	東大寺50 1 D			1												1	2
	16	東大寺40 1		2					2	2		44	東大寺50 1 G																1
	17			1					1	1		45																	1
	18			2					2	2		46																	1
		型式不明	1	8					9	9		47																	1
												48																	2
										49																	1		
																											9		
江戸以降	19			1					1	1	江戸以降	50																	1
	20			1					1	1		51																	1
	21			1					1	1																			1
	22			1					1	1																			1
		型式不明		2				1	1	4		4																	
																												5	
合計			2	87	2	14	1	1	2	106	合計		3	1	75	1	1	6	0	1	6	0	1	6	0	1	94		

る丸瓦は先端部凹面側を少しカットし、瓦当面对し、角度を付けて接合する。第IV-2期(767～770)。

3～9(6235型)は、いわゆる東大寺式軒丸瓦である。複弁8弁蓮華紋で、大きな中房に蓮子を1重にめぐらす。外区に珠紋をめぐらし、外縁は素紋である。D・E・F・G・M・Qの6種が出土した。

3(6235D)は外区珠紋帯の内外に界線が無いのが特徴的である。外区珠紋数は18と6235型式中、最も多い。瓦当側面下半部はヨコナデし、瓦当裏面から接合部にかけてはタテ方向のユビナデを施す。瓦当裏面下半部の周縁はケズリを施し、周堤状にやや高く仕上げる。第V期(770～784)。

4(6235E)は中房が外区より高く、断面半球状を呈する。外区珠紋帯の内外に界線が有る。外縁は傾斜線I。瓦当側面下半部はケズリ、瓦当裏面から接合部にかけてはタテ方向のユビナデを施す。瓦当裏面下半部の周縁に沿ってケズリを施す。第III-2期(749～757)。

5(6235F)は中房断面がやや半球状を呈する。外区珠紋帯の内側のみ界線が有り、外側の界線は外縁下端と接し、段上を呈する。外縁は傾斜線Iである。瓦当側面上半部はタテケズリ、瓦当側面下半部はヨコケズリ、

瓦当裏面丸瓦接合部はタテ方向のユビナデを施す。接合する丸瓦は先端部凹面側をカットする。第III-2期。

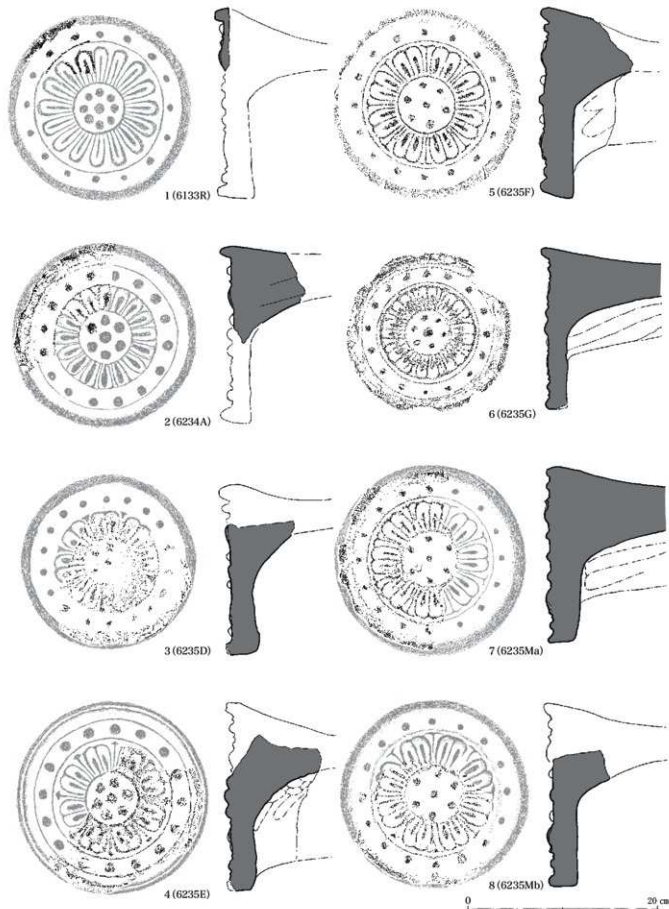
6(6235G)は中房中心蓮子が周囲の蓮子より大きめ。外区珠紋帯の内外に界線が有る。外縁は傾斜線I。瓦当側面から丸瓦部凸面にかけてタテケズリを施し、瓦当側面当下半部と瓦当裏面はヨコケズリ、瓦当裏面丸瓦接合部はタテ方向のユビナデを施す。第III-2期。

7・8(6235M)はF種に似るが、弁端の反り上がりがきつく、中房断面形が平坦である。中房蓮子配置もFとは異なる。外縁は傾斜線Iである。第III-2期。Mには内区紋様をトレースするように彫り直し、弁が高くなくなったものがあり、Ma・Mbに区別されている。Ma・Mbともに出土している。

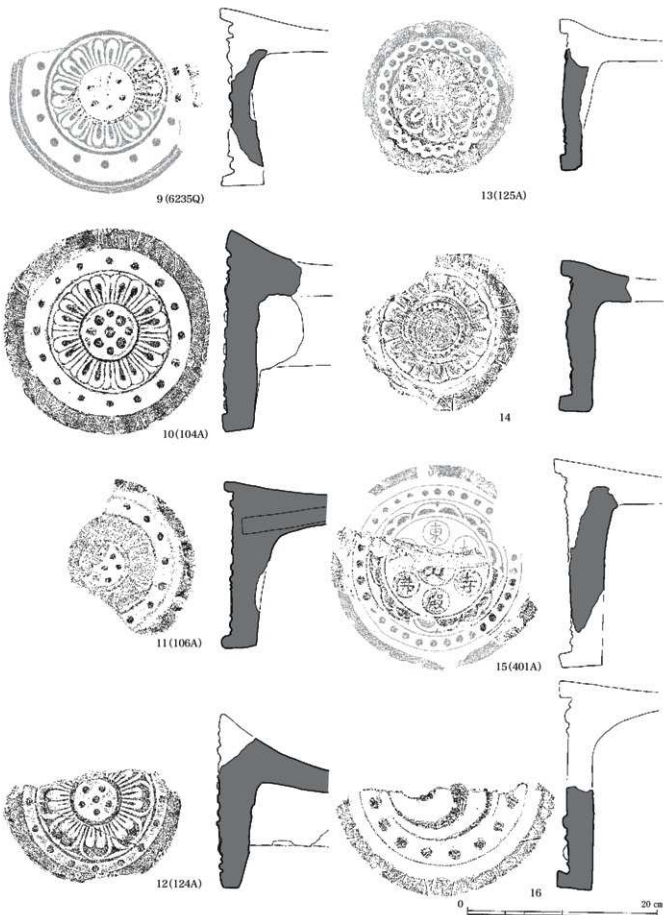
7(6235Ma)は瓦当側面上半部から、丸瓦部凸面にかけてタテケズリを施す。瓦当側面下半部はヨコナデを施す。瓦当裏面はケズリを施し、瓦当裏面丸瓦接合部はタテ方向のユビナデを施す。

8(6235Mb)は瓦当側面下半部と瓦当裏面はヨコケズリ、瓦当裏面丸瓦接合部はタテ方向のユビナデを施す。接合する丸瓦は先端部凹面側を少しカットする。

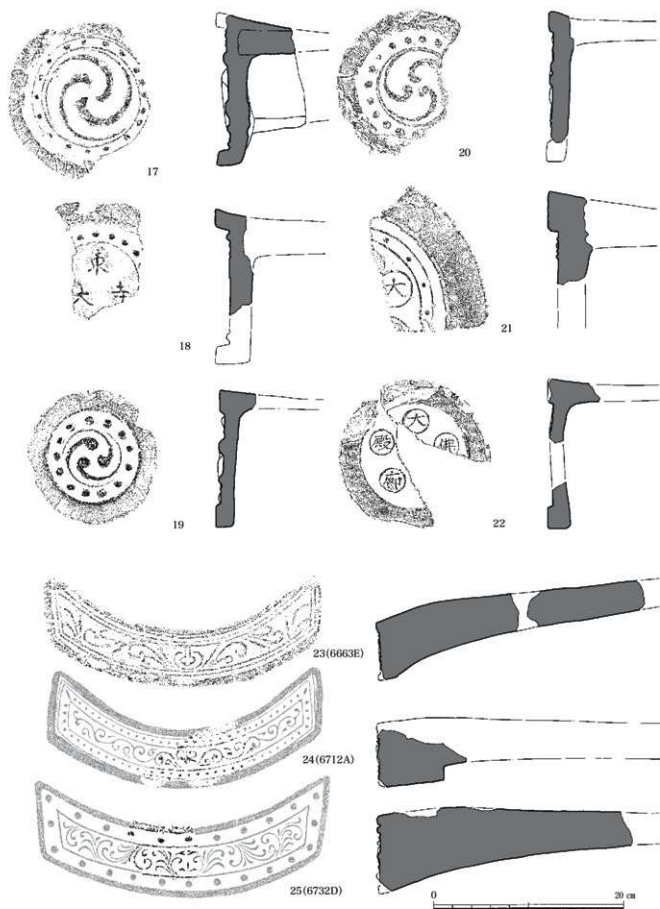
9(6235Q)は外区より内区が一段高く、中房断面



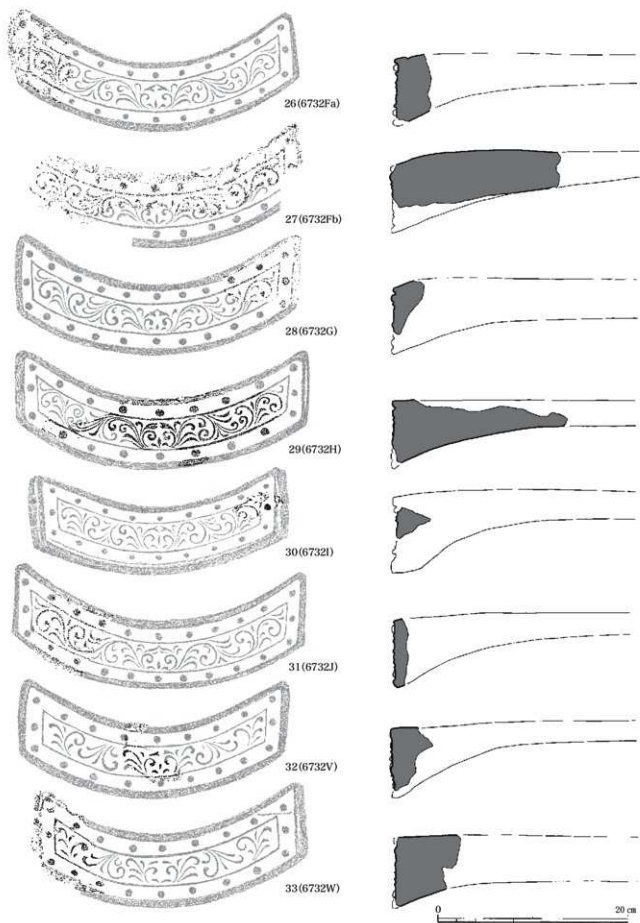
出土軒瓦 1 (1/4)



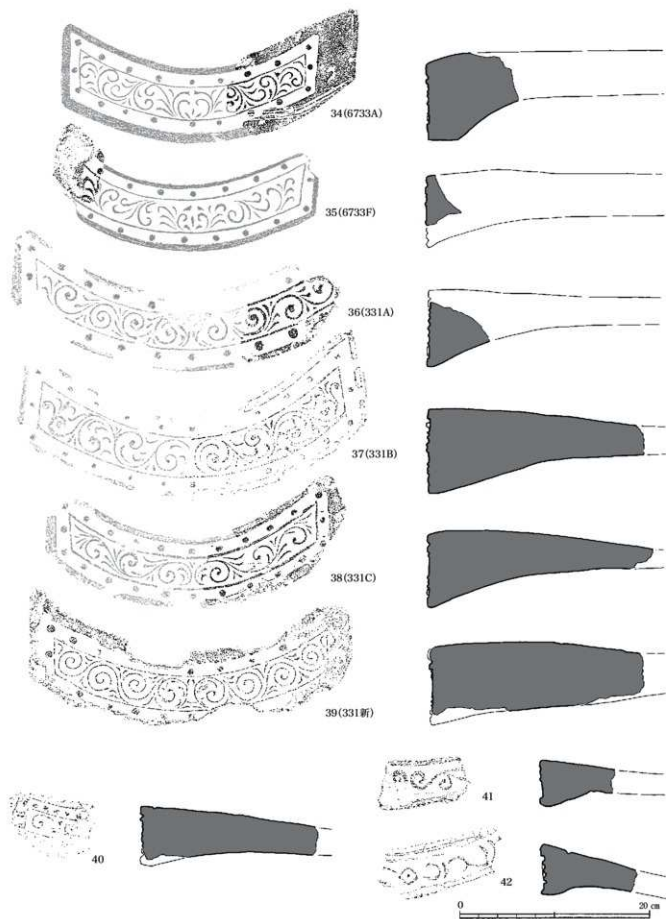
出土軒瓦2 (1/4)



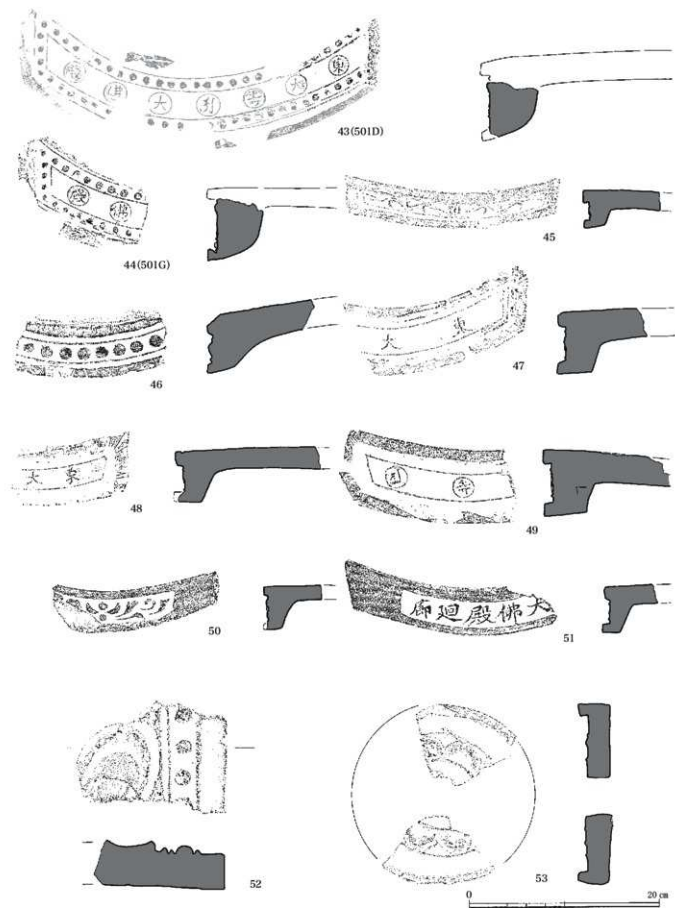
出土軒瓦3 (1/4)



出土軒瓦4 (1/4)



出土軒瓦5 (1/4)



出土軒瓦6・道具瓦(1/4)

形状は平坦である。外区珠紋帯の内側のみに界線が有る。外縁は直立縁である。瓦当裏面丸瓦接合部はタテ方向のユビナデ、のち接合線に沿ってユビナデを施す。外縁の形状から第Ⅶ期以降とみられる。

10 (104A) は内区に8弁複弁蓮華紋を飾り、外区に珠紋をめぐらす。6235 型式の復古調とみられる。

内区の蓮子は方形に近い形で1+8配する点特徴的である。外縁は低い直立縁である。外縁頂部は脱範後、丁寧なナデを施し、平坦に仕上げる。瓦当側面上半部から、丸瓦部凸面にかけてタテケズリ、瓦当側面下半部はヨコケズリを施す。丸瓦部凹面から瓦当裏面上半部にかけて、布目痕が連続しており、成形台一本造りとわかる。瓦当裏面下半部はタテナデ、のち周縁に沿ってケズリを施す。延喜17年(917)の東大寺講堂・僧房焼失後の再建瓦で、平安中期Ⅰ⁷⁾(910～973)に比定されている。

11 (106A) は内区に8弁複弁蓮華紋を飾る。間弁は両端が接続し、蓮弁外側を界線状にめぐらさず。外区に珠紋を巡らす。珠紋の外側に界線は有るが、内側は界線が無い。外縁は直立縁である。瓦当側面上半部から、丸瓦部凸面にかけてタテナデを施す。瓦当裏面接合線に沿ってユビナデを施す。接合する丸瓦は先端部無加工である。

12 (124A) は内区に複弁蓮華紋を飾る。中房圏縁は太い。外区に珠紋をめぐらし、その内側に界線は有るが、外側には無い。外縁は低い直立縁である。瓦当面には木目痕が確認でき、外区珠紋から中房圏縁付近を横断する、木目痕と同方向の範傷が確認できる。外縁頂部は脱範後、丁寧なナデを施し、平坦に仕上げる。瓦当側面上半部から、丸瓦部凸面にかけてタテケズリを施す。瓦当側面下半部はナデを施す。丸瓦部凹面から瓦当裏面上半部にかけて、布目痕が連続し、成形台一本造りとわかる。瓦当裏面下半部は周縁に沿ってケズリをほどこす。製作技法の共通性から、104Aと同じく延喜17年の火災後の再建瓦とみられている。

13 (125A) は内区に8弁単弁蓮華紋を飾る。間弁は三角形を呈する。外区は型押し風の珠紋をめぐらし、内側の界線は途切れながらも有るが、外側の界線は無い。外縁は直立縁である。中房の蓮子は脱範後、ナデ消されている。瓦当下半部側面と瓦当裏面下半部は粗いナデを施す。興福寺と同範例があり、寛仁元年(1017)の被災の後、長元4(1031)に再建された東金堂・塔の再建瓦と考えられている。同範例から125Aは平安中期Ⅱ(973～1040)のものともみられる。

14 は単弁16弁蓮華紋で、蓮弁は短く、相互に接する。中房の周囲に雄葉帯をめぐらす。外縁は直立縁である。

脱範後、中房頂部にナデが加えられ、蓮子は不明瞭となっている。瓦当側面上半部から、丸瓦部凸面にかけてタテナデ、瓦当側面下半部はヨコナデを施す。瓦当裏面はナデ、のち接合線に沿ってナデを施す。雄葉帯をもつ特徴から平安後期Ⅰ(1040～1067)とみられる。

15 (401 型式) は中央に圏縁に囲まれた胎藏界大日如来をあらわす梵字を配し、その周囲に圏縁で囲まれた「東大寺大仏殿」の6文字を配置した中房をもつ、8弁複弁蓮華紋である。外区には珠紋をめぐらし、その内外に界線がある。401 型式は字体や弁の表現からA～Gの7種確認されているが、今回出土した401 型式うち、種別まで特定できたものはA種1点である。15は弁端から外区珠紋帯を横切る範傷が401Aと一致した。脱範後、瓦当中央部にヨコ方向のユビナデを加える。瓦当裏面は丁寧なナデを施す。岡山県万富瓦窯産である。中世Ⅰ期(1180～1210)に比定される、鎌倉時代の脱範再建瓦のひとつである。

16 は、復元直径22cmを越える大型の右巻き三巴紋で、巴の尾は長く、圏縁状にめぐらさず。外区には大きめの珠紋をめぐらす。珠紋帯の内側に界線は無く、外側には有る。東大寺822Aと同範の可能性が高い。瓦当面に離れ砂が確認できる。瓦当側面下半部と瓦当裏面下半部はヨコナデを施す。中世Ⅲ(1260～1300)～Ⅳ期(1300～1333)とみられる。

17 は左巻き三巴紋である。巴頭部は尖る。珠紋を18めぐらし、内外に界線が有る。瓦当側面上半部から、丸瓦部凸面にかけてタテケズリを施し、瓦当側面下半部はヨコナデを施す。瓦当裏面下半部はヨコナデ、のち接合線に沿ってナデを施す。中世Ⅰ～Ⅱ期(1210～1260)とみられる。

18 は内区の上方に「東」を、その左下に「大」を、右下に「寺」の3文字を配する。「東」字は第4画が無い。外区には珠紋をめぐらし、珠紋帯の外側に界線は無く、内側には有る。瓦当面には離れ砂が確認できる。外縁頂部は未調整である。瓦当側面上半部はタテナデ、瓦当裏面は接合線に沿うナデを施す。18は紋様構成が似る大安寺175Aの年代観から、中世Ⅲ期頃とみられる。

19 は左巻き三巴紋。巴の頭部はオタマジャクシ形である。外区に珠紋13をめぐらす。その内外に界線は無い。瓦当面にキラコが確認できる。外縁頂部は丁寧なナデを施す。瓦当側面上半部はタテナデを施す。瓦当側面下半部と瓦当裏面はヨコナデを施す。接合線に沿ってナデを施す。近世Ⅵ期(1682～1724)以降とみられる。

20 は右巻き三巴紋。巴紋は小さめだが、巴の尾は長

く伸び、珠紋帯内側の界線に接続する。瓦当面にキラコが確認できる。外縁頂部は丁寧なナデを施す。瓦当側面上半部はタテナデを施す。瓦当裏面はヨコナデ、接合線に沿ってナデを施す。瓦当裏面丸瓦接合面にカキメを施す。近世Ⅲ-2期(1600～1625)～近世Ⅳ期(1765～1800)とみられる。

21は復元直径約30cmの大型品で、内区に圏線で囲まれた「東大寺大佛殿」の6文字を配するとみられる。外区は小さめの珠紋をめぐらし、内外に界線がある。外縁頂部は丁寧なナデを施す。瓦当外縁内側に面取りを行うが、外側には無い。瓦当面にキラコが確認できる。瓦当側面上半部はナデ、瓦当裏面接合線に沿ってナデを施す。瓦当裏面丸瓦接合面にカキメを施す。近世Ⅵ期(1682～1724)で、文字内容と大きさから、元禄の大仏殿再建用(1702～1709)の瓦とみられている。

22は圏線で囲まれた「大佛殿廻廊」の5文字を配するとみられる。外縁頂部は丁寧なナデを施す。瓦当側面上半部と下半部はヨコナデを施し、丸瓦部凸面はタテナデを施す。瓦当裏面はヨコナデ、のち周縁と瓦当裏面接合線に沿ってナデを施す。瓦当外縁外側は面取りを施しており、19世紀以降のものともみられる。

軒平瓦

23(6663E)は内区に花頭形中心飾りをもつ、左右3回反転均整唐草文を飾り、内・外区間は2重界線を飾る。唐草紋各単位の基部が、主葉・支葉とも界線から基部を近接させて派生し、唐草第3単位の主葉と第1支葉が脇区界線に付く。顎の断面形態は顎端面をもつ曲線顎Ⅱで、顎端面はヨコナデ、凸面瓦当側はタテナデのち、顎端面側をヨコナデする。凸面後方はタテ縄タタキ目を残す。凹面は瓦当側を幅5cm程度ヨコケズリし、後方は布目痕が残る。焼成後、平瓦部のほぼ中心に、凹凸両面側から釘穴を穿孔する。6663Eは押撫瓦窯・阿弥陀谷庵寺に同范例がある。第Ⅲ-1期(745～749)。

24(6712A)はいわゆる大安寺式軒瓦で、内区に牛頭形の中心飾りをもつ5回反転均整唐草紋を飾る。唐草の各単位は独立せず、蔓が連続してのびて、数箇所で支葉が派生する。基本的各単位の支葉の巻きは主葉と対向する。外区には小さめの珠紋を密にめぐらす。顎の断面形態は段顎Ⅱである。顎端面はタテケズリのちヨコナデ、顎後端部と凸面瓦当側はヨコケズリ。頸形状・胎土・焼成は大安寺出土品の同范例に同様のものがある。これまで東大寺大仏殿周辺では大安寺式軒瓦が散見され、これらは聖武太上天皇一周忌斎に合わせた伽藍整備の為、大安寺から東大寺に持ち込まれたとの指摘⁶⁾があり、第

Ⅲ-2期とされる。

25～33(6732型式)はいわゆる東大寺式軒平瓦。中心飾りは三葉形の左右に上向きの唐草が噛み、その上に対葉華紋を配する。唐草は左右3回反転し、各単位の多めの支葉を配する。外区は大振りの珠紋を飾る。D・F・G・H・I・J・V・Wの8種が出土した。

25(6732D)は唐草が分解気味で、対葉華紋は左右に分離する。第3単位外側の支葉は1葉である。中心飾り両肩に巻きの弱い支葉を各2葉配すのが特徴的。顎部と凸面はタテケズリ、凹面は瓦当側を幅12cm程度ヨコナデし、後方は布目痕が残る。側面はタテケズリを施すが、平瓦部側面の一部に布目痕が残る。側面に立ちあがり設けた型枠状の凸型台を用いた、いわゆる凸面布目押圧技法による製作とみられる。第Ⅳ-2期。

26・27(6732F)は唐草紋の影り込みが巻きの内側に向かって斜面を形成する「片切り彫り風」。対葉華紋は二つに分かれた先端の上部がつかかり、第3単位外側の支葉は2葉である。Fには珠紋を大きく、唐草を太く彫り直したものがあることから、Fa・Fbに区別されており、両者とも出土している。第Ⅲ-2期。

26(6732Fa)は瓦当面に細かい木目痕が確認できる。顎部はタテナデを、凹面瓦当側はヨコナデを施す。

27(6732Fb)は平瓦部凸面にナデを施す。

28(6732G)はFに似るが、第3単位外側の上方の支葉の巻きがFよりも強い。凹面瓦当側はヨコケズリを施す。第Ⅲ-2期。

29(6732H)は6732型式の中で最も唐草の巻き込みが強い。対葉華紋は左右に分離する。第3単位外側の支葉は1葉である。顎の断面形態は顎端面が無い曲線顎Ⅰである。顎部から平瓦部凸面にかけてタテケズリを施す。凹面は瓦当側をヨコケズリし、後方は布目痕が残る。第Ⅳ-2期。

30(6732I)は6732型式中では、やや小型品。唐草が分解し、対葉華紋は左右に分離する。第3単位外側の支葉は1葉で小さい。第Ⅴ期。

31(6732J)はF・G種と似るが、対葉華紋とその左右の支葉が2葉構成であることは特徴的である。凹面瓦当側と凸面瓦当側はヨコナデを施す。第Ⅲ-2期。

32(6732K)は唐草が分解し、主葉と第1支葉の一つがほとんど同じ大きさである。対葉華紋は左右に分離する。第3単位外側の支葉は無い。凹面瓦当側はヨコナデを施す。第Ⅴ期。

33(6732W)は唐草が分解し、対葉華紋は左右に分離する。第3単位外側の支葉は無い。中心飾りが二葉形

であることは特徴的である。凸面顎部はタテケズリを施す。凹面は瓦当側を幅2cm程度ヨコケズリし、後方は布目痕が残る。第V期。

34・35 (6733 型式) は6732 型式に似るが、唐草が分解しているもの。A・Fの2種が出土した。

34 (6733A) は、中心飾りの対葉華紋が長く伸び、中心飾りを囲い込む。第3単位外側の支葉は1葉である。脇の外縁を広く残す。顎端面は約3cmと広めの曲線顎IIである。断面観察から瓦当部は、凸面側に2枚以上の粘土を重ねて成形していることがわかる。顎端面はヨコケズリ、顎部はタテケズリを施す。凹面は瓦当側を幅2cm程度ヨコケズリし、後方は布目痕が残る。第V期。

35 (6733F) は、6732Vに似るが、唐草の巻きは強い。凹面瓦当側はナデを施す。第V期。

36～39 (331 型式) は中心飾りが無い均整唐草紋。唐草主葉の巻きが強く渦状となる箇所が多い。C種を除き4回反転。外区は珠紋を飾る。A～C種と新種がある。331 型式は平安時代前期(794～910)とみられている。

36 (331A) は第4単位外側に3つの支葉を配する。顎の断面形態は幅約5mmの顎端面をもつ曲線顎IIである。顎端面はヨコケズリ、顎部はタテケズリを施す。

37 (331B) は第4単位主葉が二股に分かれ、その上に3葉形を配する。顎の断面形態は幅約0.8cmの顎端面をもつ曲線顎IIである。顎端面はヨコケズリ、顎部から平瓦部凸面にかけてはタテケズリし、部分的にタテ方向のエビナデを施す。凹面瓦当側は幅4cm程度ヨコケズリし、後方は布目痕が残る。

38 (331C) は3回反転唐草紋。中央上部にV字形の小葉を配する。瓦当面上方から右下方へ木目痕が確認できる。幅約0.4cmの顎端面をもつ曲線顎II。顎端面はヨコケズリ、顎部から平瓦部凸面にかけてはタテケズリ。凹面瓦当側を幅3cm程度ヨコケズリし、そこから後方11cm程度まではタテナデ、以下は布目痕が残る。断面観察から2枚以上の粘土板を貼り合わせて成形していることがわかり、その接合面には糸切痕が確認できる。

39 (331 新種) は、中央に2つ、中央下部に4つの小葉を配する。左右第4単位外側上方に、1つの支葉を配する。凸面平瓦部タテケズリ、凹面瓦当側は幅1cm程度をヨコナデし、後方は布目痕が残る。東大寺西塔院出土品⁹⁾は同範の可能性が高い。

40 (333A) は内区に唐草紋を飾り、その唐草は主葉に比して支葉が小さい点が特徴的である。外区は珠紋を配する。左脇区珠紋に范傷が確認できる。凸面の平瓦部はナデを施す。凹面は瓦当側を幅1.5cm程度ヨコケズリ

し、後方は布目痕が残る。

41 は内区に中心飾りの無い均整唐草紋を飾り、その唐草は連続する。唐草右第2単位の左上から右下方へ横切る范傷が確認できる。断面観察から、平瓦広端部凸面側に顎用粘土を貼り付けて、成形した顎貼り付け技法による製作とわかる。顎端面はナデ、顎部と平瓦部の境にヨコナデを施す。凹面瓦当側は、幅0.5cm程度ヨコケズリを施し、後方は布目痕が残る。

42 は丸丸方形の枠線の中に珠点を配置した紋様を中心飾りとする。中心飾り左右の主葉の巻きの方向がそれぞれ異なる点は特徴的である。上外縁頂部の上半はヨコケズリを施す。顎部から平瓦部凸面にかけては、ヨコエビナデを施す。凹面瓦当側は幅2.0cm程度ナデを施し、後方は布目痕が残る。1130～1180年に比定される興福寺VII平E9¹⁰⁾と同範の可能性が高い。

43・44 (501 型式) は内区中央に圓線で囲まれた胎藏界大日如来の梵字を配し、右から左に「東大寺大仏殿」と配した文字紋を飾り、外区は珠紋を巡らす。中世I期(1180～1210)に比定される、鎌倉時代の東大寺大仏殿再建瓦である。501 型式は字体の違いなどから、A～Hの8種類に分けられているが、D・G2種が出土した。

43 (501D) は、「東」字の第6画が跳ね上がらない。図示したものは、右脇区を切り落とした、改範資料である。瓦当成形法は顎貼り付け式で、顎用粘土の接合面には指頭瓦痕が残る。顎部から顎後端部にかけてヨコハケを施し、部分的に指頭瓦痕が残る。

44 (501G) は簡略化された「殿」字が特徴的。顎貼り付け式で、顎用粘土の接合面には指頭瓦痕が残る。顎部から顎後端部にかけてヨコナデを施す。

45 は内区に三葉形の中心飾りをもつ4回反転均整唐草紋を飾り、外側に界線をめぐらす。瓦当面に白色の離れ砂が確認できる。外縁頂部は脱范後未調整である。瓦当左下の面取り、顎後縁の面取りは無い。顎部ヨコナデ、凸面平瓦部はタテナデを施す。凹面は布目痕を残す。

46 は内区に平板な連珠紋を飾る。連珠紋の外側には界線をめぐらす。顎端面はヨコケズリ、顎部から凸面平瓦部にかけてはタテケズリを施す。瓦当上縁はヨコハケ、後方は布目痕を残し、部分的にタテナデを施す。東大寺701Aは同範の可能性が高い。紋様構成から中世I～III期とみられる。

47 は右から「東大」の文字を配し、外側に界線がめぐる。断面観察から瓦当貼り付け式顎とわかる。外縁頂部は未調整である。顎端面から顎後端部はヨコケズリし、顎部後縁はヨコケズリで面取りする。顎部と凸面平

瓦部の境はヨコナデ、凸面平瓦部はタテケズリを施す。瓦当上縁はヨコケズリで面取りし、凹面はタテケズリを施す。顎部後縁に面取りを施す瓦当貼り付け式段頸であることから、中世V期(1333～1380)とみられる。

48は47と同じく右から「東大」の文字を配する小型品。瓦当面には、左上から右下方向の木目痕が確認できる。上外縁頂部の上半にヨコケズリを施す他は、外縁頂部は未調整である。顎端面から顎後端部はヨコナデし、凸面平瓦部はタテケズリを施す。凸面顎部に凹型台の圧痕が残る。凹面は布目痕を残し、部分的にヨコナデを施す。47と同じ中世V期とみられる。

49は内区に圈線で囲まれた「寺」と胎藏界大日如来の梵字を配し、その外側に界線がめぐる。断面観察から瓦当裏面に補足粘土を加えた、瓦当貼り付け式段頸とわかる。顎端面から顎後端部はヨコナデし、凸面平瓦部はタテケズリの後、ナデを施す。顎後縁に面取りは無い。凹面はナデを施す。中世III期とみられる。

50は内区に横紋を飾る。外縁は丁寧なナデで、平坦にする。断面観察から瓦当成形法は、平瓦広端部凸面側にカキメを施したのち、顎用粘土を貼り付け整形した顎貼り付け式段頸とわかる。瓦当外縁に沿って幅0.2cm程度の面取りを施す。凹凸両面ともヨコナデを施す。19世紀以降のものともみられる。

51は内区に、右から「大佛殿廻廊」の文字を配する。外縁は丁寧なナデで、平坦にする。瓦当外縁に沿って0.3cm程度の面取りを施す。凹凸両面ともヨコナデを施す。22の軒丸瓦と文字の内容が同じで、筆跡も似ることから、これと組み合う、19世紀以降のものともみられる。

鬼瓦

52は范型を用いた獣面紋鬼瓦である。第8発掘区西端部から1点出土した。右上の牙部から外区部分を残す小片である。外区は珠紋をめぐらす。側面ヨコナデ、裏面はタテナデを施す。その大ききから南都七大寺式1式Aとみられ、従来知られていなかった紋様部を補充する資料の可能性がある。

垂木先瓦

53は范型を用いて、単弁蓮華紋を飾った垂木先瓦。第8発掘区中央部から2点出土し、両者同范とみられる。復元直径19.2cm。蓮弁は中央が窪む。蓮弁の外側に界線を設けるが、界線が弧を描かず、直線になっている箇所が見受けられる。外区と外縁は素紋である。外縁の断面形状は直立縁である。中央に一辺約3cmの釘穴を焼成前に穿孔する。平安時代とみられる。

文字瓦

ここでは、瓦の焼成前に押捺した刻印による文字瓦のうち、古代とみられる瓦について述べる。

54の刻印「六人」は恭仁宮式文字瓦 KJ05A である。第24発掘区から2点出土。「六」は各画が接続し、「大」のようにみえる。KJ05A には、「人」の第2画右上に傷が生じた段階のものか確認されているが、本例は傷が無い段階である。丁寧なナデを施した平瓦凹面に、広端部側を天位置とし押捺。印幅2.5cm、印長23cm以上である。

55の刻印「真依」は恭仁宮式文字瓦 KJ12B である。第24発掘区から2点出土した。「真」の第7画を省略し、第6画が第8画に接続する。丁寧なナデを施した平瓦凹面に狭端部側を天位置として押捺されている。印幅2.8cm、印長15.4cm以上である。

56・59は「長」の逆字。刻印「長」は東大寺ではA・B2種が知られる。59はA種である。A種には第8画が無い。第24発掘区から1点出土した。平瓦凹面の端面・側面寄りに、布目痕の上から押捺されている。印幅2.2cm、印長3.5cm以上である。56はB種に似るが、B種に無い第2画が確認できる。B種の影り加えの可能性がある。第24発掘区から1点出土した。平瓦凹面に広端部側を天位置として、布目痕の上から押捺されている。印幅は2.7cm、印長は4.7cm以上である。

58は「家」の逆字の刻印。刻印「家」は東大寺ではA・B2種が知られるが、58はA種である。第7発掘区で1点出土した。平瓦凹面端面・側面寄りに、布目痕の上から押捺されている。印幅2.2cm、印長3.7cm以上である。

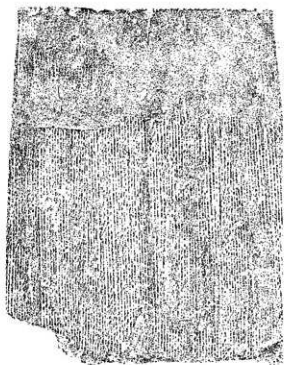
60は「水」。刻印「水」は東大寺ではA・B2種が知られるが、本例はB種である。第8発掘区で1点出土した。平瓦凹面に布目痕の上から押捺されている。印幅2.6cm以上、印長3.1cm以上である。

61は「本」。刻印「本」は東大寺では1種が知られ、これと同印である。第8発掘区で1点出土した。平瓦凹面の側面寄りに布目痕の上から押捺されている。印幅2.5cm以上、印長5.6cm以上である。

62～64は「大国」。刻印「大国」は東大寺ではA～Eの5種が知られ、A・C・E種が出土した。62はA種である。「国」は第5画が無い。第8発掘区から3点出土。平瓦凹面の側面寄りに布目痕の上から押捺されている。図示したものは横方向に2連打されている。なお、東大寺で出土する「大国」A種には5連打されたものも確認されている。印幅2.2cm以上、印長4.8cm以上である。63は「大」が逆字のC種である。「国」は「田」と表記され「国」の異字体とみられている。第8発掘区から2点出土。平瓦凹面の側面寄りに布目痕の上から押捺されている。印幅



54(KJ05A「六人」)



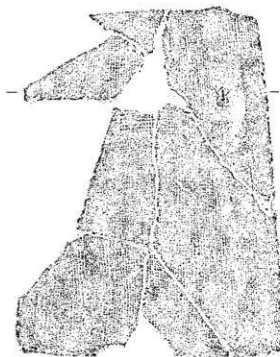
55(KJ12B「真依」)

0 20 cm

出土文字瓦1 (1/4)

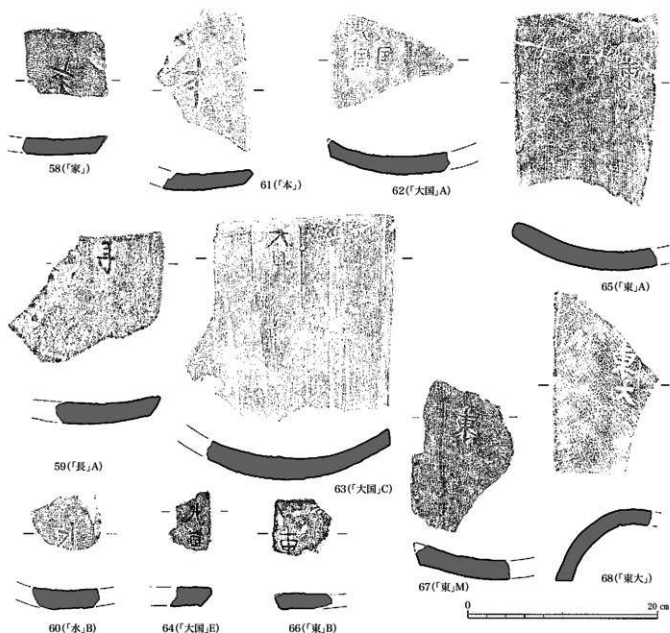


56(「長」)



57(「東」E)





出土文字瓦3 (1/4)

5.0cm、印長6.5cm以上。64はB種に似るが、「大」が細長いE種である。第3・8両発掘区から各1点の計2点出土した。平瓦凹面の側面寄りに布目痕の上から押捺されている。印幅2.1cm以上、印長5.0cm以上である。

57・65～67は「東」である。東大寺出土刻印「東」は字体の違いからA～Nの14種が知られている。65はA種である。A種は第7画の左払いの根元に傷、もしくは余分な1画を入れる。第24発掘区から2点出土。平瓦凹面の端部寄りに、布目痕の上から押捺。印幅2.7cm、印長9.6cm以上である。66は第3画と第4画の幅が広く、第4画と第5画の幅が狭いB種である。第24発掘区から1点出土した。平瓦凹面の端部・側面寄りに

布目痕の上から押捺されている。印幅2.0cm以上、印長3.0cm以上。57は「東」の逆字で、E種である。第24発掘区で1点出土した。平瓦凹面に広端部側を天位置として布目痕の上から押捺されている。印幅3.4cm、印長8.1cm以上である。67も「東」の逆字だが、ゴシック体風のM種である。第8発掘区調査後の工事立会で1点出土した。平瓦凹面の側面寄りに布目痕の上から押捺されている。印幅2.5cm、印長3.7cm以上である。

68は「東大」。「東」は逆字となっている。刻印「東大」は東大寺ではA・Bの2種が知られているが、これらは陽刻で、このような陰刻資料は初出となる。第24発掘区から1点出土した。丸瓦凹面広端部寄りに、狭端側を

天位置として、布目痕の上から押捺されている。印幅3.1cm以上、印長7.0cm以上である。

2. 土器類

第24発掘区から出土した土器類は、遺物整理箱で30箱あり、その大半がSX06～08の埋土（以下、瓦層と呼ぶ。）から出土した土器と須恵器である。

以下、瓦層から出土した土器群と第8・24発掘区で出土した陶磁器について概要を記す。

土師器 土師器には、杯A・B、皿A、椀A、高杯、鉢、甕がある。このうち杯・皿類が主体を占めている。

杯A（1～18）は、口径が15.0cm～18.8cmまでのものがある。調整は強いヨコナデのちヘラケズリが施されているもの（e-c手法）が主流であるが、口縁部上端部だけをヨコナデし、ヘラケズリを施さない個体（e手法）もある。器厚も約5mmとやや厚みのあるものから、3mm前後と薄手化したものまでである。また、形態的特徴にも相違がみられ、大きく4つ（a～d）に分類することができる。

（a）平坦な底部から口縁部が斜め上方に直線的に開くタイプのもので、2・7・15・16・17・18が属する。2はe手法、他はe-c手法である。器厚は、いずれも5mm前後で比較的厚い。

（b）やや丸みのある底部から内湾ぎみに口縁部が立ち上がり、口縁部上半から外反するタイプのもので、1・4～6・9・11～14が属する。6だけがe手法で、その他はe-c手法である。aタイプの個体よりもやや薄手のものが多い。5・9の内面にはコテと思われる工具痕跡が、12の内面にはハケメ痕跡が残る。

（c）bタイプのものと形状は似ているが、口縁上端部が強く外反するもので、3・10が属する。3はe手法で、10はe-c手法。3の口縁部内面には煤が付着しており、灯明皿として利用されたものと考えられる。

（d）底部から内湾ぎみに立ち上がる口縁部からなるタイプで、8が属する。8はe手法で仕上げられており、内面にはハケメ痕跡、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。口縁部内面にはわずかに煤が付着している。器厚は2～3mmと薄い。

杯Aは口縁部の形状で大きく4つに分類したが、口縁部の形状にもわずかながら差異が認められ、今後さらに分類できる可能性がある。

杯B（63～67）は、復元可能な資料を掲載した。口径は17.6cm（64）～20.8cm（67）までのものがある。器高が分かるものは少ないが、64の器高は3.9cmである。いずれもe-c手法で仕上げられている。64・65は、内

面にハケメ痕跡が残る。63～65・67は、強いヨコナデにより口縁部が外反している。

皿A（40～62）は、口径13.8cm～22.0cm、器高1.8～2.5cmまでのものがある。調整は、杯Aと傾向が似ており、e-c手法が主体であるが、e手法も一定量ある。皿Aは形態的特徴から、大きく4つ（a～d）に分類できる。

（a）広く平坦な底部とやや内湾ぎみに斜め上方に開く口縁部からなる。48・49・50・56・58・61が属する。48以外の口縁部は内側に肥厚する。調整は、外面全体をケズリで仕上げるe手法（50・61）、e-c手法（48・49・58）、e手法（56）がある。48は灯明の痕跡が残る。

（b）やや丸みのある底部から内湾ぎみに口縁部が立ち上がり、口縁部上半から外反する。口縁部が内側に肥厚するタイプのもので、40・43・45・51～53・55・57・59・60が属する。調整は、55・60がe手法で、それ以外はe-c手法である。

（c）bタイプと基本的な形態は似ているが、口縁上端部が強く外反するもので、41・47・54・62が属する。調整は、47・54がe手法、41・62はe-c手法。54の口縁部内面にはコテのアクリと考えられる痕跡が残る。

（d）基本的な形態はbタイプと共通しているが、口縁部を内側に折り曲げ、口縁部外面に面をもつタイプのもので、42・44・46が属する。

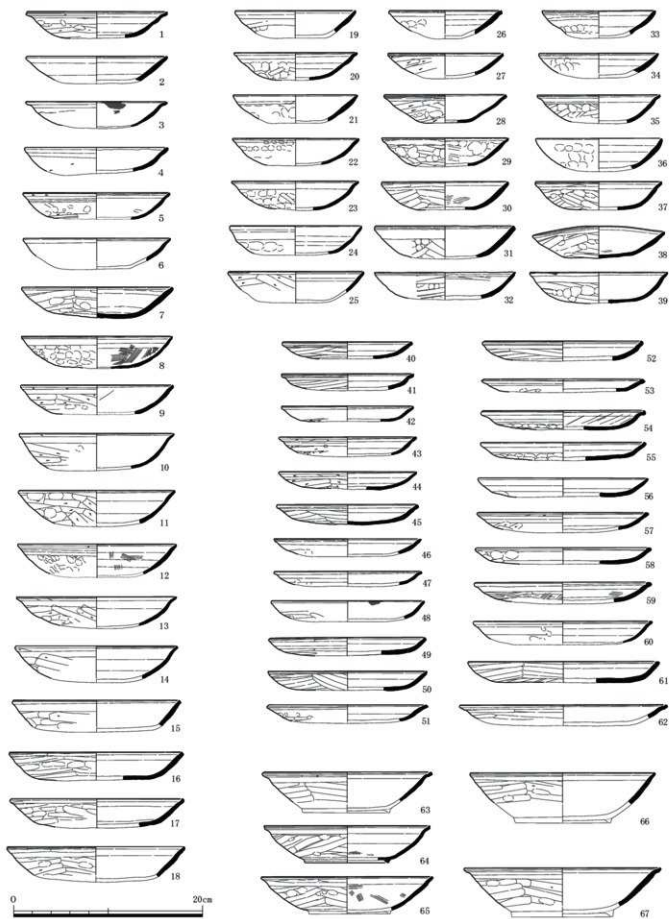
46は口縁部が内傾しているが、個体の変異幅におさまるものと判断した。調整は、46がe手法、44・46はe-c手法である。

椀A（19～39）は、口径12.0cm～14.9cmまでのものがある。杯・皿と同様に、体部外面にはヘラケズリ調整されているものが多いが、口縁部だけをヨコナデするe手法も一定量ある。形態的な特徴から大きく3つ（a～c）に分類できる。

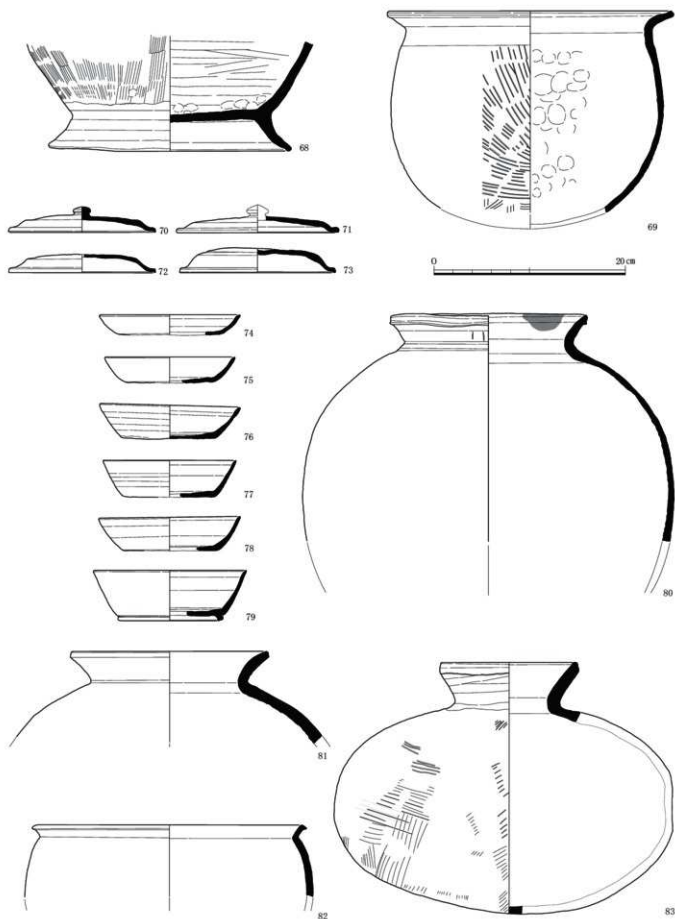
（a）小さい丸底ふうの底部と内湾しながら立ち上がる体部からなり、口縁部が内側に小さく肥厚するもので、27・30・31・34・38が属する。34はe手法で、それ以外はc手法。

（b）体部上半から口縁部にかけて外反するタイプのもので、20・22～26・28・29・32・35・37・39が属する。調整は、底部外面から体部外面にかけてケズリを施すc手法（25・32・35）と口縁部だけをヨコナデするe手法（20・22～24・26）とe-c手法（28・29・37・39）がある。体部外面にヘラミガキがあるものは確認していない。

（c）基本的な形態はaタイプに似ているが、体部上半から内湾するもので、口縁部は肥厚せず丸くおさま



第24発掘区瓦刷出土土器 1 (1/4)



第24発掘区瓦層出土土器2 (1/4)

るものが多い。19・21・33・36が属する。いずれもe手法であるが、19は体部外面の一部にヘラケズリの痕跡が残る。

以上のように土師器杯・皿・碗は形態的特徴等から3～4つに分類することができるが、これらは時期的な型式差や工人または産地の違いに拠ると考えられる。

鉢(68)は、高台が付くタイプのもので、高台径は24.5cm。体部外面には縦方向のハケメ痕跡が残っており、体部下半から上半にむかって施されていることがわかる。体部内面にはヨコナデ調整と指頭圧痕が残っており、体部を調整したのちに高台を貼り付けたことが理解できる。底部内面は、ところどころ火を受けて変色した痕が見られる。

甕(69)は、丸底の底部と外反する口縁部からなり、いわゆる「都城形」¹¹⁾と呼ばれるタイプのものである。口径30.2cm、胴部最大径28.6cmを測る。体部外面には、タキ痕跡が明瞭に残っており、内面には当て具と思われる円形状の痕跡が残る。体部外面には煤が付着。

今回は一部の資料しか掲載できなかったが、このほかに土師器高杯・杯蓋などの器種が少数ある。

須恵器 須恵器には杯A・B、皿A、杯蓋、横瓶、甕がある。

杯A(75～78)は、口径は13.6cm(75)～14.8cm(78)までのものである。いずれも特徴がよく似ており、焼成不良で、色調は淡黄色をおびた灰白色を呈している。口縁部内外面はクロコナデ、底部外面はヘラケリのままである。75は口縁部外面上半部に炭素が吸着している。

皿A(74)は、口径14.7cm。口縁部内外面をクロコナデ、底部外面はヘラケリのままである。杯Aと同様に、焼成不良で、灰白色を呈している。74も口縁部上半部に炭素が吸着している。重ね焼きによるものであろう。

杯B(79)は、口径16.0cm、器高5.3cm。低い角高台が外側に付く。焼成は良好で、胎土も密である。

杯蓋(70～73)は、鈕がつくもの(70・71)とつかないもの(72・73)とがある。70は口径15.4cm、器高3.65cm、焼成は良好。71は口径17.0cm、焼成不良でやや淡黄色をおびた灰白色を呈する。72は口径15.3cm、器高1.9cm、73は口径16.3cm、器高2.6cm。いずれも焼成は良好。調整は、4点とも頂部内面から縁部外面はクロコナデ、頂部外面はヘラケリのままである。73は、頂部の成形が雑で、部分的に歪んでいる。頂部内面は、摩耗しておりクロコナデ調整の痕跡が消えている。墨の痕跡はみられないが、観として使用された可能性がある。

横瓶(83)は、口径14.4cm、器高26.3cm、体部は最大で35.0cmを測る。頸部から肩部外面にかけては不定方向のヨコナデ、体部にはタキの痕跡が残る。口縁部内面から外面全体に自然軸がゆがっている。完形のため内面の形状や調整などがわかりにくい、同心円状のあて具痕が明瞭に残っている。焼成は良好。このほかに6個体の横瓶が出土している。

甕(80～82)は、丸底タイプ(80・81)と平底タイプ(82)がある。80は口径20.8cm、胴部最大径38.9cm、底部を欠くが、やや長めの体部になると考える。頸部外面には縦に二条の線がヘラ描きされている。窯記号か。81は口径20.8cm。肩部から体部にかけてのタキ痕跡はナデにより消されているが内面は同心円状のあて具痕跡は明瞭に残っている。焼成は良好。82は、底部が平底になるもので甕Dと呼称されているものである。口縁部が外側に引出されるような形状をしている。口径28.6cmを測る。内外面ともクロコナデで調整されている。焼成は良好である。口縁部内面には火弾痕が残る。

この他に、瓦層からは、奈良三彩、9世紀代の緑釉陶器・灰釉陶器、9世紀後半～10世紀初頭頃の黒色土器A類碗や12世紀頃の土師器皿・瓦器碗の破片、製塩土器が出土している。製塩土器は小片のため図示し得なかったが、遺物整理箱で約1箱分ある。

奈良三彩鉢(84)は、口径22.6cm、体部最大径24.6cmに復原できる。底部が尖底形になり、いわゆる「鉄鉢」とよばれる器形である。外面には、素地に淡緑色釉を施した後に濃緑色の釉をかけている。褐釉はみられず、二彩になると思われる。内面は淡緑色の釉が施されている。軟質の胎土で、灰白色を呈する。この他にも、杯A皿、碗、鉢の破片が7点ある。

以上、瓦層から出土した土師器・須恵器、奈良三彩の概要を述べた。

土師器杯・皿・碗については、幾つかのタイプに分類することができた。

今回掲載した資料は、口縁部上半が強いヨコナデにより外反する特徴を持つものが大半である。このような傾向は9世紀中～後半頃以降にみられる特徴である¹²⁾。

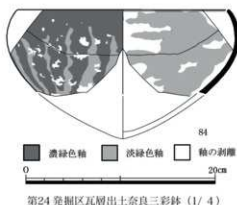
一方、少数ではあるが、杯A・皿A・碗Aのaタイプに属する15・16・17・61・27・30・31・34・38は、器厚が他のものと比べてやや厚く、口縁部上半の外反が少ないという特徴は古相を示しており、時期的には8世紀末～9世紀初頭頃と考えられる。

これらのことから、瓦層には、時期的に差のある土器が混在した状態で埋められていたことを示していると推

察される。ただ、形態的な特徴や調整手法の微妙な相違は、時期的な差だけではなく、工人あるいは産地の違いなどを反映していると考えられるため引き続き調査が必要である。

瓦層からは、数点ではあるが、12世紀代の土師器皿・瓦器碗の破片が出土している。最終的に瓦層が埋められたのは12世紀頃と判断できる。

器種構成については、土師器、須恵器ともに杯皿など



第24発掘区瓦層出土奈良三彩鉢 (1/4)

の食器類が主体であるが、須恵器横瓶・甕、土師器鉢・甕などの貯蔵具や煮炊具のほか、製塩土器などが一定量あることに注目される。

出土地点の近くに、食事を作る施設があった可能性を示す資料である。

施釉陶器 第8発掘区からは、灰軸陶器6点、緑軸陶器が4点出土。第24発掘区からは、奈良三彩8点、灰軸陶器4点、緑軸陶器4点、不明が1点、合計27点ある。

灰軸陶器・緑軸陶器はいずれも破片で詳細な時期は特定し難いが、9世紀代のものが主流で、1点のみ10世紀代のものがある。施釉陶器が一定量出土する傾向は、奈良市内の大寺院遺跡の特徴でもある¹³⁾。奈良三彩は、緑軸単彩の出土量が比較的多いのが注目される。下記一覧にまとめて提示しておく。

輸入磁器 第24発掘区から、11世紀～12世紀代の白磁碗3点と12世紀末～13世紀の青磁碗1点が出土した。このうち、白磁碗1点は瓦層の上にある整地層からのもので、他は包含層から出土した。

第13・14次調査出土施釉陶器一覧

No	出土地点		種別	器形	部位	軸	胎土	備考
	発掘区	遺構						
1	第8発掘区	S X 02	灰軸陶器	政皿	口縁部	内・外面	硬質	
2	第8発掘区	S X 02	灰軸陶器	小碗	口縁部	内・外面	硬質	
3	第8発掘区	包含層	灰軸陶器	碗 ^a	体部	内面のみ	硬質	
4	第8発掘区	S D 01	灰軸陶器	碗	底面	内・外面	硬質	内面は自然釉。9世紀中頃。
5	第8発掘区	麻茨宮南側溝	灰軸陶器	碗 ^a 皿	体部	内面のみ	硬質	自然釉。
6	第8発掘区	包含層	灰軸陶器	皿	口縁部	内・外面	硬質	器壁が3ミリと薄い。
7	第8発掘区	包含層	緑軸陶器	碗	底面	内・外面	硬質	削りだし輪高台。
8	第8発掘区	S X 03	緑軸陶器	碗 ^a 皿	口縁部	内・外面	硬質	釉割が深い。
9	第8発掘区	包含層	緑軸陶器	碗	底面	内・外面	やや軟質	蛇の目高台。9世紀中～後半。
10	第8発掘区	S X 03	緑軸陶器	蓋 ^a	頂面	内・外面	硬質	外面にミダキあり。釉割は深い。
11	第24発掘区	瓦層	奈良三彩	杯 ^a 皿	口縁部	内・外面	軟質	
12	第24発掘区	包含層	奈良三彩	杯 ^a 皿	体部	内・外面	軟質	緑軸単彩。8世紀末
13	第24発掘区	築地	奈良三彩	碗	口縁部	内・外面	軟質	緑軸単彩。8世紀末
14	第24発掘区	築地	奈良三彩	碗 ^a	体部	内・外面	軟質	緑軸単彩。8世紀末
15	第24発掘区	包含層	奈良三彩	鉢	口縁部	内・外面	軟質	緑軸単彩。8世紀末
16	第24発掘区	瓦層	奈良三彩	鉢	口縁～体部	内・外面	軟質	二彩 ^a 。2点接合。8世紀代
17	第24発掘区	S X 03	奈良三彩	鉢	体部	内・外面	軟質	二彩 ^a 。2点接合。8世紀代
18	第24発掘区	瓦層	奈良三彩	鉢	体部	内・外面	軟質	二彩 ^a 。5点接合。8世紀代
19	第24発掘区	S X 02	奈良三彩 ^a 緑軸陶器	杯 ^a 皿	体部	内面のみ残存	軟質	小片。
20	第24発掘区	瓦層	灰軸陶器	皿	口縁部	内面のみ	硬質	自然釉。
21	第24発掘区	瓦層	灰軸陶器	碗 ^a 皿	体部	内・外面	硬質	湯手がくちり。
22	第24発掘区	整地土	灰軸陶器	皿	口縁部	内・外面	硬質	器壁が3ミリと薄い。
23	第24発掘区	包含層	灰軸陶器	碗	底面	中に残	硬質	10世紀前半。
24	第24発掘区	築地西側溝	緑軸陶器	皿	口縁部	内・外面	やや軟質	釉割が深い。
25	第24発掘区	瓦層	緑軸陶器	碗	体部	内・外面	硬質	体部外面に突帯が廻る。2点接合。
26	第24発掘区	瓦層	緑軸陶器	碗	口縁部	内・外面	軟質	4点接合。
27	第24発掘区	瓦層	緑軸陶器	碗	口縁部	内・外面	硬質	

3. 木簡

大仏殿と講堂の間で検出した谷底に堆積していた暗灰色砂礫から木簡2点が出土した。木簡と共に大量の木炭片、籾の羽口、銅滴、銅滓、檜扇、8世紀代と考えられる須恵器杯片も出土した。

木簡(1)は上下両端が欠損している。縦173mm以上、幅35mm、厚さ4mmを測る。文字は表裏それぞれに書かれているが、文字の上から縦線が引かれ文字を抹消している。「少丁」の文字がみえ、少丁が土木作業に従事したことが分かる資料である。両面とも二次的に加工された痕跡は残っていない。

木簡(2)は上下両端が欠損しており、二断片が上下に接合する。縦167mm以上、幅27mm、厚さ3mmを測る。「受」の下文字は、「ふいご」と読める文字と判断した。大仏殿北側の谷から出土していることから、大仏建造に関わる木簡の可能性が高いと考えられる。「受」の文字右側に径2ミリの小孔があけられている。その他は二次的に加工された痕跡はない。

木簡(1)は平成23年度に実施した第13次調査の第8発掘区内から、木簡(2)は平成24年度の下水道埋設工事立会中に出土した。

木簡の釈読にあたっては、奈良大学東野治之氏、奈良文化財研究所史料研究室の方々のご教示を得た¹⁴⁾。



赤外線写真拡大(2)



赤外線写真拡大(1)



(2)

- ・X 守
- ・ 受 籠 一 口
- 九月九日

(1)

- ・方少丁合肆拾人之中
- 土起八口

・ 方少合肆口之中
土起八口

・ 方少合肆口之中
土起八口

2



1

暗灰色砂礫出土木簡

IV 調査所見

①第1発掘区から第5発掘区内には、顕著な遺構はなかった。また、その現況が西面中門から二月堂へ至る道路ということからみて、第1～5発掘区内は東大寺創建以来の寺内通路であったと考える。

第2発掘区東端付近の遺構面の標高は約93.6mである。その南側の東大寺学園幼稚園内の調査では、標高約95.5mで遺構を確認しており、北側に位置する大仏池の南堤が地山である春日野礫層で、標高約95.5mである。このような状況を勘案すると、少なくとも第2・3発掘区付近の寺内通路は、丘陵を2m程度掘り込んで造られた「切り通し」の通路とみることができよう。

東大寺創建にあたっては、地形復元やこれまでの発掘調査成果から、境内各所で大規模な造成が為されていると考えられている。今回の調査による「切り通し」通路や大仏殿西面回廊付近の盛土の確認は、従来の見解を裏付ける一証と位置付けることができよう。

②第7発掘区では、石組溝と石組遺構を検出した。調査位置関係から、石組溝SD01と石組遺構SX02は、奈良県による9201調査区の石組溝SD03と石垣SX23・24・25とそれぞれ一連のもの可能性が高い。9201区の調査成果では、石組溝SD03は溝内出土土器から12世紀に埋没したものであり、石垣SX23・24・25については、回廊創建当初まで遡る可能性が考えられている。しかし、今回の調査では、石組溝SD01の下にある谷の埋土層から、11世紀以降の土器が出土した。このことから、谷の埋没後構築された石組溝SD03の構築年代は11世紀を遡ることはできず、したがって、石組溝SD01より新しい石組遺構SX02の構築時期も、回廊創建当初まで遡ることはできない。

③第8発掘区に広がる大仏殿北面回廊北側の谷は少なくとも11世紀頃までは埋没せず窪地であったことが分かった。また、この谷の南岸部堆積土中には、奈良時代の大仏鑄造時の廃棄物と推察できる遺物が含まれることも確認できた。一方、念頭に置いていた大仏殿と講堂を繋ぐ参道の痕跡などは確認できなかった。

④第8発掘区東辺で検出した礎石建物SB01は、東面僧房(太房)の南端に相当し、基壇は確認できた範囲では地山を削り出して築いていることが分かった。基壇上面に堆積する焼土から15世紀中頃の土器が出土したことから、史料にみられる永正5年(1508)の講堂・僧房の火災で焼失したことが発掘調査で裏付けられた。SB01は鎌倉時代再建時の遺構と考えられ、奈良時代創建時の位置や規模を踏襲しているようである。

⑤現在、大仏殿東方の山からの水は、地形に沿って南西方向に流れるが、大仏殿東側で北西方向に流れを変えて、講堂跡の北側を東西に突っ切って、大仏池に流れ込む。しかし、それ以前には東面僧房の南側を通して、大仏殿北側の谷へ流し込んでいたものと思われる。第9発掘区で南へ落ちる谷地形あるいは溝の北側を検出したが、第11発掘区ではその続きは検出できなかった。第11発掘区の南の谷筋を流れる水路は、第9発掘区で検出した落ちを踏襲していると思われる。第14～20発掘区では、地山を確認できなかった。現在の水路よりも谷は広くて深かったようである。

⑥第22区・第26区・第27区では、奈良県が実施した発掘区(9710・9711区)の確認および水道管等の擾乱を確認したが、奈良時代の遺構に関する新たな知見は得る事ができなかった。

⑦第24発掘区では、土壇、築地、雨落ち溝、暗渠を検出することができた。また、大量の丸瓦・平瓦、軒丸瓦・軒平瓦、奈良三彩、9世紀前半頃の土師器・須恵器、10世紀代の土師器杯片、12世紀代の土師器・瓦器碗なども出土し、遺構の構築年代、土地の利用状況の一端を知ることができた。特に食堂と食殿が位置する土地よりも約3.0m低い場所では土壇を検出したことは、食堂地区の建物配置を復原する際の大きな手がかりとなった。この周辺は、もともと山地と谷地形であるため、食堂に関わる建物をすべて平地に築くことが難しかったと思われる。今回の調査では、土壇上で建物遺構を検出することはできなかったが、築地塙がL字状に曲がり土壇を取り囲むように構築されたことからみても、土壇上に建物があった可能性は非常に高いと考えられる。

⑧第24発掘区で検出した土壇の構築時期は、直接年代示す遺物は出土していないが、土壇構築以前の整地土と考えられる層から8世紀代の土師器片と須恵器杯蓋片が少数出土していることや土壇西側を壊して掘削された溝状の土坑SX06～08の埋土(瓦屑)および築地の東の雨落ち溝から9世紀中半～後半頃の土師器・須恵器、10世紀代施釉陶器、12世紀土師器・瓦器片が出土した状況からみて、土壇は奈良時代には構築され、少なくとも12世紀までは存続していたと思われる。12世紀以降は、築地塙が壊され、雨落ち溝も埋められ全体的に整地される。この整地土には、8～10世紀代、12世紀代の瓦器片とともに焼土が混じっていた。

史料の記載によると、食堂は、1180年の治承の兵火によって焼失し、これ以降は文献の記載がみられないことから食堂は再建されていないと考えられている。今回

検出した整地出土土器の年代は、1180年の治承の兵火の年代と合致していることから、食堂周辺の建物も同時期に焼失し、再建されなかったものとみられる。

⑨第24発掘区で検出した土壇上にあつたと考えられる建物についてであるが、伽藍復原図では大殿焼が想定されている。今回出土した土器群の内訳をみると、土師器および須恵器の食器類の他に、土師器甕や須恵器甕・壺・横瓶が一定量出土しており、須恵器横瓶は7個体もある。土師器甕は調理具、須恵器甕・壺類は、貯蔵具として使われるものであり、寺院内の法要に直接関わるものではない。このような土器が一定量出土することは、近くに調理場があったことを示していると考えられる。

⑩第24発掘区の瓦層からは、「真依」・「六人」の刻印のある、恭仁宮式文字瓦が出土した。恭仁宮式文字瓦は恭仁宮跡だけでなく、平城宮跡からも出土している。東大寺では、恭仁宮式文字瓦は法華堂に集中して使用されていることが知られ¹⁵⁾、わずかに法華堂北門や大湯屋に転用されているものの、ほかの堂塔では使われた形跡がないと考えられている。今回、同様の瓦が食堂の付属堂舎推定地から出土ことは興味深いことである。また、近年の大仏殿の調査でも確認されており、点数は少ないが出土例が増えている。主体を占めるものではないと思われるが、法華堂だけではなく、ほかの堂舎にも使用されていたと推察される。

⑪第24発掘区は、狭小な発掘区であつたため、遺構の大きさや範囲などを特定することはできなかったが、過去の調査成果も含めて考えると、龍藏院の東半部にある食殿と土壇上とは高低差があることが判明し、食堂周辺はもともと東から西へ傾斜する地形であつたため、傾斜地を雑壇状に造成し、上下段に分けて付属堂舎を造つたものと考えられる。そして、講堂と食堂をつなぐ軒廊が登廊であるとの記載があるように、上下段の付属堂舎をつなぐ廊下も登廊であつた可能廊が考えられる。また、恭仁宮式文字瓦が発見されたことは、東大寺堂宇の建立時期や変遷を考える上でも貴重な資料となり、法華堂との関係や恭仁宮式文字瓦の供給時期などの手がかりにもなる資料といえよう。

(三好美徳・原田憲二郎・宮崎正裕・池田富貴子・奥井智子)

注

- 1) 森嶋『奈良を測る』学生社1971
- 2) 『史跡東大寺旧境内・名勝奈良公園一平成7年度発掘調査報告一』『奈良県遺跡調査概報(第一分冊)1995年度』奈良県立橿原考古学研究所1996と『史跡東大寺旧境内・名勝奈良公園発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報(第一分冊)1996年度』奈良県立橿原考古学研究所1997

- 3) 奈良県教育委員会編『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書』東大寺2000 以下奈良県の防災工事に係る発掘調査については、この報告を参照。
- 4) 註1の文献と同じ
- 5) 『史跡東大寺旧境内-第38～40次』『奈良県遺跡調査概報(第一分冊)1995年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 6) 3桁の数字と大文字のアルファベットからなる軒瓦の型式番号は、下記の文献で東大寺から出土する軒瓦に設定されているものである。(奈良県教育委員会編『東大寺防災施設工事・発掘調査報告書』発掘調査編 東大寺2000)
- 7) 以下、平安時代の瓦の時期区分は、山崎信二「大和における平安時代の瓦生産(再論)」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社2003、中世瓦の時期区分は、山崎信二「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所2000、近世瓦の時期区分は、山崎信二「近世瓦の研究」奈良文化財研究所2008に拠つた。
- 8) 中井公「『大安寺式』軒瓦の年代」『堅田直先生古稀記念論文集』1997
- 9) 奈良県教育委員会『奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財編)第8集』1965 第4回(TS6A-1)。
- 10) 藪中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」『佛教芸術』194号毎日新聞社1991
- 11) 三好美徳『都城形築』『續文化財論集 第一分冊』文化財学論集刊行会2003
- 12) 三好美徳「南都における平安時代前期の土器様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会1996
- 13) 三好美徳『第6節 史跡東大寺旧境内出土の施輪陶器』『史跡東大寺旧境内I-杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告一』奈良市教育委員会1997
- 14) 木簡の写真撮影及び赤外線写真については、独立行政法人奈良文化財研究所に撮影していただいた。
- 15) 上原真一「東大寺法華堂の創建-大養徳国金光明寺説の再評価-」『考古学の学際的研究-濱田貴俊賞受賞者記念論文集I-』



第1発掘区全景(西から)



第2発掘区全景(東から)

10. 史跡東大寺旧境内の調査 第12・13・14・15次



第3発掘区全景（東から）



第4発掘区全景（東から）



第5発掘区全景（西から）



第6発掘区全景（東から）



第7発掘区全景（北東から）



第7発掘区石組溝S D01・石組遺構S X02（北東から）



第8発掘区 西半部（西から）



第8発掘区 中央部 (東から)



第8発掘区 中央部 木炭を多量に含む砂礫層 (南西から)



第8発掘区 東端部 (西から)



第8発掘区 礎石建物S B 01の礎石・凝灰岩切石列、
石組溝S D 02・03 (南から)



第8発掘区 礎石建物S B 01の礎石・凝灰岩切石列 (南から)



第22発掘区全景 (西から)



第24 発掘区全景 (北から)



第24 発掘区全景 (南から)



第24 発掘区土層と瓦層検出状態 (西から)



第24 発掘区中発掘区付近 瓦層の状態 (南から)



第24 発掘区南北側 S A01・暗渠 S D05 検出状態 (北から)



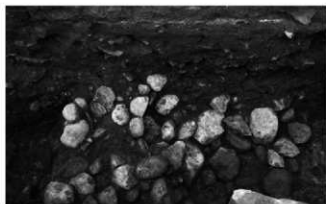
第24 発掘区雨落溝 SD03 (南から)



第24発掘区 土壇検出状態（東から）



第24発掘区 南北榭S A01検出状態（南から）



第24発掘区東西榭S A02検出状態（西から）



第24発掘区 暗渠S D05（西から）



第24発掘区下層整地と断溝（西から）



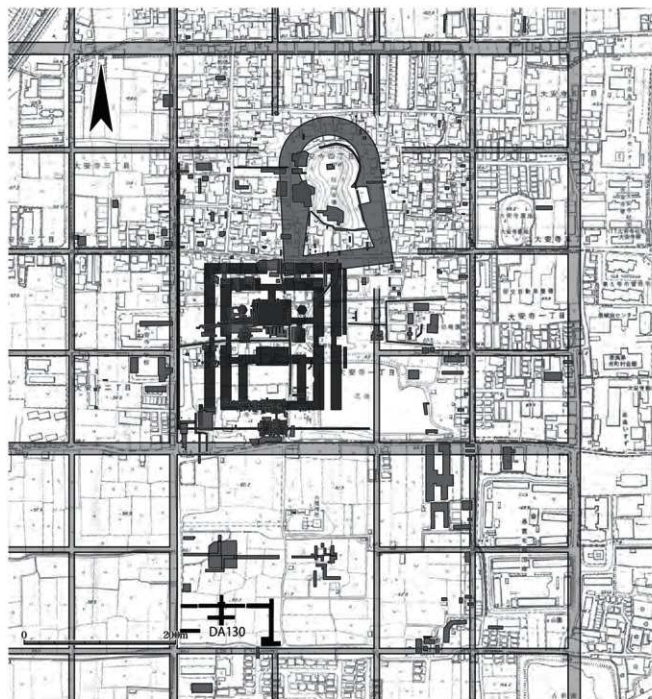
第25発掘区全景（北から）

11. 史跡大安寺旧境内の調査

奈良市教育委員会では、平成 24 年度に史跡大安寺旧境内において 1 件の調査を実施した。第 130 次調査は、大安寺塔院地区の保存整備を目的に、平成 13 年度から継続しておこなっている調査である。平成 13 年度から

17 年度にかけては西塔周辺の調査を、平成 19 年度と、21 年度から 22 年度にかけては東塔周辺の調査を、平成 20 年度には塔院の西面を囲する大垣の調査を行ってきた。第 130 次調査は西塔の南側、塔院南西部を調査した。

調査回数	事業内容	調査地	調査期間	調査面積	調査担当者
DA 第 130 次調査	史跡大安寺旧境内保存整備事業	東九条町 1350 - 1 番地他	H24. 9. 3 ~ 12.28	1026㎡	原田 薫 奥井



史跡大安寺旧境内 発掘調査位置図 (1/5,000)

塔院地区の調査 第130次

I はじめに

本調査地は、史跡大安寺旧境内の伽藍復元では西塔の南側である塔院南西部に相当する。調査は保存整備工事を行うにあたって、塔院南西部での遺構面の深さを把握することを主目的とした。また塔院南西部で史料等から想定される遺構の有無確認も目的とした。このため、まず塔院東西中軸ライン上の南端に想定される塔院南門と塔院南面大垣の確認と、その北側南北方向に想定される塔院の参道遺構の確認を目的に第1発掘区を設定した。東塔では、塔の南階段前から南に延びる参道状の石敷き遺構を確認している¹⁾ため、西塔東西中軸ライン南側に想定される参道遺構の確認を目的に、第2発掘区を設定した。平成20年度調査では確認されなかった塔院西面大垣²⁾を確認することを目的に、第3・4発掘区を設定した。

II 基本層序

第1発掘区内の基本的な層序は、上から黒色土(耕土)、褐灰色土(床土)、灰褐色砂質土と続き、地表下約0.4mで黄色粘質土の地山に至る。第1発掘区南辺では東西方向の河川1を確認した。幅は約15m分を検出し、南側は発掘区外である。このため第1発掘区南辺では耕土と茶灰色の床土の下に、河川1の埋土である灰褐色粘質土・青灰色砂礫混じりの細砂や粘質土が厚さ約0.6m堆積しており、地表下約1.0mで地山となる。河川1の埋土からは12世紀後半の瓦器碗が出土した。河川1は調査地東方のDA第17次調査³⁾で確認されている七条々間路北側溝を踏襲する河川と一連のものとみられる。

第1発掘区北西部から、その西側の第2発掘区東半までは、水田耕作により削平されており、厚さ約0.2mの黒灰色土の耕土直下で黄色粘質土の地山となる。

第2発掘区西半での基本的な層序は上から黒色土(耕土)、暗褐色砂質土、灰褐色砂質土、灰色粘質土と続き、黄色粘土の地山となる。地山直上の灰色粘質土は、第2発掘区中央部では厚さ約0.1m堆積するが、第2発掘区西部と南部では厚さ約0.4mと厚く堆積しており、第2発掘区中央部は地表下約0.5mで、第2発掘区西部と南部では地表下約0.9mで黄色粘質土の地山となる。

第2発掘区南端では、北西から南東へ流れる河川2を確認した。幅は約4m分を検出し、南側は発掘区外である。このため第2発掘区南辺では、灰色粘質土の下に、河川2の埋土である灰白色砂・灰褐色細砂土が厚さ約0.4m堆積しており、地表下約1.3mで地山となる。河川2埋土から奈良時代の土師器・須恵器・軒丸瓦(6137

A)が出土した。

第3発掘区内の基本的な層序は、上から黒色土(耕土)、橙灰色細砂土(床土)、灰褐色砂質土、灰色粘質土と続き、地表下約0.7mで黄色粘土の地山となる。ただし、第3発掘区西半には灰色粘土と地山との間に褐灰色砂質土の整地土が最大0.2mの厚さで堆積していた。

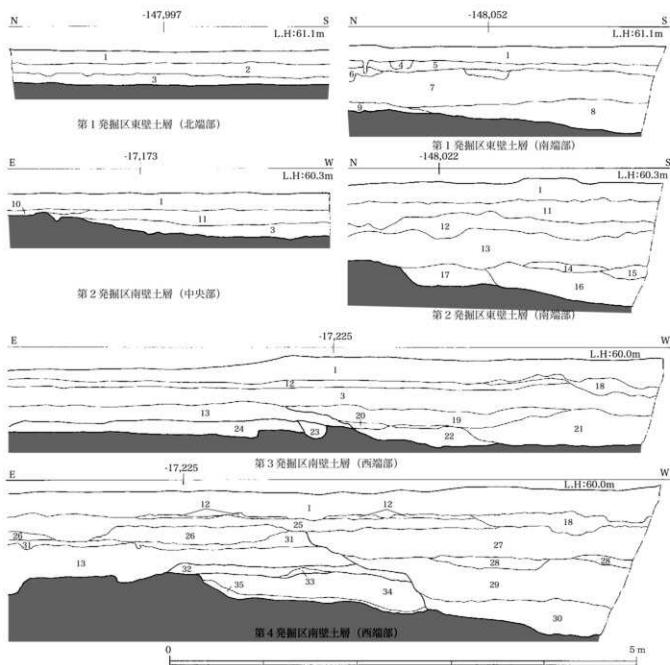
第4発掘区内の基本的な層序は、上から黒色土(耕土)、橙灰色細砂土(床土)、褐灰色粘質土、褐橙灰色粘質土、橙灰色砂質土、灰色粘質土と続き、この下に整地土である褐粘質土もしくは黄褐粘質土が最大0.4mの厚さで堆積していた。この整地土下の地表下約1.0mで、黄色粘質土もしくは褐灰色細砂土の地山となる。

第3・4発掘区は、第1発掘区西端では一連のものとみられる南北方向の河川3を確認した。幅は第3発掘区で約3.8m分を、第4発掘区では約3.6m分を確認し、西側は発掘区外である。第3発掘区では灰色粘質土上面から、第4発掘区では橙灰色砂質土上面から切り込んでいた。埋土は第3発掘区では、上から橙灰色細砂・灰色土・灰色細砂・茶褐色土で、第4発掘区では上から淡褐色細砂土・橙灰色砂・灰色粘細砂・淡褐色灰色粘質土である。河川3の埋土から12世紀後半の瓦器碗が出土した。

第3・4発掘区で確認された整地土と河川3については、本発掘区北方のDA第121次調査⁴⁾で確認されている整地土・河川とも一連のものとみられる。

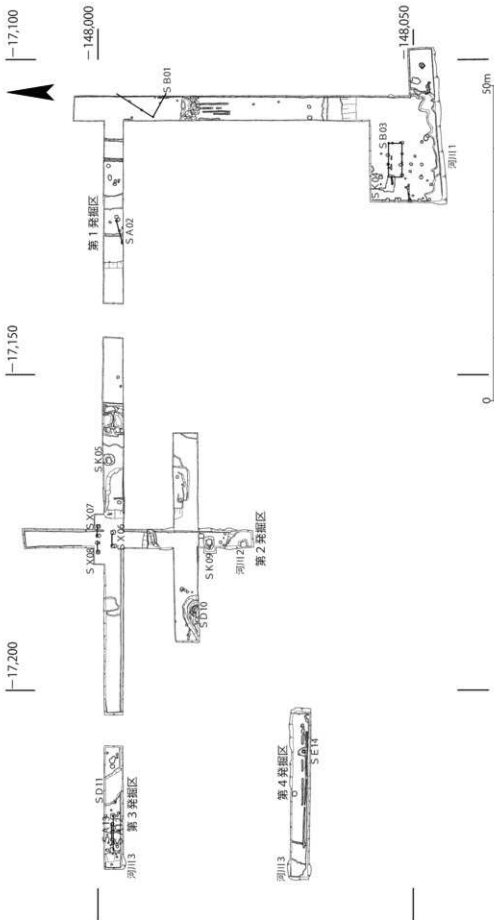
地山上面の標高は、第1発掘区北東辺で約60.5m、第1発掘区南辺は約59.8mで、北から南に下っており、南北の比高差は約0.7mである。第2発掘区東辺は約60.2m、第2発掘区中央部は約59.5m、第2発掘区西辺から第3発掘区東辺は約59.2m、第3発掘区西辺は約59.0mで、東から西へ下っており、第1発掘区北東辺と第3発掘区西辺の東西の比高差は約1.5mである。第4発掘区東辺の地山上面の標高は約59.1m、西辺は約58.9mで、西へ向かって下る。なお、第3・4両発掘区整地土上面の標高は同じで、約59.2mであり、東方の地山面に高さを合わせ、敷地を平坦にしようとした意図をうかがわせる。

遺構検出は基本的に、地山上面で行ったが、第4発掘区のみ、整地土上面で遺構検出を行ったのち、その南半部は整地土を除去し、地山上面でも遺構検出をおこなった。地山上面では、発掘区西端で東から西へ下る落ち込みを確認したのみである。落ち込みは幅約2.3m分、長さ約1.0m分検出した。深さ約0.3m



- | | | | |
|----------------|--------------------------|------------|-------------------|
| 1 黒色土 (耕土) | 14 橙灰色粘質土 | 26 褐橙灰色粘質土 | 7～9は河川1埋土 |
| 2 褐灰色土 (床土) | 15 橙灰色砂質土 | 27 淡褐色細砂土 | 16・17は河川2埋土 |
| 3 灰褐色砂質土 (包含層) | 16 灰白色砂 | 28 橙灰色砂 | 19～22・27～30は河川3埋土 |
| 4 褐灰色土 | 17 灰褐色細砂土 | 29 灰色粘細砂 | 24・32・33は整地土 |
| 5 茶灰色土 (床土) | 18 黒色土と灰色土
(礫多い、攪乱埋土) | 30 淡褐灰色粘質土 | 34・35は落ち込み埋土1 |
| 6 褐灰色粘質土 | 19 橙灰色細砂 | 31 橙灰砂質土 | |
| 7 灰褐色粘質土 | 20 灰色土 | 32 褐粘質土 | |
| 8 青灰色砂礫混じり細砂 | 21 灰色細砂 | 33 黄褐粘質土 | |
| 9 青灰色砂礫混じり粘質土 | 22 茶褐色土 | 34 暗褐色粘土 | |
| 10 灰色砂質土 | 23 茶色土 | 35 灰色砂 | |
| 11 暗橙灰色砂質土 | 24 褐灰色砂質土 | | |
| 12 橙灰色細砂土 (床土) | 25 褐灰色粘質土 | | |
| 13 灰色粘質土 (包含層) | | | |

土層図 (1/40)



塔院区遺構平面図 (1/600)

遺構一覧表

遺構番号	棟方向	規模(間)		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法(m)		柱の深さ	備考	
		桁行・梁行				桁行	梁行			
SB01	南北	2以上・1以上		4.2以上	2.4以上	2.1等間		2.4	0.1	第1発掘区。建物の主軸方向は北で東に大きく振れる。
SA02	東西	2以上		3.0以上		1.5等間			0.1	第1発掘区。柱列の主軸方向は西で南に振れる。
SB03	東西	3・1		5.4	2.4	1.8等間		2.4	0.1～0.3	第1発掘区。東から2つ目の北側柱抜き取り穴から、ガラス増幅出土。土坑SK04より古い。
SX06	東西	1		2.4		2.4			0.6	第2発掘区。輻平遺構。
SX07	東西	1		1.5		1.5			0.3	第2発掘区。輻平遺構。
SX08	東西	1		1.5		1.5			0.3	第2発掘区。輻平遺構。
SA12	東西	3		5.4		1.8等間			0.1と0.3	第3発掘区。東西両端の柱の深さは0.3m、中央の2つは0.1mと浅く、これを妻柱とみて、南北棟の北側か南側柱列の可能性あり。掘立柱列SA13より古い。
SA13	東西	2		3.0		1.5等間			0.1と0.5	第3発掘区。東西両端の柱の深さは0.5m、中央は0.1mと浅く、これを妻柱とみて、南北棟の北側か南側柱列の可能性あり。掘立柱列SA12より新しい。

遺構番号	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	主な出土遺物	備考
SK04	L字形	西端では、東西3.0、南北2.4	0.1～0.3	8世紀の土師器・須恵器、製塩土器・鉄釘	第1発掘区。掘立柱建物SB03より新しい。埋土は炭化物を多く含む炭灰色砂質土。
SK05	隅丸方形	東西1.8、南北1.5以上	0.6	なし	第2発掘区。坑内から礎石の可能性のある花崗岩出土。埋土は茶灰色土。
SK09	上部：隅丸方形 下部：円形	上部一辺長1.6、下部径0.9	2.5	上層：弥生土器、8世紀の土師器・須恵器・製塩土器、鉄釘・ガラス玉・ガラス増幅・砂埋・鉄滓・流紋岩製砥石・花崗岩製砥石・滑石製白土・縄文時代の石鏝・楔形石器・石楯・下層：弥生土器、8世紀の土師器・須恵器、製塩土器、縄文時代前期・奈良三彩杯・漆砂器・曲物・鉄釘・刺裂紋瓦・刺裂磨房・鉄貨(和同開珎)・ガラス増幅・刺穿石鏝・楔形石器、ガラス玉・滑石製白土・桃種・胡桃殻	第2発掘区。埋土は上層が暗茶灰色土、下層が灰色粘砂。
SD10	東西	長さ7.4以上、幅2.1	0.6～0.7	弥生時代前期の弥生土器、緑泥片岩質包丁・サヌカイト製附器	第2発掘区。埋土は上層が暗茶灰色土、中層が暗灰色土、下層が茶灰色砂。南北に蛇行する。
SD11	南北	長さ2.7以上、幅4.2	1.6	弥生時代前期の弥生土器、古墳時代中期の土師器、石伴・石鏝未成品・砥石	第3発掘区。埋土は上層が暗茶灰色土、中層が灰色粘砂、下層が暗灰色粘土。溝主軸は北で西に振れる。

遺構番号	掘形等			井戸枠		主な出土遺物	備考	
	平面形等	平面規模(m)	深さ(m)	平面形	構造 内法(m)			
SE14	不整形円形	東西1.3～1.5、 南北1.2～1.4	1.0	方形	横板組構 核留め	0.5	枠内：8世紀の土師器・須恵器・奈良三彩磁、平瓦	第4発掘区。掘形埋土は暗灰色粘土と灰色砂の混合土。枠内埋土は灰色粘土。

で、埋土は上層が暗褐色粘土、下層は灰色砂である。上層埋土から奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

Ⅲ 検出遺構

検出した遺構には、溝、掘立柱建物、掘立柱列、井戸、土坑、輻平遺構がある。以下に奈良時代の主な遺構について述べ、詳細は遺構一覧表に記す。

第1発掘区南辺で検出した掘立柱建物SB03は東西棟建物で、梁行1間(2.4m)、桁行3間(5.4m)。東から2つ目の北側柱梁行1間(2.4m)、桁行3間(5.4m)。東から2つ目の北側柱抜き取り穴から、ガラス増幅が出土した。

第2発掘区東辺で検出した土坑SK05は、平面形隅丸方形で、東西1.8m、南北1.5m分を検出した。検出面からの深さは約0.6mで、坑内から南北約0.8m、東西約1.0mの花崗岩が出土した。礎石と断定できる柱座等の造り出しは無かったが、西塔から土坑SK05までの距離は約60mと近接していることから、元は西塔の礎石で、削り取って運び出した後、何らかの理由で、ここに穴を掘って投棄されたものとも考えられる。

第2発掘区南辺で検出した土坑SK09は、平面形は遺構検出面では一辺長約1.6mの隅丸方形であるが、深さ

約0.4mで径約0.9mの円形となる。遺構検出面からの深さは約2.5mである。上層埋土からは弥生土器、奈良時代の土師器・須恵器、ガラス玉が、下層埋土からは弥生土器、奈良時代の土師器・須恵器、漆紗冠・曲物、鉄釘、銅製絞具・瓔珞・銭貨（和同開珎）、石鏃、ガラス玉・ガラス塔塼・砥石・銅滓が出土した。

軸竿遺構 SX06・07・08は、第2発掘区中央部で検出した。各々東西1間で、軸竿遺構 SX06の柱間は2.4m、軸竿遺構 SX07・08の柱間は1.5mである。軸竿遺構 SX06の東西両柱穴間の中軸ラインは西塔東西中軸ライン（Y=-17.176m）上であり、軸竿遺構 SX07・08は軸竿遺構 SX06の北側約2.4m離れた位置で、東西に並び、軸竿遺構 SX07の西側柱と、軸竿遺構 SX08の東側柱との中間ラインが、西塔東西中軸ラインに一致する。軸竿遺構 SX06の検出面からの柱穴の深さは約0.6mである。軸竿遺構 SX06の抜き取り穴は、南側の立ち上がりか緩やかであるのに対し、北側はオーバーハングしており、柱根元を支える構造材が用いられた可能性も考えられる。検出面からの柱穴の深さは約0.3mである。西塔基壇南端から軸竿遺構 SX06までの距離は約56mで、この数値は西塔基壇東端から東西両塔間の中軸ラインまでの距離と一致しており、その計画的配置から、西塔創建頃の軸竿遺構の可能性が考えられる。

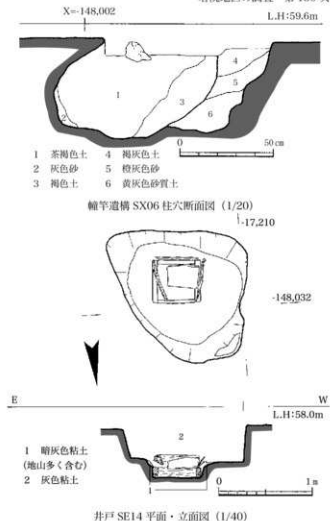
第4発掘区東辺で検出した井戸 SE14は、掘形の平面形が東西1.3～1.5m、南北1.2～1.4mの不整形円形で、遺構検出面からの深さ約1.0mである。枠組み構造は、横板組横横留めで枠材は最下段しか残っていない。枠内埋土から奈良時代の土師器・須恵器・奈良三彩壺・平瓦が出土した。

IV 出土遺物

出土遺物は遺物整理箱にして20箱分しかなく、大安寺旧境内の調査にしては、面積あたりの出土量は少ない。出土遺物には弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良時代から平安時代の土師器・須恵器・奈良三彩、鎌倉時代の瓦器、江戸時代の陶磁器、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・面戸瓦・製斗瓦・塼、漆紗冠・曲物、銅製瓔珞・絞具・銭貨（和同開珎）、ガラス塔塼、石鏃・石包丁・石杵、砥石などがある。奈良時代の遺物の大半は土坑 SK09から出土した。

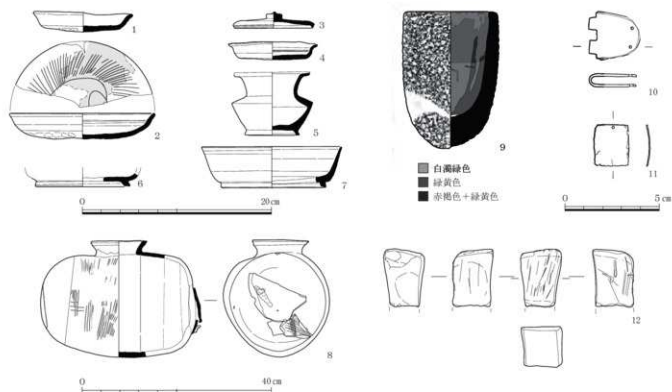
瓦類の出土量は9箱分である。軒丸瓦は8点あり、内訳は6137A1点、6138Cb1点、6304D1点、奈良時代型式不明2点、平安時代の51Ad1点、鎌倉時代の巴紋軒丸瓦2点である。軒平瓦は6712B1点である。

(原田 憲二郎)



土坑 SK09からは遺物整理箱で3箱分の土器類が出土した。土師器杯A、杯C、皿A、皿C、高杯、甕、コマド、須恵器杯A、杯B、皿E、杯蓋、壺H、横瓶、甕、奈良三彩、製塩土器があるが、大半は弥生土器片である。

土師器杯C(2)は、口径15.4cm、器高2.7cm。口縁部内外面をヨコナデで調整し、底部外面は未調整のままである。内面には一段の斜放射状暗文とラセン状暗文を施している。皿C(1)は、口径10.5cm、器高2.05cm。口縁部内外面のみヨコナデ調整。1・2とも内面に灯明痕跡が残る。須恵器杯B(6・7)は口縁部内外面がロクロナデ、7の底部外面はロクロケズリ。皿E(4)は、口径9.0～9.4cm、器高1.9cm。口縁部内外面はロクロナデ。杯蓋(3)は、口径8.6cm、器高1.7cm。内面には墨が付着し、器表面も平滑である。甕として使用している。須恵器壺H(5)は、口径8.0cm、残存高6.6cm、胴部最大径8.5cm。内面には白色物質がわずかに付着している。壺Hは、平城京跡の調査例では、地鎮関連遺構と考えられる小穴から出土する例が多い。横瓶(8)は、口径12.0cm、器高24.4cm、胴部最大幅32.6cm。側面には須恵器甕断片、須恵器杯蓋片が着着している。外面



土坑 SK09 出土遺物 (1/4, 8は1/8, 10・11は1/2)

全体に自然軸がかり調整等が分かりにくい。胴部外面にはタタキ痕跡、内面には同心円状のあて具痕跡が残る。奈良三彩は図示できなかったが、緑釉単彩の碗片と考えられる。

その他の遺物には、ガラス増焔、帯金具、瓔珞、磁石、圈足円面碗の破片がある。ガラス増焔(9)は、口縁外径5.99cm、高さ14.4cm、口縁内径8.2cm、深さ11.1cm、砲弾型で、底は丸い。外面は格子叩きで仕上げる。胎土は石英粒を多く含む粗い粘土で、灰色である。口縁上端から内面の上半部に赤褐色、その上から内面全体に緑黄色、さらにその上からまだらに白濁緑色のガラスが付着する。銅製帯金具の鉸金(10)は、長さ2.7cm、幅2.55cm、厚さ0.7cm、釘穴径0.15cm前後。C字形外枠と刺金は失われている。厚さ0.1～0.15cmの一枚の板を二つに折り曲げて、表金具と裏金具にする。表・裏金具の一端には2箇所ずつ釘穴がある。また、内面には黒漆様のものがわずかに付着する。銅製の瓔珞(11)は、縦2.2cm、横1.85cm。長方形の厚さ0.05～0.1cmの板状で、やや湾曲し上部に径0.1cmほどの孔がある。上辺は不明だが、他の3辺は切断されたようである。流紋岩製の磁石(12)は、残存長6.1cm、幅4.3cm、厚さ4.3cm。やや肌色がかかった白色である。一端は折損し、もう一方の端面は若干の痕跡はあるもののほとんど使用されていないようである。側面は4面ともよく使用されている。

これらの遺物は、8世紀中～後半頃のものか中心と考えられるが、緑釉単彩碗の年代からみて、土坑SK09が最終的に埋設したのは8世紀末頃であろう。

(三好美徳・原田香織)

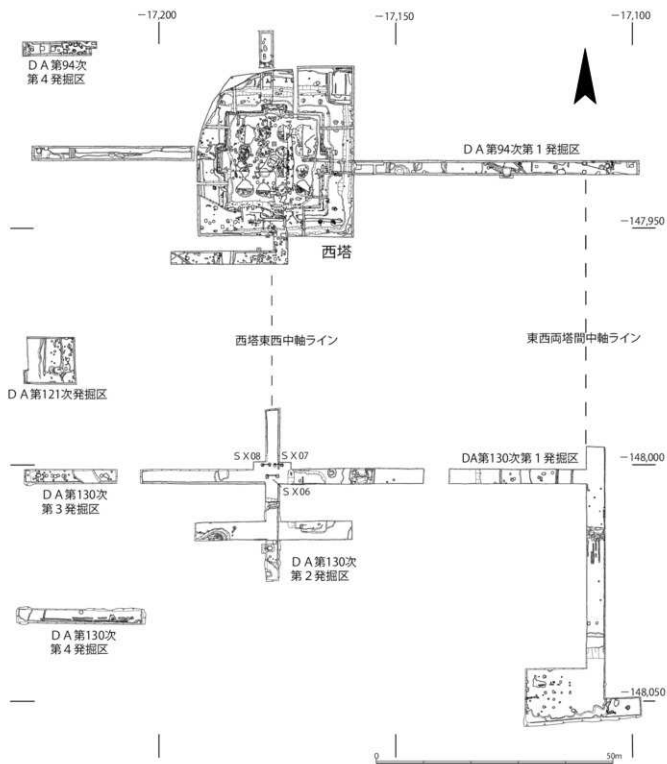
V 調査所見

奈良時代から平安時代にかけての塔院地区南西部の様相については、以下のことが明らかになった。

①想定していた塔院南門と南面大垣、塔院西面大垣、塔院と西塔南側の参道については、みつからなかった。

塔院南門と南面大垣、塔院西面大垣については、各々発掘区外に存在する可能性や、河川による削平または耕作地造成の時に、削平を受けた可能性も考えられるが、各想定位置付近での瓦類の出土量が少ない点は疑問である。

塔院と西塔南側の参道については、耕作地造成の時に、削平を受けた可能性も考えられる。ただし、第1発掘区北東部と、その北側の東西両塔中軸ラインとの高さを比べると北方に向かって約0.5m下がっていることがわかる。この比高差から、塔院参道が作られ、これが削平を受けたとしても、第1発掘区北東部付近が高いのは疑問が生じる。また第1発掘区北東部と西塔基礎垣石下面の高さを比べると、西塔のほうが約1.8m低く、塔院参道から西塔基礎垣を見下ろす状況となる。このことから、塔院南側の参道は無かった可能性が高いと考えられる。さらには今回の発掘区東西の比高差が約1.3mもあること、面



DA 第130次調査区と周辺の調査区 (1/800)

積あたりの8～9世紀代の遺構・遺物の密度が少ないこと、第3発掘区北方で行なわれたDA第121次調査では、西面大垣想定地付近の整地が、9世紀末から10世紀に行なわれたと判明していること、さらには現在の大安寺が所蔵する江戸時代の伽藍図に、塔院南門と南面大垣、塔院西面大垣、塔院と西塔南側の参道が記載されていない点も勘案すれば、塔院地区でも、少なくとも南西部に関しては伽藍地としての整備が完了していなかった可能性が考えられる。

②第1発掘区南辺で検出した建物SB03の柱抜き取り穴からはガラス増塙が、さらに第2発掘区南辺で検出した土坑SX09からはガラス増塙・砥石・銅滓などの铸造関係遺物が出土し、塔院南辺には大安寺の工房が存在した可能性が考えられる。

③第2発掘区中央部では軸竿遺構SX06・07・08を3

基確認した。西塔中軸ラインと塔院地区中軸ラインを意識し、整然と配置されていることからみて、これら3基の軸竿遺構が同時に存在した可能性を考える。日本の軸竿遺構については、近年検出例が増えてきているが、今回と同様に3つ近接して配置する例はみつかっておらず、当時の仏教儀式における荘嚴方法を考える上で貴重である。
(原田 憲二郎)

- 1) 「東塔地区の調査 第114次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成18(2006)年度』奈良市教育委員会 2009
- 2) 塔院地区の調査 第121次『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成20(2008)年度』奈良市教育委員会 2011
- 3) 「84-1・2・3次の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』奈良市教育委員会 1985
- 4) 「(3) 塔院地区の調査 第121次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成20(2008)年度』奈良市教育委員会 2011



発掘区全景（垂直写真、上が北。北の高まりは西塔。北東の復元基壇は東塔）



掘立柱建物SB03・土坑SK04（西から）



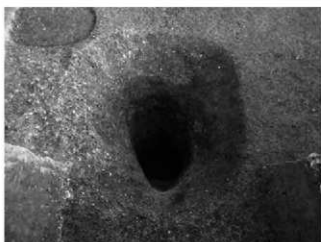
土坑SK05（北から）



輪竿遺構SX06-07-08（南から）



輪竿遺構SX06-07-08と西塔（南東から）



土坑SK09（西から）



井戸SE14（南から）

12. 元興寺跡（東面回廊推定地）・奈良町遺跡の調査 第71次

事業名	個人住宅新築	調査期間	平成24年6月25日～7月10日
届出者名	個人	調査面積	32㎡
調査地	奈良市芝新屋町1-1他	調査担当者	池田裕英

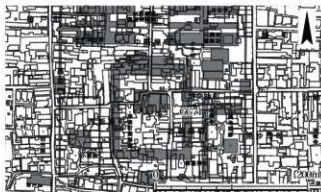
I はじめに

調査地は、平城京の条坊復原では元興寺東面回廊が推定されている場所にあたる。東面回廊が推定されている場所ではこれまでに本市教育委員会が平成8年度にGG第43次調査、平成12年度に第54次調査、平成21年度に第65次調査と3度の発掘調査を行なっているが、いずれの調査でも近世の遺構が検出されたのみで、回廊に関わる遺構は削平を受けたとみられ、検出されていない。

本調査では東面回廊東辺が想定される位置に東西14m、南北2mの発掘を設定して実施した。調査は排土の量が多くなったことや中央部で土管等の地下埋設物を発見したことから2回に分けて行った。

II 基本層序

発掘区の基本層序は、発掘区東半では上から造成土、暗灰茶色土、暗褐灰色土、黒灰色土、淡灰褐色シルトと続き、現地表下1.0mで茶黄色土の地山にいたる。遺構はこの地山上面で検出した。地山上面の標高は87.5mである。発掘区西半では、上から造成土（土層図1）、暗灰褐色土（2）、暗褐灰色土（3）、茶褐色土・灰褐色土混合土（7）あるいは暗灰褐色土・暗茶褐色土（9）、灰褐色土・黄褐色土混合土（8）と続き、現地表下0.8～1.0mの灰褐色土上面で石列や土坑を検出した。遺構検出面の標高は87.6mである。今回新築する建物の基礎工事に伴う掘削深度との関係からこれ以上掘り下げることはできなかった。発掘区東端、西端とも同程度の深



発掘区位置図 (1/5,000)

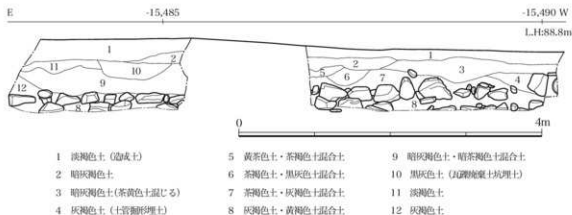
さまで掘り下げたが、地山は東から西に向かって下っており、発掘区西半では地山を検出することができなかった。

土層中には埋設管や建物の解体に伴い瓦を廃棄するために掘られた土坑が多くみられ、建物の除去や建設に伴う掘削が繰り返行われていたことが伺える。

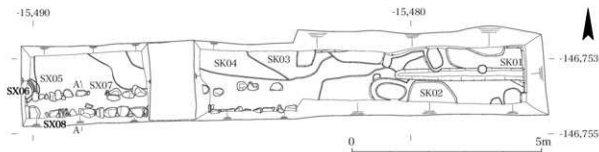
III 検出遺構

検出した遺構は江戸時代以降の土坑、溝、埋塞遺構、石列である。元興寺東面回廊に関する遺構はなかった。検出した遺構に関しても0.1m程度の掘り下げに留めることとなった。

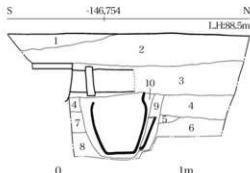
SK01～04はいずれも平面不整形な土坑で、発掘区外に続くため規模は不明である。17世紀中頃～18世紀のものと思われる土師器、肥前産磁器、瓦片に混じり奈良時代の丸瓦、平瓦片が出土した。SX05・06は埋塞遺構である。SX05は17世紀前半～中頃と思われる瓦質



発掘区西半南壁土層図 (1/50)



遺構平面図 (1/100)



- | | |
|---------------|------------------|
| 1 淡褐色土 | 6 暗茶褐色土 |
| 2 暗茶褐色土・暗灰褐色土 | 7 淡褐色粘質土 |
| 3 灰褐色土・灰黒色土 | 8 灰茶色土・褐灰色土 |
| 4 暗灰褐色土 | 9 暗灰黒色粘質土・灰褐色砂質土 |
| 5 淡灰褐色粘土 | 10 暗青灰色粘土・暗灰色粘土 |

西壁土層図 (1/30)



- | |
|-----------|
| 1 淡茶褐色粘質土 |
| 2 暗灰褐色土 |
| 3 暗茶褐色土 |
| 4 暗灰褐色粘質土 |

石列 SX07・08 断面図 (1/20)



発掘区西半全景（北東から）

土器の甕を正位置で据えたものであるが、SX06により壊されている。SX06は径0.7m、深さ0.5mの掘形に江戸時代末～明治時代のものと思われる信楽焼の甕を正位置で据えたものである。甕の中には付着物等はなかった。上部を土管の埋設により壊されている。SX07・08は東西方向の石列である。ともに長さ7m分を検出し、さらに西に続くようであるが、発掘区中央部から東にはなく、北にも曲がらないようである。当初から無かったのか、削平されたのかはわからない。北側の石列は南側の、南側の石列は北側の面を揃えているようで、その間にみられる淡茶褐色粘質土は意図的に敷いたものと考え（石列SX07・08断面図1層）。両石列とも上面が不揃いであることから、本来はさらに数段積まれていたと思われる。暗灰褐色粘質土（4）から17世紀の肥前産陶器碗片が出土しており、それ以降であることはわかるが、詳細な時期は不明である。また、両石列は基底部の高さが0.15m 違ういるが、同時期に構築されたのか、高さの違いが何に起因するのかも不明である。

IV 出土遺物

本調査で出土した遺物は整理箱で7箱ある。奈良時代の丸瓦、平瓦、鎌倉時代の瓦器、17世紀の土師器、瓦質土器、肥前産陶器、丸瓦、平瓦、18世紀の土師器、瓦質土器、肥前産磁器、18～19世紀の信楽産陶器の他、中世以降の直径約2cmの円盤型土製品、犬型土製品、砥石などがあり、鉄滓（椀形滓含む）といった铸造に関わる遺物も出土している。

V 調査所見

本調査では周辺での調査事例と同じく東面回廊に関わる遺構はなかった。検出した遺構は江戸時代以降のもののみである。SX07・08の両石列の性格は不明であるが、石列間に人為的に淡茶褐色粘質土を敷いていることからみれば、発掘区東半ではなかったが通路や敷地境界の可能性を考慮しておきたい。なお、本調査地の北約80mの場所で行ったGG第8次調査では、安政6年（1859）の突抜町の大火によるとみられる焼土層が確認されているが、本調査地では焼土はなかった。（池田裕英）

13. 西大寺跡（政所院・正倉院推定地）の調査 第31次

事業名 宅地造成

届出者名 株式会社 ソニック

調査地 奈良市西大寺新田町501の一部 他14筆

調査期間 平成25年2月26日～3月26日

調査面積 A発掘区：約250㎡ B発掘区：約12㎡

調査担当者 三好美穂、池田裕英、宮本賢治

I はじめに

調査地は、西大寺伽藍復原によると政所院と正倉院の二つの院にまたがっており、この間には区画道路が想定されている。また、平城京の条坊復原では、右京一条三坊十五・十六坪にあたり、一条条間北小路が推定される場所でもある。地形的には、西ノ京丘陵の東縁に広がる段丘上東縁に位置し、西から東、北から南に緩やかな下り勾配になっている。政所院推定地の調査は、1991年に奈良文化財研究所が調査（第223-1次）を実施しており、奈良時代の整地土および逆L字状の素掘溝が1条検出された。正倉院推定地では、奈良市教育委員会が3次に渡って調査（1996年SD第10次調査、1997年SD第11次調査、2009年SD第26次調査）を実施しているが、いずれの調査地も後世に削平を受けているため遺構の残存状態が悪く、市SD第10次調査地で奈良時代と考えられる雁付式掘立柱建物を1棟検出しただけである。今回の調査では、政所院と正倉院間に想定されている東西方向区画道路および一条条間北小路の確認とそれぞれの宅地の様相を把握することを目的とした。調査地内に国有水路が東西に流れているため発掘区を2箇所に設け、水路から北側をA発掘区、南側をB発掘区と呼称し記述する。

II 基本層序

A発掘区は、中央部付近に約0.8mの水田の段差があり、南側の水田面が北よりも低い。後世に削平されたものとする。発掘区北半部は、耕土・床土の下に黄褐色



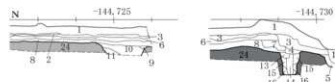
発掘区位置図 (1/5,000)

粘土～橙褐色粘砂が堆積し、地表面から約0.4mで灰色砂礫～黄褐色砂礫（標高約76.5m）の段丘礫層（地山）に至る。一段低い発掘区南半部の北端は、耕土・床土の下がすぐに黄褐色砂礫（標高約75.9m）の地山となる。南半部中央付近から南は、耕土・床土の下に黄灰色砂、淡茶灰色粘土、小礫を多く含む灰色粘砂（整地土）があり地表面から約0.8mで地山（標高約75.2m）になる。

B発掘区は、耕土・床土の下に暗黄灰色粘砂、黄褐色粘土、茶灰色粘砂、灰褐色粘土と続き、表土から0.9～1.0mで淡オリープ灰色粘砂の地山（標高約75.0m）に至る。ここではA発掘区北半部にある礫層はみられない。遺構検出は、灰褐色粘土上面と地山上面でおこなった。

III 検出遺構

遺構検出は基本的に地山上面でおこなった。検出した主な遺構には、奈良時代の素掘溝2条、鎌倉～室町時代



1: 黒褐色粘土 (耕土)

2: 黒褐色粘土 (砂混じり・耕土)

3: 灰色粘土 (床土)

4: 灰色粘砂

5: 黒灰色粘砂 (淡褐色土混じり)

6: 橙褐色土 (灰色砂混じり)

7: 明茶褐色砂

8: 暗茶褐色土

9: 灰色砂

10: 暗褐色土・灰色砂 (S X 10 埋土)

11: 暗褐色砂質土 (S X 10 埋土) 黄灰色粘土

12: 淡黄褐色土 (灰色砂混じり)

13: 淡茶褐色砂

14: 淡灰色粘土

15: 橙褐色粘土 (灰色砂混じり)

16: 暗褐色粘土 (灰色土混じり)

17: 黄灰色砂 (固く締まる)



L: H: 77.1m

0 5m

17: 茶褐色粘土 (固く締まる)

18: 灰色粘砂 (整地土)

19: 灰色砂

20: 暗灰色粘土

21: 灰色粗砂 (18～21: SD01 埋土)

22: 黄灰色砂 (この層の直上から掘り込まれる柱穴多い)

23: 灰色粘砂 (整地土)

24: 黄褐色砂礫 (地山)

25: 黄褐色粘土 (地山)

発掘区東壁土層図 (1/100)

の掘立柱建物、掘立柱列、井戸、土坑がある。以下発掘区ごとに記述する。

【A発掘区】

奈良時代の遺構

SD 01・02 SD01は東西方向の素掘溝で、埋土は3層に大別でき、上層は細かい礫を含む固く締まった茶褐色粘土で、中層は暗灰色粘土、溝底に堆積した下層の灰色粗砂は約0.3mあり、かなりの水流があったことがわかる。下層から板状木製品(幅0.16m、長さ1.06m以上)と8世紀後半の土師器皿・碗、須恵器杯片が少量出土した。SD02はSD01の南側で検出した素掘溝で、溝内には灰色砂混じりの明褐色粘土が堆積し、検出面からの深さは約0.1mと浅い。土師器片が出土したが細片のため詳細な時期は不明。9世紀後半頃の土器を含む整地土で埋められており、この頃までには廃絶したことが窺える。SD01・02は位置関係からみて同時期の溝と考えられる。

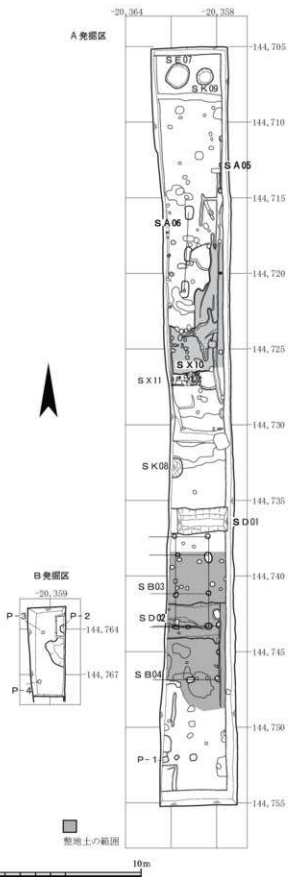
鎌倉・室町時代の遺構

SB 03・04 SB03は、SD02と重複して検出した総柱建物で西側は発掘区外へ続く。柱掘方は、東南隅の柱穴だけが一辺0.6m、深さ0.5mで、他は一辺0.4m、深さ0.1mである。重複関係からSD02を埋めた整地土よりも新しい。SB04はSD02と重複して検出した東西方向の建物と考える。柱掘方は、一辺約0.4m、深さ約0.1mと浅い。重複関係からSD02よりも新しい。

SA 05・06 SA05は南北2間(3.6m)の柱列で、掘方内から13世紀代の瓦器碗・土師器羽釜の破片が少量出土した。SA06は南北2間(5.4m)の柱列で、深さは約0.1mと浅い。SA05・06とも掘立柱建物の妻柱列になる可能性も考えられる。

SE 07 A発掘区北端で検出した東西1.5m、南北1.7mの平面楕円形の井戸。検出面から約1.2m掘り下げたが、湧水が著しく壁面が崩壊したため井戸底まで確認することができなかった。井戸枠の有無も不明である。埋土から14世紀代の土師器皿・羽釜、国産陶器、平瓦片が出土した。

SK 08・09 SK08は、A発掘区北半分の西壁沿いで検出した。西半部は発掘区外へ続く。土坑内には、上から茶灰色粘土、灰色粘土、砂礫を含んだ暗灰色粘土が堆積し、暗灰色粘土からは13世紀代の土師器皿・羽釜、瓦器碗片が少量出土した。検出面から約0.6mで灰色砂礫に至る。発掘区の壁沿いで検出したため、崩壊の危険性を考慮し、これ以上の掘り下げは断念した。井戸になる可能性がある。SK09はSE07の東側で検出した。土坑内には上から淡黄灰色粘土、暗茶灰色粘土、灰色粗砂



遺構平面図 (1/250)

遺構一覧表

表店関連遺構

遺構番号	平面形態	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SD01	東西方向	幅1.5~1.8×長さ4.3以上	1.1	8世紀代~9世紀前半	土師器碗A・皿、須恵器杯A・壺・甕片	
SD02	東西方向	幅2.2~2.8×長さ4.8以上	0.1	8世紀代~9世紀前半	土師器小片	整地土より古い。

独立建物・柱列

遺構番号	棟方向	規模 (間)		桁行全長 (m)	梁行全長 (m)	柱間寸法 (m)		柱穴の深さ (m)	備考
		桁行×梁行				桁行	梁行		
SB03	東西	1以上×3		2.4以上	6.2	2.4	北から2.5-2.6-2.3	0.4~0.5	整地土より新しい。
SB04	東西	2以上×2		1.8以上	3.6	1.8	1.8等間	0.1	整地土より新しい。
SA05	南北	2		3.6	-	-	北から1.8-1.8	0.1~0.2	13世紀瓦器片出土。
SA06	南北	2		3.4	-	-	北から2.8-2.6	0.1	14世紀土師器蓋出土。

井戸・土坑・その他

遺構番号	平面形態	平面規模 (m)	深さ (m)	時期	主な出土遺物	備考
SE07	楕円形	東西1.6×南北1.7	1.2以上	14世紀	土師器皿・羽釜、焼締陶器鉢、平瓦片	井戸枠は残存しない。溝掘りの井戸か。
SK08	隅丸方形*	東西0.7以上×南北1.4	0.6以上	13世紀	土師器皿・羽釜、瓦器片	井戸枠は確認できなかった。
SK09	不整形円形	径1.1	0.6	14世紀	土師器皿・羽釜、焼締陶器鉢、白磁碗、平瓦片	湧水層には達していない。
SX10	逆L字状	幅3.0以上	0.1	13世紀	土師器片、瓦器片	SX11より古い。
SX11	東西方向	幅0.7~1.2×長さ3.1以上	0.1	13世紀以降	土師器皿小片	底部に8~9世紀代の平瓦が敷かれていた。



SX11 瓦検出状態（東から）

が堆積していた。12世紀代の土師器皿・羽釜、国産陶器鉢、白磁碗、14世紀代の土師器皿片が出土。検出面からの深さは、約0.6mで、湧水層には達していなかった。

SX10・11 SX10は逆L字形の溝状遺構である。幅3.0m以上で、それぞれ発掘区の西・東へ続く。深さは約0.1mと浅く、埋土は暗褐色粘土である。8世紀代土師器片、13世紀頃の瓦器片が少量出土した。

SX11は、SX10と重複して検出した東西方向の溝状の遺構である。幅約0.8m、東西の長さ3.0m分を確認したが、西端は発掘区外へ続く。底部に8~9世紀代の平瓦が敷かれていた。原位置から動いていると思われるものもあるが、基本的には平瓦の凹面を下に向けて、東から順に配しているようである。瓦敷きの周辺にはわず

かに遺構の掘方が残る。どのような性格の遺構になるのか明かにすることができなかった。

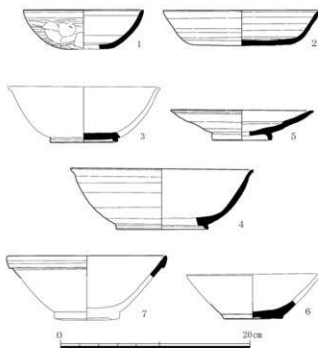
【B発掘区】

小穴（ピット）があるだけで顕著な遺構を検出することはできなかった。灰褐色粘土上面で検出したP-1の掘方一辺は0.5m、深さは約0.2mある。埋土から8世紀代の土師器・須恵器片が少量出土。P-1の基盤層である灰褐色粘土層からは9世紀代の灰軸陶器碗片が1点出土した。地山上面で検出したP-2・3は、径約0.2m、深さは約0.1mと浅い。建物としてはまとまらない。

IV 出土遺物

遺物整理箱で51箱分の土器類（3箱分）、瓦類（48箱分）が出土した。時間的には、8世紀代~10世紀前半代と13世紀代、14世紀代のものがある。土器はA発掘区南半部で検出した整地土から最も多く出土し、丸瓦・平瓦はSX11からのものが多い。以下、SD01および整地土から出土した遺物を中心に述べる。

SD01から土師器杯B・杯蓋・碗A・甕、須恵器杯A・杯B・皿E・杯蓋、甕、甕、軒丸瓦（型式不明）・平瓦（6732K）、丸瓦、木製箸、板状木製品が出土したが図示した土器以外はいずれも破片である。土師器碗A（1）は、口径12.7cm、器高4.2cmを測る。平坦な小さい底部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。口縁端部から内面全体をヨコナデ、体部外面上



出土土器類 (1/4)

半から底部外面はヘラケズリのちヘラミガキ。須恵器杯 A (2) は、口径 16.6cm、器高 3.7cm。広く平坦な底部から斜め上方に開く口縁部からなる。口縁部内外面はロクロナデ、底部外面にヘラキリ痕跡が残る。底部内面および底部外面中央部付近は摩耗しており、ロクロナデ調整やヘラキリ痕跡が消えている。いずれも 8 世紀後半のものである。

整地層出土遺物には、土師器杯 A・皿 A・碗・高杯・壺 B・甕・羽釜、黒色土器 A 類碗・甕、須恵器杯 B・杯蓋・多嘴壺・甕、製塩土器、奈良三彩壺、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗 (3・4)・皿、軒丸瓦 (型式不明 2 点)・軒平瓦 (6732K2 点・6732Q2 点・6732R1 点・型式不明 3 点)、施釉瓦 (三彩 3 点・緑釉 2 点)、丸瓦、平瓦、緑釉埴 2 点、鉄釘、凝灰岩片がある。8 世紀代のものが若干あるが、9 世紀前半から後半のものが主体をなす。土器や瓦は細片が多く、故意に打ち欠いて小礫とともに整地土に入れたと考えられる。灰釉陶器碗 (3・4) は、いずれも低い角高台が付され、内面全体に自然釉が効かる。底部の器壁が分厚いのが特徴である。

この他に SX10 から 9 世紀後半の灰釉陶器段皿 (5)、SB03 の柱穴から 9 世紀後半の越州窯系青磁碗 (6)、SK09 から 11 世紀末～12 世紀代の白磁碗 (7) が出土。5 は口径 15.2cm、器高 3.2cm を測る。口縁部外面から底部外面はロクロナデ調整。軸は、口縁部内外面に見られ、ハケで塗られている。6 は高台径 6.4cm で、底部中央が丸く窪む。7 は口径 17.0cm。いずれも小片である。

A 発掘区南西隅で検出した小穴 (P-1) からは、鶴尾と考えられる破片が出土している。スタンプによる径約 2.8～3.0cm の珠紋が 4 個残存する。

V まとめ

今回の調査成果は以下のとおりである。

①政所院と正倉院の間に想定される区画道路と一条条間路北小路が想定される位置で、東西溝 2 条 (SD01・02) を検出することができた。SD01 と SD02 の間は、溝心々間距離 6.5m を測り、道路として利用されていたものと考えられる。溝心と道路心の国土座標値は下記に示すとおりである。2003 年度に勅元興寺文化財研究所が右京一条三坊一坪の調査¹⁾を実施した際に、一条北大路²⁾を検出しており、このデータを基に右京域の条坊の東西方向の振れ (W0°9'16"S)³⁾を勘案して調査地における一条条間路北小路道路心を求めると、X=-144,739.487、Y=-20,358 となる⁴⁾。今回得られた道路心とほぼ合致しており、SD01・02 は、一条条間北小路の南北両側溝になると考えて良いであろう。

- 1) 一条条間北小路北側溝 SD01 心
X = -144,736.500, Y = -20,361.000
- 2) 一条条間北小路南側溝 SD02 心
X = -144,743.000, Y = -20,358.000
- 3) 一条条間北小路道路心
X = -144,739.750, Y = -20,358.000

②今回の調査で検出した掘立柱建物や柱列・井戸は、奈良時代に属するものではなく、いずれも鎌倉時代から室町時代にかけたの遺構である。全体的に 8 世紀代の遺物量も少ないことからみて、調査地周辺は、奈良時代には余り利用されず、閑散とした場所だったことが窺われる。整地層からは西大寺所用瓦 (6732K・Q・R) や施釉瓦・緑釉埴、奈良三彩など西大寺を象徴するような遺物が出土しているものの、調査区内では政所院や正倉院の存在を裏付ける遺構は無かった。(三好美穂)

註

- 1) 勅元興寺文化財研究所「平城京右京北辺」2005
- 2) 一条北大路道路心：X = -144,605 m Y = -19,881 m
- 3) 武田和成「平城京外京条坊制考—興福寺伽藍中心線との位置関係について—」『奈良古代史論集 3』真陽社 1997、奈良市教育委員会『西大寺旧境内発掘調査報告書 1 (本編)』2013
- 4) ここでは、小尺：0.296 m を用いて計算した。



A発掘区全景（北から）



A発掘区南半部全景（北から）



A発掘区南半部（東から）



SD01内堆積土の状態（西から）



A発掘区南半部（南から）



B発掘区全景（北から）

14. 白毫寺跡（白毫寺境内瓦窯跡）の調査 第2次

事業名 遺跡範囲確認調査
届出者名 奈良市教育委員会 教育長
調査地 奈良市白毫寺町 392 他

調査期間 平成 25 年 1 月 21 日～2 月 14 日
調査面積 20m²
調査担当者 池田裕英

I はじめに

奈良市白毫寺町所在の白毫寺は、奈良市の東方、高円山の中腹に位置する。創建は、天智天皇の皇子である志貴皇子の離宮（山荘）を寺院としたとする説や大安寺動操の創建と伝える岩淵寺の一院であったとの説などがある。しかし、これらを裏付ける資料はなく、平安時代の仏像が残ることも勘案すると「遅くとも鎌倉時代前期ごろには、すでに存在していたと見るのが妥当」とされる（堀池 1977）。建武 2 年（1335）の『南都白毫寺一切経録起』には西大寺の叡尊が再興に関わったことが伝えられ、叡尊の弟子で弘長元年（1262）宋へ渡り『宋版一切経』を伝えた道照を 2 代住持とし、道照は経藏を建立している。これを裏付けるように鎌倉時代末作の木造興正菩薩坐像（重要文化財）も残る。『大乗院寺社雜事記』明応 6 年（1497）の記事には筒井・古市両勢による火で堂宇がほぼ全焼し、残ったのは湯屋と坊舎一棟であったことがみえる。その後、再興されたようであるが、永正 17 年（1520）に再び古市勢の破却をうけた。江戸時代の初めごろに本堂（奈良市指定文化財）が修復され、地藏堂や多宝塔（大正時代に兵庫県宝塚市に移築・平成 14 年焼失）が復興されている（奈良市 1985）。

白毫寺境内では、昭和 57 年に本堂の北方約 40 m で宝藏の建設に先立ち発掘調査が行われており、室町時代以前の可能性が考えられる基礎建物が 2 棟検出されている（奈良県立橿原考古学研究所 1983）。また、境内西側の傾斜地で本市教育委員会が平成 3 年度に発掘調査を行っており（BG01）、出土遺物が伴わず時期が明確にはできなかったものの、白毫寺の寺域を区画していた可能性が考えられる南北方向の土塁状遺構を検出している（奈良市教育委員会 1992）。

今回の調査は、平成 23 年、白毫寺訪問者から瓦窯の分堀跡と思われる部位が地表面に露呈しているとの連絡が埋蔵文化財調査センターにあってことに起因する。本市教育委員会文化財課と埋蔵文化財調査センター職員が現地を確認したところ瓦窯跡の可能性が高いことがわかり、この旨を奈良県教育委員会文化財保存課に連絡した。見つかった場所は本堂の東方約 10 m の位置で、境内巡路の階段頂部にあり、参拝者がこの巡路を歩くことに



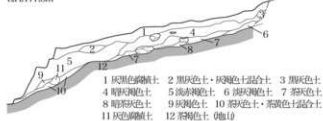
発掘区位置図 (1/5000)

よって遺構の破壊が進む可能性が高いと考えられ、遺構の保護を図る必要があると判断された。このため、遺構の範囲や残存状況を確認したうえで、埋め戻して遺構を保護し、保存することを目的として発掘調査を行うこととした。また、発掘調査にあわせて瓦窯跡の境内での位置等を把握するため、周辺を含めた地形測量も行った。

II 基本層序

発掘区内の層序は、上から灰黒色腐植土（土層図 1）、暗灰褐色土（4）、淡赤褐色土（5）、淡灰褐色土（6）、茶灰色土（7）、茶灰色土・茶黄色土混合土（10）と続き、現地地表 0.4～0.9 m で茶褐色土の地山（12）にいたる。暗灰褐色土（4）には瓦が多く含まれていた。発掘区東端の南と北には寺域東限の土塀の痕跡が 0.3～0.5 m 程度の高まりとして残っているが、発掘区部分はこの痕跡が失われており、この暗灰褐色土は土塀を崩した土と思われる¹⁾。淡赤褐色土（5）には焼土が含まれ、瓦窯を削平した際の土を盛り上げた堆積と考える。瓦窯は茶褐色土（12）の地山上面に築かれている。地山上面の標高は発掘区西端で 174.9 m、東端で 176.7 m である。

W -13,610 -13,607 E
L:±177.3m



北壁土層図 (1/80)

Ⅲ 検出遺構

瓦窯跡 東から西に下る斜面に築かれた平窯で、主軸は、ほぼ国土方眼方位東西に合う。現在の地形は発掘区西端から西側が大きく削られ、ほぼ垂直な崖面となっており、燃焼室や焚口は失われ、東側にあった焼成室奥壁や煙出し部も削平されている。周囲の崖面を観察したところ、本遺構の約2m北側で焼土と思われる土が見られる部分もあったが、この瓦窯を削った土を盛り上げたもので、瓦が散布する箇所もなく、周囲で本遺構以外の瓦窯跡は発見できなかった。今回の発掘調査は、基本的に遺構の平面検出のみにとどめ、部分的に幅0.1m、深さ0.1mの掘り下げ部を設け、焙道床面を確認した。

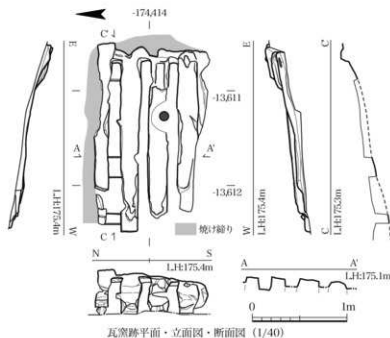
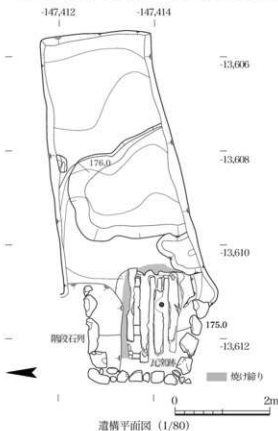
瓦窯掘形は分煇鉢北東部で部分的に検出したが、境内巡路の階段の造成等により壊されており、規模は不明である。焼成室の規模は長さ2.1m以上×幅1.3m以上である。分煇鉢4条が残存していたが、幅が北端のものが0.13～0.15mである以外は0.18～0.2mで、北端の1条の幅が狭く、北側が固く焼け締まっていることから、あるいは額田部瓦窯跡（大和郡山市）のようにこの位置に側壁が立ち上がるのかもしれない（奈良県1935）。そうであれば、分煇鉢は3条あるいはさらに南に1条以上あった可能性も考えられる。分煇鉢の残存高（焙道の深さ・図A-A'）は0.11m（北から1条目）～0.13m（北から2条目）である。長さは北端から2



発掘区全景（西から）



瓦窯跡全景（北東から）



条目が1.9mで、この北端から2条目は残存状況からみて、削平は受けているものの本来の長さを保っていると考えられるが、燃焼室や隔壁との関係はわからない。分煽鉢と分煽鉢との間隔（煽道の幅）は0.1～0.13mで、焼土がつまっていた。分煽鉢上面の東西方向の比高差は概ね0.3mである。煽道床面は分煽鉢と同様に固く焼け締まっていたが、床面が何面あるかは不明である。床面の東西方向の比高差（北から1条目と2条目の間・図C-C'）は0.44mで、傾斜は約13°である。

分煽鉢と分煽鉢との間から鎌倉時代の可能性が高いと考えられる平瓦や、奈良中期（森下・立石1987）の14世紀前半～15世紀前半に位置づけられる土器器小皿（所謂「へそ皿」）の小片も出土しており、瓦窯の操業時期を考える資料となる。（池田裕英）

IV 出土遺物

瓦類 遺物整理箱で5箱分出土した。大半は丸・平瓦であるが、軒丸瓦3点、軒平瓦1点がある。軒瓦は暗灰褐色土（4）、淡赤褐色土（5）からの出土である。

1・2は左巻きの巴紋軒丸瓦である。巴紋はやや丸味を帯びる。巴頭部は尖る。外区は内側の圏線のみ有り、その外側に小さめの珠紋を密にめぐらす。1は2に比べ巴同士の間隔が広く、1と2は異范である。1・2とも瓦当裏面丸瓦接合線に沿ってナデを施す。1は瓦当裏面ヨコナデ、凸面タテケズリ、丸瓦部凹面は布目痕と糸切痕が残る。2は瓦当裏面下半部をヨコケズリ、瓦当下半部凹面はヨコナデ、外縁の頂部は未調整である。1・2は巴頭部が尖り、1は巴の頭部同士が近接することから、13世紀後半から14世紀前半にかけての瓦とみられる。もう1点の軒丸瓦は外縁部の小片である。

3は右側面の途中から、大きく斜めに切り落とした隅用軒平瓦である。斜辺に沿って野地板固定用の釘穴を1箇所穿つ。瓦当紋様は、半截花紋を中心飾りとし、その左右に水波紋を、さらに外側に4回反転均整唐草紋を飾り、これらの外側に界線をめぐらす。中心飾りの輪郭線は花紋に沿った曲線で表現される。瓦当貼り付け式の段頸である。頸面から頸部後縁にかけてはヨコナデ、平瓦部凸面はタテナデを施す。凹面はタテナデを施す。瓦当紋様や、頸部後縁には面取りを施すが、瓦当下面に面取りが無いことから、14世紀後半の瓦とみられる。

窯内部から出土した平瓦は58点あるが、いずれも小片であり、1辺長がわかるものは無い。厚さは2cm程度のものが多いが、厚さ2.5cm程度のやや厚手のものが16点ある。凹凸両面に離れ砂が確認できるものもある。（原田憲二郎）

V 調査所見

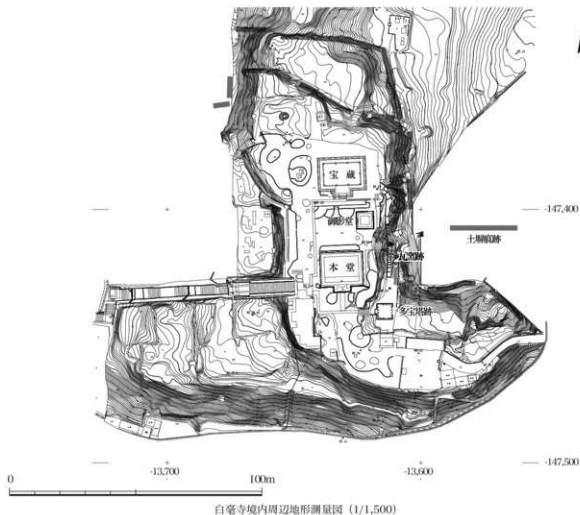
本調査で確認した瓦窯は、焼成室の規模が幅1.3m以上、長さ2.3m以上で分煽鉢は3条以上である。奈良県内では法隆寺境内（斑鳩町）、安倍寺跡（桜井市）、額田部（大和郡山市）で鎌倉時代以降の瓦窯跡がみつかり、この瓦窯の時期を考える際の参考となる。

法隆寺境内では西院伽藍で2基、東院伽藍で2基の瓦窯跡が見つまっている。分煽鉢は西院伽藍の2基が2条、東院伽藍の1基が3条である（もう1基はほぼ削平されている）。良好な残存状態であった西院伽藍の1基は焼成室が幅1.0m、奥行き1.4mである（奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編1985）。安倍寺跡では5基の瓦窯跡が検出された。いずれも分煽鉢は3条で、焼成室は幅1.1m、残存した奥行きは0.9～1.7mで、埋土から出土した軒瓦から鎌倉時代の瓦窯跡と考えられている（榎原考古学研究所編1970）。額田部瓦窯跡は東西に3基の瓦窯跡が並ぶ。いずれも分煽鉢は3条で、焼成室の幅1.1m、長さ1.9mである。また、大阪府堺市の美術多瓦窯跡の14世紀に位置づけられている4号窯は、焼成室の長さは不明であるが、幅が1.6m、分煽鉢は3条である（大阪府教育委員会1973）。瓦窯は時期が下るにつれて小型化するとされる（毛利光1983）。

一方、瓦では窯内部からは時期が判明する軒瓦は出土していないが、平瓦には凹凸両面に離れ砂が撒かれているものがある。離れ砂に関して、法隆寺出土の平瓦では鎌倉時代は凹凸両面に使用し、室町時代のものは凸面の



出土軒瓦(1/4)



白毫寺境内周辺地形測量図 (1/1,500)

みに撒くことが報告されている（佐川1992）。

本瓦窯は先述の鎌倉～室町時代の瓦窯に比して平面規模はやや大きく、窯内出土の平瓦は法隆寺出土平瓦を参考にすると、鎌倉時代の特徴がみられる、といえる。

しかし、焼土から出土した土師器小皿片（14世紀前半～15世紀前半）は小片のため詳細な時期を決め難く、瓦窯の時期については14世紀頃としておきたい。

今回、発掘調査と併せて白毫寺境内周辺の地形測量及び現地踏査を行っており、境内周囲に土塼の高まりを確認することができた。土塼痕跡の周辺に散布している瓦は江戸時代のものであるが、往時の境内の範囲を示す遺構として興味深い。

なお、瓦窯跡は調査終了後、遺構保護のための砂を入れ、真砂土・掘削土で埋め戻した。境内巡路にあつている部分は遺構に接触することがないように更に0.3m程度真砂土を盛り、表面に自然土舗装材を施工し、損壊を防ぐ措置を講じた。また、新たな瓦窯を発見したことから、奈良県教育委員会に埋蔵文化財包蔵地の異動の報告を行い、「白毫寺境内瓦窯跡」として奈良県遺跡地図の記載内容の変更がなされた。（池田裕英）

- 1) 白毫寺近隣に住む方によると、発掘区の東端の位置に昭和20～30年頃には高さ1.5m程度の上層があったとのことである。昭和50年頃の地図には本堂前からこの瓦窯が露呈している場所を通って東側にある寺山墓地へ至る道が記載されており、この間に土塼が削られたとみられる。

福原考古学研究所編『安信寺跡環境整備事業報告書-発掘調査報告書-』板井市 1970
 佐川正敏『鎌倉時代の瓦』・『室町時代の瓦』『法隆寺の至宝 第15巻』株式会社小学館 1992
 大阪府教育委員会『美木多瓦窯跡群発掘調査略報』『昭和48年度現地説明会資料』1973
 奈良縣『生駒郡平岡村額田部窯跡調査』奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十三編 1935
 奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』法隆寺 1975
 奈良県立福原考古学研究所『奈良市白毫寺発掘調査概報-取蔵庫建設に伴う境内地の事前調査-』『奈良県遺跡調査概報 1982年度（第二分冊）』1983
 奈良市『白毫寺』奈良市史 社寺編 1985
 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』1992
 堀池春峰『白毫寺の歴史』『大和古寺大観 第四巻 新業師寺 白毫寺 円成寺』岩波書店 1977
 森下恵介・立石堅志『大和北部における中近世土器の様相』『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要 1986』
 毛利光俊彦『近畿地方の瓦窯』『佛教藝術 148』1983

15. 平成 24 年度実施小規模調査・試掘調査一覧

調査次数	遺跡名	調査地	調査期間	調査面積	事業者/事業内容	届出受理番号
2012-1	平城京跡(左京五条六坊九坪)・奈良町遺跡	南城戸町 56 の一部、南袋町 17・18 の各一部	H24.4.16	7.5㎡	個人/賃貸住宅新築	
	一部現地表下 0.5 m 前後(標高 74.4 m)で地上上面を確認。他は 18 世紀頃に池を埋めて宅地化している。地山残存部分で発掘調査(HJ 658)を実施。					
2012-2	平城京跡(右京三条三坊十四坪)	青野町 111-1 他	H24.4.23	30㎡	養老実住宅/宅地造成	
	現地表下 0.2 m(標高 75.8 m)で地上上面に達し、奈良時代の柱穴を確認した。開発道路部分で発掘調査(HJ 659)を実施。					
2012-3	遺物散布地(縣道跡地図 1-5D-118)	出屋敷町 64-1 他	H24.5.10	25 ㎡	個人/宅地造成	
	現地表下 0.6 ~ 1.1 m(標高 77.4 ~ 77.6 m)で地上上面を確認した。検出遺構はない。慎重工事で対応。					
2012-4	平城京跡(左京四条六坊十一坪)・奈良町遺跡	東城戸町 23 番 1 他	H24.06.26 ~ 6.27	37.4㎡	パナホーム㈱/共同住宅新築	
	東西棟建設予定部分では、現地表下 1.4 ~ 2.1 m(標高 77.3 ~ 78.1 m)で地上上面を確認。その上に中・近世の塹地層を確認。南北棟建設予定部分では、現地表下 0.4 ~ 1.1 m(標高 76.1 ~ 77.0 m)で地上上面を確認。中・近世の塹地層なし。東西棟部分で発掘調査(HJ 663)を実施。					
2012-5	平城京跡(右京七条三坊三・六坪)	七条一丁目 384 他	H 24.12.19	30㎡	寿石橋建築総合設計事務所/宅地造成	
	北側は現地表下 2 m(標高 63.0 m)、南側は現地表下 0.2 ~ 0.9 m(標高 64.8 ~ 65.3 m)で地上上面を確認した。検出遺構はない。慎重工事で対応。					
2012-6	平城京跡(右京五条四坊十二坪)	五条三丁目 932 番他	H25.01.16	20㎡	個人/共同住宅新築	
	建物予定地の東辺中央部で内落ちの地上上面(標高 74.5 ~ 75.0 m)を確認した。検出遺構はない。慎重工事で対応。					
2012-7	平城京跡(右京六条四坊十二坪)	六条一丁目 927 他	H25.2.14	50㎡	個人/共同住宅新築	
	現地表下 0.1 ~ 0.6 m(標高 76.3 ~ 76.9 m)で地上上面を確認した。検出遺構はない。慎重工事で対応。					

16. 平成 24 年度実施踏査一覧

No	踏査地	事業者	事業内容	事業面積	届出受理番号	踏査期日	踏査所見
1	中町 4835 番地	㈱オーケー	店舗新築	16,590.26 ㎡	H24.4001	H24.5.18	遺跡は存在しない
2	奈良阪町 1093 の一部地	サンワ商事㈱	グラウンド造成	10,278.94 ㎡	H24.4003	H24.7.27	遺跡は存在しない
3	北登美ヶ丘二丁目地内	近畿日本鉄道㈱	宅地造成	約 27,400.00 ㎡	H21.4001	H24.7.27	遺跡は存在しない
4	石木町 60 他	日本地所合弁㈱	大規模小売店舗の建設	68,200.00 ㎡	H24.4004	H24.8.31	遺跡は存在しない
5	三徳町 2177-1 他	やまと土地㈱	宅地造成	25,774.30 ㎡	H21.4002	H24.9.19	遺跡は存在しない
6	二名三丁目 1045-1 他	鶴恵比寿天	商業施設開発	28,822.00 ㎡	H24.4007	H24.11.7	遺跡は存在しない
7	朱雀四丁目 3 番 2 他	セキスイハイム近畿㈱	宅地開発	24,061.00 ㎡	H24.4005	H24.12.10	遺跡は存在しない
8	石木町 798 他	医療法人良成会 エリシオンクリニック	医療法人複合施設建設	12,105.14 ㎡	H24.4009	H25.2.13	遺跡は存在しない
9	上深川町 757-1 他	㈱日本ユニテック・引揚商事㈱	太陽光発電用地及び工場地造成	160,801.00 ㎡	H24.4010	H24.3.27	都祁村教委の踏査で、遺跡は存在しないことを確認。今回は造成協力地に遺跡が存在しないことを確認。

17. 平成 24 年度実施工事立会一覧

番号	届出・申請受理番号	遺跡・史跡	届出・申請地	届出・申請者	事業内容	現況	工事立会	
							日付	結果
1	H23.3318	右京五条三坊一坪	五条一丁目 481 番地 98	個人	個人住宅新築	宅地	H24.4.2	GL - 0.3 m まで掘削、盛土内
2	H23.1156	左京一条三坊十六坪	法華寺町 1434 番地の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H24.4.5	GL - 0.4 m まで掘削、盛土内
3	H23.1156	史跡大安寺旧境内附石橋瓦葺	大安寺町・東九条町	芝地水利組合組合長	ヒューム管設置	道路	H24.4.6	GL - 0.5 ~ 0.55 m まで掘削、黒褐色土内
4	H23.3305	左京四条四坊四坪	藤の木台四丁目 6 番 20 号	(株)日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H24.4.13	GL - 0.4 m まで掘削、盛土内

17.平成 24 年度実施 工事立会

5							H24.4.13	GL-3.6 mまで掘削、GL-1.7 mで地山確認、第9発掘区同位置
6							H24.4.16	GL-2.3 mまで掘削、GL-1.8 mで地山確認、第8発掘区掘削基礎から西4 m地点
7							H24.4.19	GL-2.5 mまで掘削、GL-1.0 ~ 1.2 mで地山確認、第11発掘区の東端
8							H24.4.20	GL-2.3 mまで掘削、GL-0.8 ~ 1.1 mで地山確認、第12発掘区から南へ1.0 m地点
9							H24.6.20	GL-3.5 mまで掘削、GL-2.7 mで谷埋土確認、第7発掘区から東へ5 m地点
10	H22.1176	史跡東大寺旧境内	難司町地内	奈良市長	都市水環境整備 下水道築造工事	駐車場・ 道路	H24.6.20	GL-2.5 mまで掘削、GL-1.6 mで谷埋土確認、第8発掘区の西端
11							H24.6.26, 6.28, 7.4, 7.10	GL-2.0 ~ 2.3 mまで掘削、GL-1.2 mで谷埋土、GL-2.0 mで戻削、GL-2.3 mで地山確認、第8発掘区西端から東へ192 mの間で実施、戻削は取り上げ
12							H24.7.19	GL-1.7 mまで掘削、GL-1.5 mで地山確認、第11発掘区内
13							H25.1.23	GL-3.0 mまで掘削、GL-2.5 mで地山確認、第24発掘区北側
14							H25.1.24	GL-3.0 mまで掘削、GL-2.5 mで地山確認、第22発掘区西端南側
15							H25.1.26 ~ 1.29	GL-2.5 mまで掘削、GL-0.8 ~ 1.0 mで地山確認、第24発掘区北側
16							H25.2.22	GL-1.6 mまで掘削、盛土内、第35 ~ 36 発掘区間
17					英感知器ケーブ ルのハンドポー ル		H24.4.16	GL-0.5 mまで掘削、盛土内
18							H24.5.11	GL-0.65 mまで掘削、盛土内
19	H23.1116	特別史跡・特別名勝 左京三条二宮跡廻園	三条大路一丁目 5-37	奈良市長	消化栓設置	廻園	H24.5.7	GL-0.3 mまで掘削、盛土内
20							H24.5.10	GL-0.55 mまで掘削、盛土内
21					英感知器ケーブ ルのハンドポー ル、引込線部		H24.5.14	GL-0.3 mまで掘削、盛土内
22	H23.3377	右京五条三坊一坪	平松二丁目 264 番地 49	個人	個人住宅新築	宅地	H24.4.16	GL-0.35 mまで掘削、盛土内
23	H23.3394	左京五条四坊十三坪	大安寺六丁目 4-30 ~ 3-17-2	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.4.20	GL-0.85 mまで掘削、黄褐色土内
24	H23.3358	二条大路 興福寺跡 奈良町道跡	大豆山突抜町 16-4 16-1 の一部 16-7 の一部 坊屋 敷町 16-7 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H24.4.25	GL-0.4 mまで掘削、茶褐色土内
25	H23.3405	南紀寺道跡	高畑町萩ヶ丘 25 ~ 高畑 町 9-1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.4.27	GL-0.8 mまで掘削、GL-0.4 mで地山確認
26	H23.3251	右京五条四坊三・四 坪・西三坊大路	五条三丁目 826 番地 8	個人	個人住宅新築	宅地	H24.5.1	GL-1.9 mまで掘削、GL-0.1 mで地山確認
27	H24.3007	左京二条五坊一坪	法蓮町 25	個人	個人住宅新築	宅地	H24.5.14	GL-0.2 mまで掘削、黒灰色土内
28							H24.5.14	GL-0.7 mまで掘削、GL-0.25 mで地山確認
29	H24.3054	右京六条四坊十一坪	六条二丁目地内	奈良市水道事 業管理者	水道管敷設工事	道路	H24.5.16	GL-0.8 mまで掘削、GL-0.6 mで地山確認
30	H24.3052	古市道跡	古市町 1638-4 の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H24.5.18	GL-0.23 mまで掘削、盛土内
31	H23.3315	右京三坊三条大路	尼辻西町 68 番 1、68 番 3	藤村建設(株)	賃貸住宅新築	宅地	H24.5.18	工事先行
32	H24.3069	五条三坊十四・十五 坪架間路	平松二丁目 281 番地 125	個人	個人住宅新築	宅地	H24.5.21	GL-0.2 mまで掘削、盛土内
33	H24.3011	新薬師寺	高畑町 600 番地の 1	奈良市長	ガス工事	宅地	H24.5.22	GL-0.65 mまで掘削、盛土内
34	H23.3386	興福寺跡	東向北町 19-2 ~ 登大路町 6-2	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.5.23	GL-1.05 mまで掘削、GL-0.6 mで地山確認

35	H24.3055	左京二条七坊十六坪、奈良町道跡	東筒井町～今小路町地内	奈良市水道事業管理者	水道管敷設工事	道路	H24.5.28	工事先行 GL-0.08m、暗褐色土内
36	H23.3345	左京二条五坊北部	法蓮町786番	ソフトバンクモバイル(株)	携帯電話基地局接地	駐車場	H24.5.28	GL-0.5mまで掘削、クラッシュ
37							H24.5.31	GL-3.1mまで掘削、GL-0.9mで地山確認
38	H24.3043	右京四坊三条大路	宝来三丁目748番1の一部、748番5	個人	賃貸住宅新築	宅地	H24.5.29	GL-1.7mまで掘削、GL-1.2mで地山確認
39	H23.3271	左京三条五坊九坪二条大路、奈良町道跡	芝辻町11-6、11-48の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H24.6.5	GL-1.0mまで掘削、GL-1.0mで地山確認
40	H23.3380	池田道跡	池田町地内54番地	(有)中用政七商店	事務所兼倉庫増築	宅地	H24.6.13	GL-1.2mまで掘削、盛土内
41	H24.3077	左京二条東四坊大路	法蓮町328-1	オーエッチ工業(株)	宅地造成	宅地	H24.6.18	GL-1.7mまで掘削、GL-0.5mで地山確認
42	H24.3376	左京三条四坊十三坪	大宮町二丁目82番16三条京町12-10-318	個人	個人住宅新築	宅地	H24.6.21	GL-0.7mまで掘削、盛土内
43	H24.3131	左京八条四坊六十一坪坪堤小路	東九条町地内	奈良市水道事業管理者	水道管敷設工事	道路	H24.6.25	GL-0.8mまで掘削、盛土内
44	H24.3046	元興寺跡	北京町12番1	個人	個人住宅新築	宅地	H24.6.26	GL-0.5mで地山確認
45	H23.3398	左京五条六坊十一十四坪、左京五条七坊三・六坪	京終地方東側町1番地	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.6.26	GL-1.0mまで掘削、盛土内
46	H24.3083	五条五坊十六坪、九十六坪坪堤小路	大森町21-167	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.6.29	GL-1.8mまで掘削、GL-1.2mで灰色砂礫(旧河川堆積)
47	H24.3073	右京北辺三坊四・五坪坪堤小路	西大寺北町三丁目146-3	個人	賃貸住宅新築	宅地	H24.7.2	GL-0.3mまで掘削、盛土内
48	H23.3374	奈良町道跡	高畑町683-1、685-1	個人	駐車場整備	畑地	H24.7.3	GL-0.7mまで掘削、GL-0.55mで地山確認
49	H24.3129	左京四条一坊七坪	四条大路三丁目918-1	個人	住居兼事務所新築	宅地	H24.7.3	GL-0.65mまで掘削、0.4mで耕作土確認
50	H24.3041	阿彌陀山施寺跡	敷島町一丁目1132番16	個人	個人住宅新築	宅地	H24.7.4	GL-0.3mまで掘削、0.3mで耕作土確認
51	H24.3066	左京一条五坊五坪	法華寺町792-6	個人	個人住宅新築	宅地	H24.7.9	GL-1.1mまで掘削、GL-0.9mで灰色土(旧河川堆積)
52	H24.3132	左京四条五坊十一坪	杉ヶ町48	三井不動産リアルティ(株)	駐車場管理機器設置	その他(更地)	H24.7.11	GL-0.8mまで掘削、茶灰色土内
53	H23.3397	右京二条東四坊五坪	菅原町3694～383-1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.7.11	GL-0.8mまで掘削、GL-0.2mで地山確認
54	H24.3066	左京五条七坊十六坪、奈良町道跡	福智院町24-1～地蔵院町984番地	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.7.18	GL-2.1mまで掘削、盛土内
55	H24.3141	古市道跡	古市町1638-4の一部	個人	個人住宅新築	宅地	H24.7.18	GL-0.1mまで掘削、盛土内
56	H23.3159	左京三条三坊二坪	大宮町六丁目4-15	三菱地所レジデンス(株)	共同住宅新築	宅地	H24.7.18	GL-2.1mまで掘削、盛土内
57	H24.3161	吉備塚古墳跡接地	高畑町	国立大学法人奈良教育大学学長	校舎増築及び外構整備	学校	H24.7.19	GL-1.9mまで掘削、GL-1.6mで遺構(井戸床採取)確認
58	H24.3127	右京二条四坊十四坪	元田町一丁目96番1、97番	個人	個人住宅新築	宅地	H24.7.19	GL-0.5mまで掘削、盛土内
59	H23.1101	史跡大安寺旧境内附石橋瓦葺	大安寺四丁目1097、1117、1116-1	奈良市長	水路の新設		H24.7.19・23、11.19・21・24	GL-0.9mまで掘削、黒色土または灰色砂内
60	H24.3159	左京二条東四坊大路	法蓮町328-1の一部	オーエッチ工業(株)	分譲住宅新築	宅地	H24.7.20	GL-0.3mまで掘削、黒灰色土内
61	H24.3168	西大寺跡	西大寺小坊町302番1の一部	個人	店舗新築	宅地	H24.7.20	GL-0.4mまで掘削、黒灰色土内
62	H24.3035	平城宮北方道跡	山姥町地内	奈良市水道事業管理者	水道配管の改良工事	道路	H24.7.21	GL-0.6mまで掘削、盛土内
63	H24.3075	右京一条三坊大路	西大寺新田町495-1、496-1	個人	個人住宅新築	宅地	H24.7.24	GL-0.1mまで掘削、盛土内
64	H24.3074	右京八条四坊八坪・七条大路	七条西町一丁目52-4～56-16	大阪ガス(株)	ガス管替	道路	H24.7.24	GL-0.7mまで掘削、盛土内
65	H24.3334	右京二条四坊四坪	菅原町383-1	関西電力(株)	電柱新設	宅地	H24.7.24	GL-0.75mまで掘削、0.2mで地山確認
66	H24.3104	左京一条七坊十一坪	川久保町10-9	株式会社日本中央住販	分譲住宅新築	宅地	H24.7.30	GL-0.3mまで掘削、暗褐色土内
67	H24.3006	右京四条二坊五坪	尾辻南町4-21	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.1	GL-0.4mまで掘削、盛土内

17. 平成 24 年度実施 工事立会

68	H24.3121	古市道跡	古市町 1219-1	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.2	GL - 0.2 m まで掘削、暗灰色土内
69	H24.3078	右京二条四坊三・六坪坪堤小路	菅原町 317-3	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.2	GL - 0.7 m まで掘削、GL - 0.7 m まで地山確認
70	H24.3101	左京六坊四条大路	高御門町 29-1、29-2、30	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.7	GL - 0.3 m まで掘削、盛土内
71	H24.3151	右京六条四坊十一坪	六条二丁目 1126 番 6	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H24.8.10	GL - 0.3 m まで掘削、盛土内
72	H24.3190	右京二条三坊十三坪	菅原町 263 番 4 号	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.10	GL - 0.5 m まで掘削、盛土内
73	H24.3122	右京六条三坊九坪	六条一丁目 681 番 2、681 番 4、681 番 6	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.20	GL - 0.4 m まで掘削、盛土内
74	H24.3173	右京七条四坊十二坪	七条西町一丁目 627 番 79	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.22	GL - 0.25 m まで掘削、GL - 0.2 m まで盛土確認
75	H24.3008	五条大路 東紀寺道跡	紀寺町 687 番 3	個人	店舗付個人住宅新築	宅地	H24.8.22	GL - 0.45 m まで掘削、耕作土内
76	H24.3157	左京五条七坊三坪	花園町 11 番	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.30	GL - 0.45 m まで掘削、黒灰色土内
77	H24.3233	右京二条四坊十五坪	若葉台四丁目	個人	個人住宅新築	宅地	H24.8.31	GL - 0.2 m まで掘削、GL - 0.2 m まで地山確認
78	H24.3160	元興寺跡	元興寺町 21-3 番地先	関西電力(株)	電柱支線の建替え	道路	H24.9.3	GL - 1.8 m まで掘削、GL - 0.4 m まで地山確認
79	H24.3139	左京四条一坊三・六坪坪堤小路	四条大路三丁目 987 番地 1 ~ 900 番地	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.9.4	GL - 0.7 m まで掘削、GL - 0.6 m まで地山確認
80	H24.3109	左京五条五坊十坪	大森町 46-3 ~ 西木辻町 34-4	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.9.4-5	GL - 1.0 m まで掘削、黒灰色土内
81	H24.3166	西隆寺跡	西大寺東町二丁目 62 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H24.9.6	GL - 0.35 m まで掘削、暗褐色土内
82	H24.3229	元興寺跡	高畑町 1107 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H24.9.11	GL - 1.0 m まで掘削、暗灰色土内
83	H24.3170	西大路跡	西大寺木町 1-11	大阪ガス(株)	供給管引込工事	道路	H24.9.13	GL - 1.1 m まで掘削、盛土内
84	H24.1024	史跡大安寺旧境内附石橋瓦敷跡	東九条町	西日本電信電話(株)	老朽化による電柱の建替え	田畑	H24.9.13-20、12.10	GL - 1.0 m まで掘削、GL - 0.45 m まで地山確認
85	H24.3139	左京四条六坊十六坪 奈良町道跡	角振新坂町 1-1 他、橋本町 22-3	京阪電鉄不動産(株)	共同住宅新築	宅地	H24.9.14	GL - 2.1 m まで掘削、盛土内
86	H24.1024	史跡大安寺旧境内附石橋瓦敷跡	東九条町	西日本電信電話(株)	老朽化による電柱の建替え	田畑	H24.9.20	GL - 2.5 m まで掘削、灰色砂礫土(旧河川堆積)確認
87	H24.1079	史跡大安寺旧境内附石橋瓦敷跡	大安寺四丁目	西日本電信電話(株)	電柱入替	道路	H24.9.26	GL - 1.35 m まで掘削、暗灰色土内
88	H24.3196	左京五条六坊七坪	西木辻町 343-1	奈良県社会保険労務士会	事務所新築	宅地	H24.9.27	GL - 1.5 m まで掘削、GL - 1 m まで地山確認
89	H24.3203	右京三条四坊十二坪	宝来四丁目 720 番 1 及び 722 番 1	(株)八重坂	宅地造成	水田	H24.9.28	GL - 1.5 m まで掘削、盛土内
90	H24.3199	右京四条二坊十一坪	尾辻南町 103 番 10	個人	個人住宅新築	宅地	H24.10.1	GL - 1.5 m まで掘削、盛土内
91	H24.3236	左京八条四坊三坪	東九条町	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H24.10.1	GL - 0.3 m まで掘削、盛土内
92	H24.3231	二条大路	芝辻町三丁目 1-14	大阪ガス(株)	ガス管修設工事	道路	H24.10.1	GL - 1.8 m まで掘削、盛土内
93	H24.3231	左京五条四坊十五坪 東四坊大路	大森町 77 番・78 番 1 の一部、大安寺七丁目 682 番 2	個人	共同住宅新築	宅地	H24.10.5	GL - 1.8 m まで掘削、盛土内
94	H24.3253	右京四条四坊十・十五坪	平松一丁目 746-1 他	(株)八洲エージェンツ	宅地造成	その他	H24.10.5	GL - 1.5 m まで掘削、盛土内
95	H24.3231	左京五条四坊十五坪 東四坊大路	大森町 77 番・78 番 1 の一部、大安寺七丁目 682 番 2	個人	共同住宅新築	宅地	H24.10.5	GL - 1.8 m まで掘削、盛土内
96	H24.3195	左京五条四坊十五坪 東四坊大路	大森町 78 番 1 一部	個人	共同住宅新築	宅地	H24.10.9	GL - 0.5 m まで掘削、盛土内
97	H24.3219	左京二条五坊北郊	法蓮町 801-1 801-4 801-8 814-5	個人	宅地造成	水田	H24.10.9	GL - 0.4 m まで掘削、黄灰色粘土内
98	H24.3228	右京二条三坊十坪・二条東側路	青野町 45-5	個人	個人住宅新築	宅地	H24.10.9	GL - 1.5 m まで掘削、GL - 1.3 m まで灰色砂(旧河川堆積)
99	H24.3262	左京二条七坊北郊 奈良町道跡	東包永町 75 番	個人	個人住宅新築	宅地	H24.10.11	GL - 0.35 m まで掘削、黒灰色土内
100	H24.3225	左京二条五坊四坪	芝辻町三丁目 70 番 10	個人	個人住宅新築	宅地	H24.10.15	GL - 0.7 m まで掘削、盛土内
101	H24.3204	二条大路 奈良町道跡	北小路町 1 番 5・1 番 7・1 番 13	個人	共同住宅新築	宅地	H24.10.16	GL - 0.3 m まで掘削、盛土内
102	H24.3249	左京八条一坊間路	西町 218 番 1、219 番 1	(有)日出産業	産業廃棄物積替え保管施設	雑種地	H24.10.18	GL - 2.0 m まで掘削、GL - 1.1 m まで地山確認

103	H24.3224	右京四条四坊十一坪	平松三丁目 662-3・6	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H24.10.24	GL-0.3mまで掘削、GL上面で地山確認
104	H24.3257	左京八条四坊二坊・三坊	東九条町 562 番地 5～555 番地 1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.10.30・31-1	GL-1.4mまで掘削、盛土内
105	H24.3245	左京四条二坊七坪	四条大路一丁目 774-3、775-3、778	個人	青空駐車場	宅地	H24.11.2	GL-0.7mまで掘削、灰色土内
106	H24.3280	左京八条三坊十一坪	東九条町 493 番 1、443 番 2	個人	個人住宅新築	宅地	H24.11.8	GL-0.2mまで掘削、盛土内
107	H24.3223	右京一条二坊四坪	二条町二丁目 72 番 21	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H24.11.8	GL-0.3mまで掘削、盛土内
108	H24.3289	右京一条二坊三・四坪	西大寺本町 16	個人	賃貸住宅新築	宅地	H24.11.12	GL-0.5mまで掘削、灰褐色土内
109	H24.3260	左京九条二坊三・四・五・六坪	西九条町四丁目 2 番地 2	大和ハウス工業(株)	汚染土層除去	宅地	H24.11.13・14・15	GL-3.6mまで掘削、GL-2.15mで地山確認
110	H24.3316	左京五条七坊三坪 東六坊大路 奈良町道跡	丸京町 18-1、18-2	個人	共同住宅新築	宅地	H24.11.16	GL-0.9mまで掘削、GL-0.7mで地山確認
111	H24.3138	左京五条六坊北部	法蓮町 1263 番 1	個人	個人住宅新築	宅地	H24.11.16	GL-0.5mまで掘削、灰褐色土内
112	H24.3291	五条桑間路	平松二丁目 8-12	一建設(株)	分譲住宅新築	宅地	H24.11.16	GL-1.5mまで掘削、黒灰色土内
113	H24.3290	左京四条四坊十六坪	三条宮前町 1190、1191	個人	賃貸住宅新築	宅地	H24.11.16	GL-1.0mまで掘削、盛土内
114	H23.1101	史跡大安寺旧境内 附石橋丸京路	大安寺四丁目 1097、1117-6、1116-1	奈良市長	水路の新設	池	H24.11.19	GL-0.9mまで掘削、黒色土内
115	H24.3344	左京七条四坊十一坪	東九条町 1132-2	(株)やまと不動産	宅地造成	水田	H24.11.20	GL-0.5mまで掘削、灰色土内
116	H24.3287	春日城跡	二名西丁目 1193-94	個人	個人住宅新築	宅地	H24.11.20	GL-1.2mまで掘削、GL-0.4mで地山確認
117	H24.3293	左京四坊四条大路	JR 奈良駅南地区 2 街区 3-4 番地	個人	個人住宅新築	宅地	H24.11.26	GL-1.3mまで掘削、褐色土内
118	H24.3241	左京四条四坊十六坪	三条宮前町	(株)増富	個人住宅新築	宅地	H24.11.29	掘削工事無し
119	H24.3252	右京五条二坊十一坪	三条町 399 番 4、401 番 3	個人	個人住宅新築	宅地	H24.11.13・20	GL-0.1mまで掘削、黄灰色砂質土内
120	H24.3216	左京四条六坊六坪 奈良町道跡	西成戸町 7-4、馬場町 14-5	個人	店舗増築	宅地	H24.12.5	GL-1.3mまで掘削、灰色砂礫土(旧河川堆積)内
121	H24.3329	新薬師寺	高畑町 577 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H24.12.6	GL-0.9mまで掘削、GL-0.7mで地山確認
122	H24.3314	右京六条三坊十六坪	六条一丁目 885-5、885-9	個人	個人住宅新築	宅地	H24.12.6	GL-0.4mまで掘削、盛土内
123	H24.3279	西大寺跡	西大寺芝町一丁目 2518-1・2519-2	個人	道路建設	宅地	H24.12.10	GL-2.6mまで掘削、GL-2.3mで地山確認
124	H24.3370	平城京南方道跡	北ノ庄西町一丁目 6 番地 11、12、13	個人	作業所新築	宅地	H24.12.10	GL-0.85mまで掘削、黒灰色土内
125	H24.3328	右京五条四坊九坪	平松五丁目 526 番 5	個人	個人住宅新築	宅地	H24.12.11	GL-0.1mまで掘削、盛土内
126	H24.3251	東一坊四間路	四条大路二丁目 43 番 1、43 番 10	個人	共同住宅新築	宅地	H24.12.13	GL-0.3mまで掘削、盛土内
127	H23.3393	三条大路 奈良町道跡	下三条町 8-1	大阪ガス(株)	ガス管施設	道路	H24.12.15	GL-1.7mまで掘削、盛土内
128	H24.3311	左京一条五坊六坪	法蓮町 816 番地 10～821 番地 1	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.12.18	GL-0.85mまで掘削、黒灰色土内
129	H24.3343	平城京北方道跡	佐紀町 2935-8	大阪ガス(株)	ガス管理設	道路	H24.12.21	GL-0.75mまで掘削、0.2mで地山確認
130	H24.3368	左京二条七坊北部 奈良町道跡	南田中町 25 番 1	個人	個人住宅	駐車場	H24.12.25	GL-0.8mまで掘削、黒褐色土内
131	H24.3318	左京三条五坊十三坪 奈良町道跡	今辻子町 36-7、36-9、37-1、38、39-1	(株)日本製薬	倉庫新築	宅地	H24.12.26	GL-0.8mまで掘削、黒色土内
132	H24.3337	右京五条三坊十三坪 西三坊四間路	尼崎市東瀬田町五丁目 6 番 9 号	ファースト住建(株)	分譲住宅	宅地	H24.12.26	GL上面から地山確認
133	H23.3127	三条大路	高畑町 630 番地の 6	個人	店舗付住宅新築	宅地	H24.12.27	GL-1.6mで地山確認
134	H24.3393	六条山東道跡	六条西三丁目 1533-4、1562-5 及び 1533-1、1562-3 の各一部	個人	宅地造成	宅地	H25.1.17	GL-0.05mで地山確認
135	H24.3375	新薬師寺	高畑町 388-1	個人	地盤改良	宅地	H25.1.19	GL-1.05mまで掘削、淡灰色土内
136	H24.3397	左京六条三坊十四坪	大安寺二丁目 12-2 の一部、12-6 の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.1.11	GL-0.3mまで掘削、盛土内
137	H24.3386	東五坊四間路	三条町 606-61・606-62	ミサト興産	店舗付共同住宅新築	宅地	H25.1.11	GL-0.9mで、河川堆積層確認

17.平成24年度実施 工事立会

138	H24.3002	左京三条三坊六坪	大宮町四丁目296-1	大阪ガス(株)	ガス供給管引込工事	道路	H25.1.15	GL-0.5mまで掘削、盛土内
139	H24.3202	左京五条東一坊大路	二条大路南一丁目1番1号	奈良市公共下水道管理者	下水道工事	宅地	H25.1.23・24	GL-5.6mまで掘削、青灰色シルト確認
140	H24.3086	右京二条三坊二坪	西大寺南町2131-1、青野町1-1	近鉄不動産(株)	共同住宅新築	宅地	H25.1.24	GL-3.5mまで掘削、灰色シルト確認
141	H24.3285	新薬師寺旧境内	高畑町234-1、345-2、357-1、359-2の一部	奈良市長	歩道拡幅工事	学校用地	H25.1.24	GL-1.2mで地山確認
142	H24.3375	平城京南方遺跡	北ノ庄町483-1、484-1	(有)JMCO	ひらたけ栽培施設新築	水田	H25.1.28	GL-0.4mまで掘削、茶褐色土内
143	H24.3339	右京三条二坊三坪	尼辻西町253番地	個人	個人住宅新築	宅地	H25.1.28	GL-0.35mまで掘削、GL-0.2mで地山確認
144	H24.1078	史跡東大寺旧境内	雑司町98	奈良市長	防災倉庫の設置	学校用地	H25.1.30	GL-0.25mまで掘削、盛土内
145	H24.3391	左京五条二坊十三坪	大安寺西一丁目340番3、341番3、341番5	(株)福四屋建設工業	分譲住宅新築	宅地	H25.1.31	GL-1.8mまで掘削、盛土内
146	H24.3410	興隆寺旧境内 奈良町遺跡	角筋町35	(株)三井住友銀行	自家発電機換設	店舗	H25.2.4	GL-0.45mまで掘削、旧基礎範囲内
147	H24.3442	左京四條六坊八坪 奈良町遺跡	北向日16-1、15の一部	個人	店舗付住宅新築	宅地	H25.2.5	GL-1.1mまで掘削、GL-0.5mで地山確認
148	H24.3425	左京四條一坊十坪 東一坊坊間路	四條大路二丁目853番1	個人	青空駐車場造成	水田	H25.2.8	GL-0.55mまで掘削、褐色土内
149	H24.3335	右京三条四坊十二坪 西二坊坊間路	宝来四丁目720番1及び722番1	個人	サービス付高齢者専用住宅新築	宅地	H25.2.8	GL-0.7mまで掘削、褐色土内
150	H24.3432	右京二条三坊十四坪	青野町113-1	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.2.8	GL-0.35mまで掘削、GL-0.25mで地山確認
151	H24.3452	右京五条四坊二坪	平松町四丁目435番、436番	個人	個人住宅新築	畑地	H25.2.14	GL-0.8mまで掘削、GL-0.4mで地山確認
152	H24.3401	左京四條一坊九坪	四條大路二丁目831-1の一部	個人	賃貸住宅新築	宅地	H25.2.18	GL-1.5mまで掘削、GL-0.5mで講理土確認
153	H24.3405	右京五条四坊十坪	平松五丁目560-51	ファースト住建(株)	分譲住宅新築	宅地	H25.2.19	GL-0.5mまで掘削、GL-0.25mで地山確認
154	H24.3406	左京五条二坊十三坪	大安寺西一丁目341番9	(株)福四屋建設工業	分譲住宅新築	宅地	H25.1.31	GL-1.7mまで掘削、暗灰色土内
155	H24.3447	右京二条六坊四坪 奈良町遺跡	北市町38番	個人	個人住宅新築	宅地	H25.3.6	GL-0.9mまで掘削、GL-0.8mで地山確認
156	H24.3444	左京二条五坊北郊	法蓮町930番17	個人	個人住宅新築	宅地	H25.3.4	GL-0.8mまで掘削、盛土内
157	H24.3470	左京五条四坊三坪	大安寺七丁目736番1、736番2	個人	個人住宅新築	宅地	H25.3.8	GL-0.3mまで掘削、盛土内
158	H24.3439	左京五条二坊十三坪	大安寺西一丁目341番6、341番7	(株)福四屋建設工業	分譲住宅新築	宅地	H25.3.11	GL-1.7mまで掘削、GL-1.4mで地山確認
159	H24.3413	左京四條東三坊大路	三条添田町3-28～4-14	大阪ガス(株)	ガス管新設工事	道路	H25.3.11	GL-0.8mまで掘削、GL-0.55mで地山確認
160	H24.3429	左京四條一坊六坪	四條大路三丁目901番、900番5	個人	青空駐車場造成	水田	H25.3.12	GL-0.1mまで掘削、黒灰色土内
161	H24.3324	左京六坊二条坊間路	法蓮町7-12、8-4、11-4地先	関西電力(株)	電柱建替・接地棒接地	宅地 道路	H25.3.12	GL-1.25mまで掘削、暗灰色砂内
162	H24.3376	右京二条三坊十四坪	菅原町298番1、299番1	個人	老人福祉施設新築	水田	H25.3.15	GL-1.1mまで掘削、盛土内
163	H24.3423	薬師寺旧境内	西ノ京291-1	個人	個人住宅新築	宅地	H25.3.18	GL-0.1mまで掘削、盛土内
164	H24.3446	左京四條六坊七坪	小川町20番2他4筆	宗教法人 浄教寺	集合所付住宅新築	宅地	H25.3.22	GL-1.1mまで掘削、黒褐色土内
165	H24.3459	左京二条六坊北郊	法蓮町1374番地	個人	個人住宅新築	宅地	H25.3.26	GL-0.3mまで掘削、GL-0.25mで地山確認

第2章 自然科学分析報告

自然科学分析

奈良市教育委員会では、発掘調査の成果をより総合性の高い確実なものとするために、遺跡や遺物の肉眼観察では把握できない事象について、自然科学分析を活用している。

これまでにやってきた主な自然科学分析は、下記の通りである。

- 1 環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主とした生物遺体の同定
- 2 年代の手がかりとなる遺物が含まれていない地層や遺構の年代を比定するために行う、試料の含有放射線量から年代値を求める年代測定（例：放射性炭素年代測定、TL年代測定）や、年代の指標性が高い広域火山灰（例：A T火山灰、AH火山灰）の同定
- 3 遺物に付着したり土壌に含まれたりする有機物や化学物質、あるいは土器の胎土や地質に含まれる鉱物の成分を同定する理化学分析（例：蛍光X線分析）

平成 24 年度は、平城京第 665 次調査において、河川 1 の埋土で採取した土壌の花粉分析と種実同定を行った。ここでは、これらの分析結果を報告する。

1. 平城京跡第 665 次調査における自然科学分析

1. はじめに

平城京跡第 665 次調査地は、平城京の条坊復原によると右京一条二坊十三の西辺北寄り及び同十四坪の西辺南寄りにあたり、秋篠川により形成された沖積平野に位置する。旧状は水田であり、南隣接地に比べ 1.5 m ほど低くなっていた。発掘調査の結果、水田耕土直下で沖積層の地山上面が確認されたが、奈良時代の遺構はなく、地山を侵食して時期不明の河川が検出された。流路は縄文時代晩期以降のものと考えられ、周辺に集落があった可能性が考えられた。また、その埋土は泥層で、堅果類や流木を含む層もあることから、近傍に森林の存在も示唆された。そこで、地山の形成時や河川の存在における植生等古環境を推定する目的で、花粉分析、種実同定および放射性炭素年代測定を行うことになった。

II. 試料

分析・測定試料は、河川の埋土およびその下位の地山より採取された堆積物と流木である。花粉分析は、河川 1 のアゼ層において、埋土の 2 層（暗灰色粘土：試料 A、B）と 5 層（オリーブ茶灰色粘土：試料 C、D）、地山の II 層（黒灰色砂混じり粘土：試料 E）より採取された堆積物 5 点、放射性炭素年代測定は、同じく河川 1 埋土の 4 層（灰青色粘土）と 5 層の境（試料 G）、地山の I-5 層（青オリーブ灰色砂混じり粘土：試料 H）で採取された流木 2 点、種実同定は、発掘区南端部の河川 1 の第 2 層（オリーブ灰色粘質土）より採取された堆積物 1 点と、水洗選別済み試料である発掘区南端中央部の河川 1 の上層・下層の 2 点、河川 2 の合流部北側の第 2 層の 1 点、発掘区南東部の河川 1 の上部の 1 点、発掘区北西部の河川 2 の第 2 層の 1 点の計 6 点である。

III. 花粉分析

1. 原理 花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 方法 花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から 1 cm を採量
- 2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎

- 3) 水洗処理の後、0.5mm の篩で籾などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の分類は、同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で行い、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定・分類には所有の現生花粉標本と、鳥倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表面断面の特徴と対比して同定するが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

3. 結果

分類群 出現した分類群は、樹木花粉 32、樹木花粉と草本花粉を含むもの 6、草本花粉 13、シダ植物胞子 2 形態の計 51 である。これらの学名と和名および粒数を表 1 に示し、花粉数が 200 個以上計数できたとしたは、周辺の植生を復元するために花粉総数を基とする花粉ダイアグラム（図 2）を示し、主要な分類群は顕微鏡写真（図 1）に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

（樹木花粉） マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イチイガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシダ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ノブドウ、ツバキ属、カキ属、ハイノキ属、トネリコ属

（樹木花粉と草本花粉を含むもの）
クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属

（草本花粉）

ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ギンギン属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンボウゲ属、ツリフネウ属、セリ亜科、オミナエシ科、キク亜科、ヨモギ属

表1 HJ第665次調査 花粉分析結果

学名	分類群	和名	河川1 アゼ南面					
			A	B	C	D	E	
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Podocarpus</i>		マキ属	1	1	1		1	
<i>Abies</i>		モミ属	6	3	4	4	1	
<i>Picea</i>		トウヒ属						
<i>Tsuga</i>		ツガ属	5	3	2	2	3	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	7	3	4	1	1	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	34	35	8	20	12	
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ	2	2	1	1		
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	17	28	8	15	1	
<i>Salix</i>		ヤナギ属		2				
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ	1	1	1			
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	6	13	17	5	7	
<i>Betula</i>		カバノキ属				1	1	
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシダ属-アサダ	8	15	11	6	3	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	12	7	3	10	11	
<i>Castanopsis</i>		シイ属	27	47	21	10	14	
<i>Fagus</i>		ブナ属	3	2	2	1	2	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	59	68	38	24	69	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	185	199	174	96	103	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニル属-ケヤキ	2	2	2	2	5	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ	4	3	17	11	2	
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属	1					
<i>Phellodendron</i>		キハダ属	3	3				
<i>Rhus</i>		ウルシ属				1		
<i>Ilex</i>		モチノキ属	1	3				
<i>Acer</i>		カエデ属	7	1	2		1	
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	1	1				
<i>Vitis</i>		ブドウ属	3	2	2	1		
<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>		ノブドウ	1		2	1		
<i>Camellia</i>		ツバキ属	1					
<i>Diospyros</i>		カキ属		1				
<i>Symplocos</i>		ハイノキ属		1				
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属	7	11	118	77	2	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	1	2	1		6	
Saxifragaceae		ユキノシタ科				1		
Rosaceae		バラ科	2	3				
Leguminosae		マメ科		2			1	
Araliaceae		ウコギ科	6	5	53	*	3	
<i>Sambucus-Fiburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属	1	2	1		1	
Nonarboreal pollen		草本花粉						
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	7	10				
<i>Alisma</i>		サジオモダ属	1	3				
Gramineae		イネ科	52	37	24	40	18	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	48	47	2	27	7	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	2	2		1		
<i>Rumex</i>		ギンギンシ属			1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アザザ科-ヒユ科				2		
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1				1	
<i>Ranunculus</i>		キンボウグ属	4	5	1	1		
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属	1	3	2			
Apioidae		セリ属科	1	1	1	1	2	
Valerianaceae		オミナエシ科			2			
Asteroidae		キタ麦科			1	1		
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	47	58	55	43	14	
Fern spore		シダ植物胞子						
Monolate type spore		単条溝胞子	8	9	3	11	25	
Trilate type spore		三条溝胞子	4	4		1	6	
Arboreal pollen		樹木花粉	404	457	439	289	239	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	10	14	55	4	11	
Nonarboreal pollen		草本花粉	163	164	90	118	42	
Total pollen		花粉総数	577	635	584	411	292	
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	3.5 × 10 ⁴	7.1 × 10 ⁴	1.1 × 10 ⁵	2.8 × 10 ⁴	1.9 × 10 ⁴	
Unknown pollen		未同定花粉	12	11	8	6	17	
Fern spore		シダ植物胞子	12	13	3	12	31	
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Stone cells		石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion remains		明らかでない消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Charcoal fragments		炭細胞化物	(++)	(+)	(+)	(+)	(+)	

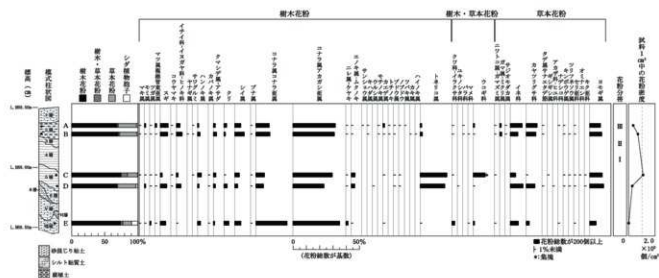


図2 HJ第665次調査 花粉ダイアグラム

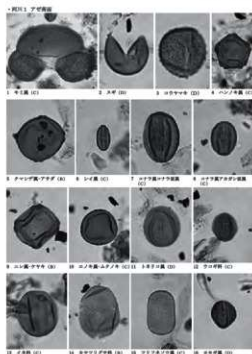


図1 HJ第665次調査 花粉顕微鏡写真

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

花粉群集の特徴 河川1のアゼ南面より採取された試料5点において、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する(図2)。

下部の試料E(II層)では、花粉密度はやや低く、樹木花粉が74.0%、草本花粉が13.0%を占める。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が高率に出現し、シイ属、クリ、スギが伴われる。草本花粉では、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科が出現する。

試料C、試料D(5層)では、樹木花粉が74.5%～

68.5%を占め、コナラ属アカガシ亜属が優占し、トネリコ属が特徴的に出現する。他にコナラ属コナラ亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シイ属、ハンノキ属などが出現する。試料Cでは、ウコギ科も多く、集塊も認められる。樹木花粉では、ヨモギ属、イネ科が比較的多く、試料Dではカヤツリグサ科も多い。

試料Aと試料B(2層)では、樹木花粉が68.5%～70.5%を占め、花粉組成、構成とも極めて類似した出現傾向を示す。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属を主にコナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科が出現する。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が優占し、ガマ属-ミクリ属が伴われる。

4. 考察 下部の試料E(II層)の時期は、コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹とコナラ属コナラ亜属の二次林の構成要素である落葉広葉樹が主に分布する。他に照葉樹のシイ属、二次林種のクリ、湿地林種のハンノキ属、スギの針葉樹が伴う。周辺地域にはカシンの照葉樹林が分布するが、流路周辺にはナラ類やクリの二次林が分布していた。試料E(II層)など流路下部が砂質堆積物であることから、氾濫により植生が壊され、ナラ類の二次林が形成されたことが推定される。草本は少なくイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が流路際などに分布していた。

試料C、試料D(5層)の時期になると、ナラ類は減少し、トネリコ属が増加し、流路周辺は安定した湿地の状態になったと考えられる。ウコギ科も水路際に生育する種類が多い。試料A、試料B(2層)の時期では、トネリコ属の樹木が減少し、流路周辺はイネ科、カヤツリ

グサ科、ヨモギ属およびガマ属・ミクリ属の草本が分布していた。周辺および周辺地域には、コナラ属アカガシ亜属を主にシイ属の照葉樹林が分布し、スズ、イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科もやや多くなる。

IV. 種実同定

1. 原理 大型植物遺体の中心となる種子や果実は、比較的強韌なものが多く堆積物中に残存することが多い。そこで、堆積物などから種実等を検出し、その種類や構成を調べることで過去の植生や環境、さらに栽培植物を明らかにすることができる。また、出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

2. 方法 堆積物試料は、以下の物理処理を施して種実を抽出し、肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察した。水洗選別済み試料は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察した。同定は、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

- 1) 試料 1000mlに水を加え放置し、泥化
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、まず 1000ml を 2.0mm の篩で水洗選別後、このうちの 200ml を 0.25mm の篩で水洗選別
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数

3. 結果

a. 堆積物試料(発掘区南端部河川1)

1) 分類群 樹木 10、樹木・草本を含むもの 1、草本 6 の計 17 分類群が同定された。学名、和名および粒数を表 2 に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

[樹木]

ハンノキ属 *Alnus* 種子 (完形・破片) カバノキ科
 種子は広卵形や卵形、倒卵形を呈し、扁平である。暗褐色で平滑となる。

クマシダ属 *Carpinus* 果実 カバノキ科
 灰褐色で狭卵形や狭楕円形を呈し、光沢はない。この分類群は表面に縦の筋があることで同定するが、ここでは保存状態が悪く縦の筋の確認が出来なかったため、属レベルまでの同定である。

コナラ属コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* 殻斗 (破片) ブナ科
 幼果は黒褐色で鱗片に覆われた殻斗に包まれている。

ヒメコウゾ *Broussonetia kazinoki* S. 種子 (完形・破片) クワ科 長さ×幅: 1.58mm×1.33mm
 茶褐色でやや角張る楕円形を呈す。基部に突起を持ち、茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

サクラ属 *Prunus* 核 (完形・破片) バラ科
 黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科 長さ×幅: 1.28mm×0.90mm
 淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

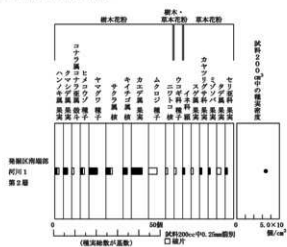
カエデ属 *Acer* 果実 カエデ科
 茶褐色で楕円形を呈す。翼は残存していない。果皮には弱い縦線が走る。断面は扁平である。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子 (破片) ムクロジ科 長さ×幅: 11.31mm×13.36mm
 灰黒色で円状球形を呈し、線形のヘソがみられる。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核 (破片) スイカズラ科

表 2・図 3 第 665 次調査における種実(堆積物)同定結果

学名	分類群	部位	発掘区南端部	
			第 1 層	第 2 層
<i>Alnus</i>	樹木	種子	1	
<i>Carpinus</i>	樹木	果実 (破片)	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	殻斗 (破片)	1	
<i>Broussonetia kazinoki</i> Sieb.	ヒメコウゾ	種子	1	
<i>Morus australis</i> Poir.	ヤマブチ	種子	4	
<i>Prunus</i>	サクラ属	核	2	
<i>Rubus</i>	キイチゴ属	核 (破片)	1	
<i>Acer</i>	カエデ属	果実	0	
<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ	種子 (破片)	4	
<i>Sambucus sieboldiana</i> Blume ex graedn	ニワトコ	核 (破片)	1	
<i>Alnus</i> Herb	樹木・草本	種子	1	
<i>Apollonia</i>	クワ科	種子	1	
Herb	草本			
Gramineae	イネ科	穎	1	
Cyperaceae	スズ科	果実 (破片)	1	
Cyperaceae	カヤクグサ科	果実	1	
<i>Polygonum Thunbergii</i> S. et Z.	ミゾソバ	果実	1	
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実 (破片)	2	
Apollonia	セリソバ	果実	1	
Total	合計		34	



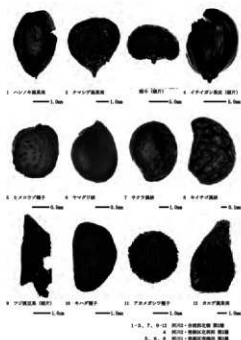


図4 HJ第665次調査の種実(堆積物)

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にヘソがある。表面には横方向の隆起がある。

〔樹木・草本を含むもの〕

ウコギ科 *Araliaceae* 種子(破片)

淡褐色ないし茶褐色で、半月状を呈する。断面は扁平、向軸側はほぼ直線状になり、脚軸側には浅い溝が2～3本走る。表面はざらつく。

〔草本〕

イネ科 *Gramineae* 穎

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

スゲ属 *Carex* 果実(破片) カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実 長さ×幅:1.68mm×0.79mm

茶褐色でやや狭い倒卵形を呈す。断面は両凸レンズ形である。

ミゾソバ *Polygonum thunbergii* S. et Z. 果実 タデ科 長さ×幅:3.11mm×1.90mm

黄褐色で三角状広卵形を呈し、基部に小突起がある。表面には微細な網目模様がある。

タデ属 *Polygonum* 果実(破片) タデ科

黒灰色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で、表面には微細な網目模様がある。

セリ亜科 *Apioidae* 果実 長さ×幅:2.84mm×1.18mm

淡褐色～黄褐色で楕円形を呈す。果皮はコルク質で厚

く弾力があり、片面に3本の肥厚した隆起が見られる。断面は半円形である。

種実群集の特徴 樹木種実が比較的多く、カエデ属5、ヤマグワ4、ムクロジ4、サクラ属3、ハンノキ属2、クマシデ属2、ヒメコウソウ2、キイチゴ属2、コナラ属コナラ亜属1、ニワトコ1、草本種実のタデ属2、イネ科1、スゲ属1、カヤツリグサ科1、ミゾソバ1、セリ亜科1、他に樹木・草本を含む種実のウコギ科1が検出された。

b. 水洗選別済み試料

分類群 樹木18、草本3の計21分類群が同定される。学名、和名および粒数を表3に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴、写真に示したもののサイズを記載する。

〔樹木〕

ハンノキ属 *Alnus* 種子・果苞 カバノキ科 長さ×幅:4.32mm×2.74mm

種子は広卵形や卵形、倒卵形を呈し、扁平である。暗褐色で平滑となる。

クマシデ属 *Carpinus* 果実 カバノキ科 長さ×幅:4.79mm×4.09mm

灰褐色で狭卵形や狭楕円形を呈し、光沢はない。この分類群は表面に縦の筋があることで同定するが、ここでは保存状態が悪く縦の筋の確認が出来なかったため、属レベルまでの同定である。

コナラ属コナラ亜属 *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* 幼果(破片) ブナ科 長さ×幅:10.36mm×13.90mm 幼果は黒褐色で鱗片に覆われた殻斗に包まれている。

イチイガシ *Quercus gilva* Blume 果皮(破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、先端に明瞭な花柱を持つ。花柱の先端は直上かやや内側に向き、殻斗縁が厚い。

コナラ属 *Quercus* 果皮(破片) ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は殻斗欠落し、属レベルの同定までである。

ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

サクラ属 *Prunus* 核(完形・破片)バラ科 長さ×幅:6.43mm×5.05mm

黄褐色で楕円形を呈し、下端が大きくくぼむ。側面に縫合線が走る。表面はやや粗い。

フジ属 *Wisteria* 豆果(破片) マメ科

表3 第665次調査における種実(水洗選別済み)同定結果

学名	分類群	科名	部位	発着地(産地)		合計種別数		発着地(産地)	
				発着地(産地)		合計種別数		発着地(産地)	
				上野	下野	上野	下野	上野	下野
<i>Aster</i>		aster 属							
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	果実			1			
<i>Carpinus</i>		タマシダ属	果実	1		12			
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	幼果(破片)			5			
<i>Quercus gilva</i> Blume		イチブクシ	果皮(破片)					6	
<i>Quercus</i>		コナラ属	果皮(破片)			1			
<i>Morus australis</i> Poir.		ヤマブタ	種子			1			
<i>Fraxus</i>		サクラ属	核			37			
			(破片)						
<i>Wisteria</i>		フジ属	豆果(破片)	4	4	9			
<i>Phellodendron amurense</i> Rupr.		キハダ	種子			4			
<i>Mallotus japonicus</i> Muell. et Arg.		アカメガシワ	種子			6			
<i>Acer</i>		カエデ属	果実			4			
<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.		ムクロジ	種子(破片)	1		9		2	6
<i>Berchemia</i>		クマヤナギ属	核			1			
<i>Vitis</i>		ブドウ属	種子			1			
<i>Vitaceae</i>		ブドウ科	種子(破片)			2			
<i>Isatis controversa</i> Hemsl.		ミズキ	核			1			
<i>Styrax japonica</i> S. et Z.		エゴノキ	核			3			
<i>Sambucus sieboldiana</i> Blume ex graedn		ニワトコ	核	2					1
Herb		草本							
<i>Sparganium</i>		スギ草属	果実			1			
<i>Carex</i>		スダ草属	果実			2			
<i>Leguminosae</i>		マメ科	胚化子葉						
Total		合計		4	9	149	3	12	
Unknown seeds		不明種実		2		2			



図5 HJ第665次調査の種実(水洗選別済み)

狭倒卵形で扁平を呈す。ピロード状に短毛を叢生し、果皮は厚い。

キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 種子 ミカン科 長さ×幅：4.86mm×3.05mm

黒色で半円形を呈し、一側面に細長いへそがある。表面には微細な網目模様がある。

アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. et Arg. 種子 トウダイグサ科 長さ×幅：3.52mm×3.32mm

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

カエデ属 *Acer* 果実 カエデ科 長さ×幅：7.88mm×

4.81mm

茶褐色で楕円形を呈す。翼は残存していない。果皮には弱い縦線が走る。断面は扁平である。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子(破片) ムクロジ科

灰黒色で円状球形を呈し、線形のへつがみられる。

クマヤナギ属 *Berchemia* 核 クロウメモドキ科 長さ×幅：4.42mm×2.95mm

淡褐色～黄褐色で長楕円形を呈し、下端に大きなへそがある。両面に1本の縦溝が走る。断面は楕円形である。

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科 長さ×幅：3.70mm×3.19mm

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

ブドウ科 *Vitaceae* 種子(破片) ブドウ科

この分類群は破片からカラザの部分欠損しているものである。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. 核 ミズキ科 長さ×幅：3.68mm×4.95mm

黒褐色で横長の楕円形を呈す。表面には縦方向に深い筋が走る。

エゴノキ *Styrax japonica* S. et Z. 核 エゴノキ科 長さ×幅：7.62mm×5.68mm

黒褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面に3本の溝が走る。

ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume ex graedn 核 スイカズラ科 長さ×幅：4.25mm×2.62mm

黄褐色～茶褐色で楕円形を呈す。一端にへそがある。表面には横方向の隆起がある。

〔草本〕

ミクリ属 *Spaganium* 果実 ミクリ科 長さ×幅：
4.25mm×2.62mm

淡褐色で側面観は倒卵形、上面観は円形。表面には縦
方向に5本程度の筋が走る。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

マメ科 *Leguminosae* 種子(子葉) マメ科 長さ×幅：
7.41mm×6.16mm

黒色で楕円形を呈し、縦に一本の溝状の筋が走る。

種実群集の特徴

① 発掘区南端部河川1・上層 樹木種実のフジ属4が
同定された。

② 発掘区南端部河川1・下層 樹木種実のフジ属4、
ニトコ2、クマシデ属1、ムクロジ1、草本種実のマ
メ科1が同定された。

③ 発掘区南端部河川1・合流部北側河川2・第2層
樹木種実のサクラ属86が一番多く、クマシデ属12、
フジ属9、ムクロジ9、アカメガシワ6、コナラ属コナ
ラ亜属5、キハダ4、カエデ属4、エゴノキ3、ブドウ
科2、ハンノキ属1、コナラ属1、ヤマグワ1、クマヤ
ナギ属1、ブドウ属1、ミズキ1と続き、草本種実のス
ゲ属2、ミクリ属1が同定された。

④ 発掘区南東部河川1・上部 樹木種実のムクロジ2
が同定された。

⑤ 発掘区北西部河川2・第2層 樹木種実のイチイガ
シ6、ムクロジ5、エゴノキ1が同定された。

4. 考察

a. 堆積物試料(発掘区南端部河川1・第2層)

樹木種実のカエデ属はやや湿気のある肥沃な土壌を好
み、谷間あるいはこれに接する斜面に生育する。ヤマグ
ワは温帯に広く分布する落葉高木で、流路沿いなどに生
育し、二次林種の性格をもつ。ムクロジは水際に生育す
る高木である。サクラ属はやや乾燥した斜面等に生育す
る。ハンノキ属はハンノキに代表され、沢沿いなどの湿
原や水浸のある低地に生育し、ときには湿地林を形成す
る。クマシデ属は二次林種でもある。ヒメコウソは陽樹
で過潤地を好む。キイチゴ属は暖地の山地や丘陵の木陰
に生える常緑小低木であり、林縁の木本である。コナラ
属コナラ亜属は、日当たりの良い山野に生育し、ニトコ
とともに二次林種である。樹木・草本を含む種実のウ
コギ科は山地に自生する落葉低木と考えられ、水路際にも
多い。草本種実のタデ属、イネ科、スゲ属、カヤツリ
グサ科、ミゾソバは湿地から浅い(1mまで)水域に生

育する水生植物である。セリ亜科は多様な種類を含む。

以上、カエデ属、ムクロジ、サクラ属、ヒメコウソ、
キイチゴ属など林縁ないし谷などの過潤地を好む樹木が
多く、ヤマグワ、ハンノキ属は二次林の傾向も強く、ク
マシデ属、コナラ属コナラ亜属、ニトコは二次林種で
ある。流路周辺は谷などの過潤地を好む樹木、二次林種
の樹木が生育していた。また草本は少ないが、タデ属、
イネ科、スゲ属、カヤツリグサ科、ミゾソバ、セリ亜科
があり、水生植物がやや多く水路に生育していた。比較
的不安定な状態であり、氾濫のため二次植生の分布が示
唆された。

b. 水洗選別済み試料

① 発掘区南端部河川1・上層 樹木種実のフジ属は山
地に自生するつる性落葉樹である。水分条件の好適な場
所、谷際の急傾斜地などに多い。以下フジ属は同様の環
境を示す。

② 発掘区南端部河川1下層 フジ属、ムクロジは谷沿
い、ニトコ、クマシデ属は林縁ないし二次林種である。

③ 発掘区南端部河川1・合流部北側河川2・第2層
樹木種実のサクラ属は温帯に分布し、やや乾燥した斜面
等に生育する。は落葉広葉樹で温帯に広く分布する。フ
ジ属、ムクロジ、エゴノキ、ハンノキ属は谷沿いに分布し、
クマシデ属、アカメガシワ、コナラ属コナラ亜属、キハ
ダ、ミズキは落葉広葉樹であり、二次林種でもある。カ
エデ属は谷間あるいはこれに接する斜面に生育する。ヤ
マグワは温帯に広く分布する落葉高木で、流路沿いなど
に生育する。ブドウ科、クマヤナギ属、ブドウ属は木に
巻きついてのぼるつる性の落葉低木で、林縁の植物であ
る。草本種実のスゲ属、ミクリ属は湿地から浅い(1m
まで)水域に生育し、流路に分布していた。以上のように、
本流路周辺は林縁ないし谷沿いの過潤地に多い樹木が
分布し、比較的二次林種も多い。

④ 発掘区南東部河川1・上部 樹木種実のムクロジは
水際に生育する高木である。

⑤ 発掘区北西部河川2・第2層 樹木種実のイチイガ
シは温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木
である。ムクロジ、エゴノキは河川や谷沿いの湿地に生育
する。イチイガシが検出され、照葉樹林が比較的近期に
分布していたことが示唆される。

V. 花粉分析と種実同定から推定される植生と環境

周辺地域にはイチイガシを主とするカシの照葉樹林が
分布するが、流路の周辺はフジ属、ムクロジ、エゴノキ、
ハンノキ属の河川や谷沿いに多い樹木、ヤマグワ、クマ
シデ属、アカメガシワ、コナラ属コナラ亜属、キハダ、

ミズキの林縁の二次林種や斜面地に多いカエデ属やサクラ属が分布していた。溝の中心の時期に湿地性のトネリコ属が増加し、やや安定した様相があるが、二次林種とイネ科、スゲ属、カヤツリグサ科、ミゾソバ、ガマ属・ミクリ属の草本も多く氾濫の多い状況が示唆される。

VI. 放射性炭素年代測定

原理 放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した測定法である。過去の大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。測定においては、米国の Beta Analytic Inc. の協力を得た。

試料と方法 測定試料は、河川 1 理土の 4 層と 5 層の境界より出土した流木と河川 1 下位の地山の 1-5 層より出土した流木の計 2 点である。試料は超音波洗浄、酸-アルカリ-酸洗浄 (AAA 処理) で調製後、加速器質量分析計を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。試料の詳細、調製データを表 4 に示す。

結果 年代測定結果を表 5 に示す。

表 4 測定資料及び処理

試料名	採取部位	対象物	前処理・調整	測定法
RJ665 G	河川 1 4・5 層境界	木材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
RJ665 H	地山 (1-5 層)	木材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

表 5 測定結果

試料名	測定 % (Beta)	未補正 ^{14}C 年代 ¹⁾ (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ‰ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ²⁾ (年 BP)	暦年代 (西暦) ⁴⁾
RJ665 G	344903	3340 ± 30	-27.1	3310 ± 30	交点: ca1 BC 1610
					1 σ : ca1 BC 1620 ~ 1530
					2 σ : ca1 BC 1680 ~ 1510
RJ665 H	344904	4160 ± 30	-26.2	4140 ± 30	交点: ca1 BC 2850, BC 2810, BC 2740,
					2 σ : ca1 BC 2720, BC 2700
					1 σ : ca1 BC 2860 ~ 2830, BC 2820 ~ 2800,
					ca1 BC 2760 ~ 2720, BC 2710 ~ 2660,
					2 σ : ca1 BC 2650 ~ 2630
ca1 BC 2880 ~ 2620, BC 2610 ~ 2600,					
ca1 BC 2590 ~ 2580					

BP: Before Physics (Present), BC: 紀元前

1) 未補正 ^{14}C 年代値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950 年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例により Libby の 5568 年を使用した (実際の半減期は 5730 年)。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

$$\delta^{13}\text{C} (\text{‰}) = \frac{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{試料}} - (^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}}{(^{13}\text{C}/^{12}\text{C})_{\text{標準}}} \times 1000$$

3) 補正 ^{14}C 年代値

試料の炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

なお、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は加速器質量分析システムによって自動的に測定され、それにもない補正 ^{14}C 年代値も自動計算される。

4) 暦年代 Calendar Age
 ^{14}C 年代値を実際の年代値 (暦年代) に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、サンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較、湖の縮減炭酸物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。 ^{14}C 年代の暦年代較正には、Beta Analytic 社オリジナルプログラムである BETA CAL (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68% 確率) と 2 σ (95% 確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

所見 平城京跡第 665 次調査で出土した流木について、加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定を行った。その結果、河川 1 理土の 4 層と 5 層の境界より出土した流木は、3310 ± 30 年 BP (2 σ の暦年代で BC 1680 ~ 1510 年)、河川 1 下位の地山の 1-5 層より出土した流木は、4140 ± 30 年 BP (同 BC 2880 ~ 2620 年, BC 2610 ~ 2600 年, BC 2590 ~ 2580 年) の年代値が得られた。

参考文献

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原, 新版古代の日本 第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.
 中村純 (1967) 花粉分析, 古今書院, p.82-102.
 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, p.187-193.
 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉, 考古学と自然科学, 第 10 号, p.21-30.
 中村純 (1980) 日本産花粉の標識, 大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.
 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.
 笠原安夫 (1988) 作物および田畑雑草種類, 弥生文化の研究 第 2 巻生業, 雄山閣 出版, p.131-139.
 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種, 月刊考古学ジャーナル No.409, ニューサイエンス社, p.15-19,
 (株式会社 古環境研究所)

第3章 平成24年度 保存活用事業報告

平成 24 (2012) 年度 埋蔵文化財保存活用・学習推進事業報告

1. 展示

A 常設展示

対象：一般
会期：平成 24 年 4 月 2 日 (月) ～ 10 月 24 日 (水)
(122 日間)
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
趣旨：奈良市の歴史を埋蔵文化財の展示を通じて知ってもらおう。
内容：旧石器時代～江戸時代の各時代の埋蔵文化財を道跡ごとに展示。

観覧者数：2,376 名

B 秋季特別展『奈良町』の考古学—発掘された近世・近代の奈良—の開催

対象：一般
会期：平成 24 年 11 月 1 日 (木) ～ 12 月 28 日 (金)
(40 日間)
場所：埋蔵文化財調査センター展示室
趣旨：近年調査が進む江戸時代から近代にかけての奈良町内の発掘調査成果を紹介し、その時代を生きた人々の生活や町の様子をテーマごとに展示。

観覧者数：760 名

その他：・案内を「しみんだより」11月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用のポスター・チラシの作成・配布。
・展示解説用パンフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

C 発掘調査速報展示 (2回) の開催

対象：一般
趣旨：発掘調査などの最新の成果を夏と春の2回に

分けて、展示・紹介する。

①夏季速報展示「平氏隆盛の頃の腰刀と轡 (くつわ)」
会期：平成 24 年 7 月 9 日 (月) ～ 8 月 31 日 (金)
(合計 39 日間)

場所：埋蔵文化財調査センター展示室
内容：武家政治へ移行していく平安時代後期、12世紀頃の腰刀と轡について、保存処理作業が終了したので、腰刀が出土した土坑墓の副葬品と佐山道跡及び雲出高貫道跡出土腰刀の写真パネルと合わせて公開展示し、紹介した。

観覧者数：680 名

その他：・案内を「しみんだより」7月号・奈良市役所のホームページに掲載。
・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。
・展示リーフレットの作成。
・事前に報道機関に資料を配布。

②春季速報展示「杏町でみつかった古墳と植輪・奈良町道跡 (東城戸町) の調査」

会期：平成 24 年 3 月 1 日 (木) ～ 3 月 29 日 (金)
(21 日間)
内容：平成 22 年度に杏町内で行った市営住宅建替事業に伴う発掘調査で、新たにみつかった古墳時代中期末 (5 世紀後半) の古墳 2 基 (杏尻広 1・2 号墳) の紹介と合わせて今年度実施した古墳の周溝部分から出土した植輪、土器の整理・復元作業の成果を紹介。また、今年度実施した発掘調査の中から、中近世都市道跡である奈良町道跡 (東城戸町) の調査成果について、鎌倉～江戸時代の出土遺物や写



秋季特別展『奈良町』の考古学



春季速報展示

表1 (住居地別・男女別・年齢別は、判明した人数のみ)

月別:	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	248	254	214	377	304	317	309	404	353	221	261	410
住居地別:	奈良市内	奈良県内	近畿圏内	近畿圏外	男女別:	男	女					
	2940	392	146	39		2,543	1,015					
年齢別:	～9歳	10～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70歳～	学生			
	8	134	63	132	245	320	2334	204	147			

真パネルで展示・紹介した。

観覧者数: 410名

その他: ・案内を「しみんだより」3月号・奈良市役所のホームページに掲載。

・宣伝用ポスター・チラシの作成・配布。

・展示リーフレットの作成。

・事前に報道機関に資料を配布。

D 年間観覧者数 3,592名(248日間)。月平均299名。月、男女、居住地、年齢別は表1のとおり。

2. 施設見学の受け入れ

埋蔵文化財調査センター施設見学

(1)

対象: 平群町 生きがいサポート平群 65名

期日: 平成24年4月10日(火)

(2)

対象: 大安寺西小学校3年生 8名

期日: 平成24年11月8日(木)

3. 講演会・教室の開催

A 埋蔵文化財講演会

平成24年11月17日(土) 13:00～16:30

参加者43名

会場: 埋蔵文化財調査センター講座室

- ・大宮守友「近世奈良町の支配と自治」
- ・センター職員「奈良町」の発掘調査」

B 埋蔵文化財発掘調査報告会

対象: 一般

期日: 平成25年3月16日(土)

内容: 平成24年度に実施した発掘調査及び出土遺物整理の成果報告をセンター職員が行った。

- ・「杏町発見の古墳と道跡」

・「杏尻広1号墳出土の埴輪」

・「奈良町遺跡(東城戸町)の発掘調査」

会場: 埋蔵文化財調査センター講座室

趣旨: 平成24年度実施の埋蔵文化財調査の成果について、職員が図や写真などを使用して報告する。

参加者数: 50名

その他: ・募集案内を「しみんだより」2月号・奈良市役所のホームページ・春季速報展ポスター・チラシに掲載。

・事前に報道機関に資料を配布。



埋蔵文化財講演会



埋蔵文化財発掘調査報告会

C 夏休み親子考古学体験

対 象：小学4年生以上の児童とその保護者
期 日：平成23年8月23日（木）
内 容：クイズに答えながら埋蔵文化財調査センターの展示室を見学後、瓦の拓本を体験する。
会 場：埋蔵文化財調査センター展示室・講座室

趣 旨：展示室を見学することで、奈良の歴史を知ってもらい、本物の遺物に触れることで、考古学に親しんでもらう。

参加者数：20名（9組）

その他：募集案内を「しみんだより」8月号・奈良市役所のホームページに掲載。

4. 市民考古学講座

対 象：一般
期 日：平成24年7月11日（水）～平成25年3月6日（水）
毎月1～2回、全13回（表2）
内 容：埋蔵文化財調査センターがおこなう発掘調査、出土遺物の整理、展示会などの活動支援ボランティアの養成講座。職員が講師をつとめる講座・実習のプログラムにより、将来の活動に必要な基本的知識・技術を身につける。

受講者数：25名

その他：案内を「しみんだより」6月号と奈良市役所のホームページに掲載。

	日時	講座名
第1回	7月11日	開講式・オリエンテーション 考古学とは何か
第2回	7月25日	石室のはなし・縄文時代の基礎知識
第3回	8月1日	弥生のくらし・古墳のはなし
第4回	9月10日	佐紀古墳群を訪ねる（実習）
第5回	9月26日	奈良の都平城京
第6回	10月10日	古代の瓦・古代の土器
第7回	10月24日	発掘作業の流れ
第8回	11月7日	平城宮跡をみる（実習）
第9回	11月16日	発掘現場をみる（実習）
第10回	12月12日	舞台裏をみる（出土品整理作業）
第11回	1月16日	拓本のとり方（実習）
第12回	2月13日	奈良町と中近世の土器・陶磁
第13回	3月6日	土器類の分類整理（実習）・閉講式

5. 市民考古サポーターの活動支援

市民考古学講座終了後、希望者を「市民考古サポーター」として登録し、奈良市の埋蔵文化財保護を支援していただくとともに、楽しみながら学ぶ場を提供する。

対 象：平成23年度を受講修了者25名

登録人員：17名

活動開始：平成24年6月～

活動内容：土器洗浄などの遺物整理、展示作業の補助、講座の準備、受付、体験学習の補助や施設見学の案内、発掘調査実習の補助などに参画。

月平均活動延べ人数：156名

6. 体験学習・実習の受け入れ

A 市立高校体験学習

(1)

対 象：一条高校人文科学科2年生 40名

期 日：平成24年7月23・24・26日

場 所：平城京跡発掘調査現場（西大寺南町）

内 容：発掘調査の体験実習



夏休み親子考古学体験



発掘調査の体験実習（一条高校）

(2)

対象：一条高校人文科学科1年生 41名
期日：平成23年9月25日(火)
場所：埋蔵文化財調査センター
内容：出土遺物の整理実習(洗浄・注記・拓本)
B 中学校職場体験学習

(1)

対象：伏見中学校2年生 男子1名・女子2名
期日：平成24年7月31日(火)～8月2日(木)
場所：埋蔵文化財調査センター
内容：遺物洗浄・講座補助・拓本

(2)

対象：田原中学校2年生 男子3名
期日：平成24年9月5日(水)～7日(金)
場所：埋蔵文化財調査センター
内容：遺物洗浄・注記・拓本

(3)

対象：春日中学校2年生 男子3名

期日：平成24年9月11日(火)～13日(木)

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

(4)

対象：奈良育英中学校2年生 男子1名・女子2名

期日：平成24年10月22日(月)

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記

(5)

対象：平城西中学校2年生 女子2名

期日：平成24年10月23日(火)～25日(木)

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

(6)

対象：京西中学校2年生 男子1名・女子2名

期日：平成25年1月23日(水)～25日(金)

場所：埋蔵文化財調査センター

内容：遺物洗浄・注記・拓本

7. 文化財学習用キットの貸出し

対象：奈良市内の小中学校

趣旨：市内の発掘調査で出土した石器・土器・瓦などの実物資料を教員用の解説書を付けて小中学校などへ貸出し、社会科学習、郷土を知る学習の補助教材として利用してもらう。また、埋蔵文化財調査センターを見学する小中学生・自主活動グループにも「触れることのできる文化財」として使用する。

資料の内容

- ①縄文土器と弥生土器
- ②縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃・石包丁
- ③古墳時代の埴輪と須恵器



職場体験学習(田原中学校)

④-1土器A・④-2土器B 奈良時代の土器

⑤奈良時代の瓦 軒丸瓦・軒平瓦

⑥奈良時代の礎と墨書土器・和同開珎

(1)

場所：左京小学校

期日：平成24年4月26日(木)～5月9日(水)

資料：①・②

(2)

場所：青和小学校

期日：平成24年5月28日(月)～6月1日(金)

資料：②

(3)

場所：都南中学校

期日：平成24年6月20日(水)～6月27日(水)

資料：①

(4)

場所：二名公民館

期日：平成24年11月14日(水)～11月16日(金)

資料：④

(5)

場所：奈良県立盲学校

期日：平成24年11月26日(月)～12月4日(火)

平成25年2月8日(金)～2月22日(金)

資料：①・②・④

8. 職員の派遣（講師など）

A 三笠いきいきクラブ

期 日：平成 24 年 6 月 1 日（金）

場 所：三笠公民館

派遣人数：1 名

内 容：発掘調査の流れ

B 天理大学

期 日：平成 24 年 6 月 5 日（火）

場 所：天理大学

派遣人数：1 名

内 容：インドネシアの宗教と石造文化

C 一条高校人文科学科「総合文化研究」授業

期 日：①平成 24 年 7 月 12 日（木）

②平成 24 年 9 月 18 日（火）

場 所：一条高校（奈良市法華寺町）

派遣人数：①②各 1 名

内 容：①発掘調査について ②考古学とは何か

D 奈良県立橿原考古学研究所付属博物館主催「大和を 揺る 30」土曜講座

期 日：平成 24 年 7 月 21 日（土）・8 月 11 日（土）
9 月 1 日（土）

場 所：奈良県立橿原考古学研究所 講堂

派遣人数：3 名

内 容：赤田横穴墓群の発掘調査成果について

平城京左京五条四坊八坪の発掘調査成果について

東大寺旧境内大仏殿北方地区の発掘調査成果
について

E 「出土遺物が語る奈良町の歴史」展開連講座

期 日：平成 24 年 9 月 2 日（日）

場 所：奈良市ならまちセンター

派遣人数：1 名

内 容：奈良町を発掘する

F 大和発掘！斑鳩考古学セミナー

期 日：平成 25 年 2 月 28 日（木）

場 所：斑鳩文化財センター

派遣人数：1 名

内 容：東大寺旧境内について

G 平成 24 年度奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者 連絡協議会「発掘調査報告会」

期 日：平成 25 年 3 月 2 日（土）

場 所：大淀町文化会館小ホール

派遣人数：1 名

内 容：平城京跡・奈良町遺跡第 653 次調査

9. 出土遺物保存処理

埋蔵文化財調査センターで保管・管理している金属製・木製の遺物について、化学的保存処理を計画的に行い恒久的な保存を図った。

対象資料：赤田横穴墓群出土金属製品 26 点

西大寺旧境内第 25 次調査出土木簡・木製品
347 点

10. 保管資料・写真の貸出し・閲覧等

埋蔵文化財調査センターで保存・管理している遺物・写真などの貸出・提供・掲載許可を行った。また、学術研究に関わって、資料の閲覧を受け入れた。

A 遺物などの貸出 13 件（表 3）

B 写真などの貸出・提供・掲載許可 18 件（表 4）

C 学術研究に関わる資料閲覧 4 件（表 5）

表 3 遺物などの貸出一覧

	貸出機関	使用目的	貸出期間	貸出内容
1	東京国立博物館	平成館考古展示室に常設展示	H 24. 4. 1 ~ H 25. 3. 31	平城京跡出土木簡（模造品）10 点（鎌倉上木簡 1 点、月形鎌倉上木簡 1 点、約皮分鏡付札 1 点、洗皮御田付杖曲指木簡 1 点、北宮河内木簡 1 点、衛府進集付札 1 点、祿布付札 1 点、糶花進上木簡 1 点、造酒司符 1 点、瓦進上木簡 1 点）、分銅（模造品）1 点（平城京跡第 167 次調査出土）
2	帝塚山大学附属博物館	特別展示「遙遠地間の 回風」に展示	H 24. 4. 10 ~ H 24. 5. 31	軒丸瓦 4 点（6308 J 型 1 点・6308 R 型 1 点・6671 I a 型 1 点・古大内式 1 点）、軒平瓦 3 点（6712 C 型 1 点・古大内式 1 点・信濃国分寺回風型 1 点）、櫛櫛御府系 鬼瓦 1 点、契号瓦 1 点、平瓦 1 点
3	田原本町教育委員会	企画展「村を守る」に 展示	H 24. 4. 16 ~ H 24. 6. 1	多圓城跡出土遺物 3 点（軒丸瓦 2 点・軒平瓦 1 点）、古市城跡出土遺物 8 点（軒丸瓦 1 点・軒平瓦 1 点・鬼瓦 1 点・中国産磁器 1 点・土師器 1 点・土製陶台 1 点・土製品 1 点・石硯 1 点）、古市城山道跡出土遺物 3 点（土師器羽釜 2 点・中国産磁器 1 点）
4	株式会社古墳研究所	保存地理及び文化財科 学会に展示	H 24. 5. 9 ~ H 25. 3. 22	漆製品（平城京跡出土品 21 件・西大寺旧境内出土品 4 件）、竹製品（平城京出土品 14 片）、種子（西大寺旧境内出土品一括）

5	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	連報展「大和を纏る30」に展示	H24.7.3～ H24.9.14	赤田横穴墓群出土遺物39点(須恵器18点・土師器1点・玉類16点・陶器4点)、史跡東大寺旧境内大仏殿北方地区出土遺物61点(軒丸瓦3点・軒平瓦1点・滑石瓦3点・滑石1点・輪郭口2点・割屏1点・割面50点・木炭一括)、平城京左京五条四坊八坪出土遺物6点(軒丸瓦3点・軒平瓦1点・瓦2点)
6	奈良市史料保存館	「出土遺物が語る奈良町の歴史」に展示	H24.8.1～ H24.10.5	奈良町遺跡出土遺物45点(埴輪2点・瓦2点・土師器9点・瓦質土器4点・中国産磁器4点・国産陶器9点・大形土製品6点・鍛冶関連遺物7点・銅銭1点・軽釜金1点)
7	公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム	企画展「南都大佛寺と観音さま展」に展示	H24.8.23～ H24.10.17	大安寺旧境内出土遺物11点(軒丸瓦3点・軒平瓦3点・三彩垂木先瓦2点・奈良三彩1点・緑釉陶器1点・墨書土器1点)
8	松阪市教育委員会	特別展「ねむれる王たちの至宝」に展示	H24.9.18～ H24.12.7	市指定文化財ベンシヨ塚古墳出土遺物(甲冑1個、馬具1組、鉄鏝8点)
9	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	特別展「『日本国』の誕生」に展示	H24.9.24～ H24.12.7	平城京跡[左京四坊]出土遺物25点(須恵器19点・緑釉土器2点・墨書土器2点・黒面土器1点・畑花瓦1点)
10	奈良文化財研究所飛鳥資料館	特別展「花開く都城文化」に展示	H24.9.24～ H24.12.18	大安寺旧境内西塔跡出土風障1点・風帽1点
11	財団法人元興寺文化財研究所	特別展「文化財保存・修復の半世紀」に展示	H24.10.1～ H24.11.30	大安寺旧境内西塔跡出土風障1点
12	奈良大学文学部文化財学	講座「考古学実法」で使用	H24.11.29～ H25.3.31	平城京跡第663次調査出土遺物11箱分
13	木鞠学会	第34回研究会集いで展示・熱覧	H24.11.30～ H24.12.3	東大寺旧境内出土木鞠2点・平城京東市跡推定地出土木鞠1点

表4 写真などの貸出・提供・掲載許可

申請日	申請機関	目的	内容	その他
H24.4.23	株式会社藤山閣	『古墳時代の喪葬と祭祀』に掲載	南紀寺遺跡第4次調査井原SX01写真1枚	貸出・掲載許可
H24.5.19	広島大学大学院学生	博士學位請求論文に掲載	邸塚3号横穴陶棺写真2枚	掲載許可
H24.5.19	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	連報展「大和を纏る30」にパネル展示	奈良市埋蔵文化財調査センター施設全景写真1枚・展示室写真1枚	貸出・使用許可
H24.7.11	近畿大学民俗学研究所	近畿大学民俗学研究所紀要「民俗文化」第24号に掲載	平城京跡第605次調査出土陶瓦写真2枚	貸出・掲載許可
H24.7.26	株式会社新人物往來社	月刊『歴史読本』2012年10月号に掲載	西大寺旧境内第23次調査出土腰刀等集合写真1枚、腰刀等出土状態写真1枚	貸出・掲載許可
H24.8.15	奈良文化財研究所飛鳥資料館	特別展「花開く都城文化」展示図録及び広報に掲載	平城京跡出土ガラス小玉等集合写真1枚・大安寺旧境内西塔跡出土風障・風帽写真1枚	貸出・掲載許可
H24.8.27	株式会社ジャパン通信情報センター	『文化財発掘出土情報』2012年10～11月に掲載	史跡東大寺旧境内大仏殿北方地区の調査現地公開資料	貸出・掲載許可
H24.9.5	医療法人平和会	吉田病院内にパネル展示	赤田横穴墓群第2次調査写真10枚・位置図1枚	貸出・掲載許可
H24.9.6	奈良文化財研究所飛鳥資料館	特別展「花開く都城文化」展示図録に掲載	大安寺旧境内西塔跡基礎全景航空写真1枚	掲載許可
H24.9.24	御食園若狭おばま食文化館	常設展「日本の米、世界の米」にパネル展示	中近世の羽釜写真1枚	貸出・使用許可
H24.10.22	一般社団法人日本新聞協会	『N1Eガイドブック』高等学校編に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土鑑引木簡写真2枚	貸出・掲載許可
H24.11.12	皇享館大聖史料編纂所	『万葉古代学研究所年報』第11号に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土大木簡写真1枚	貸出・掲載許可
H24.12.13	三重県教育委員会職員	『古代文化』(平成25年度再行予定)に掲載	柏木遺跡出土石杵実測図1枚	掲載許可
H24.12.15	上高津日塚ふるさと歴史の広場	『古代のみち』展示図録及び広報等に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土東海道木簡写真2枚	貸出・掲載許可
H25.1.12	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	『5世紀のまほろば』展示図録及び広報に掲載	ベンシヨ塚古墳出土遺物写真8枚・西大寺東道跡出土角柱写真1枚	貸出・掲載許可
H25.2.4	個人	『立命館大学考古学論集V』に掲載	若原東道跡埴輪窯跡出土埴輪実測図	掲載許可
H25.2.13	株式会社ミネルヴァ書房	『藤原四子』に掲載	西大寺旧境内第25次調査出土「皇南東門」墨書土器写真1枚	貸出・掲載許可
H25.3.22	田原本町教育委員会	『たわらも』2013発掘調査展」展示図録に掲載	軒丸瓦5本1枚	掲載許可

表5 資料閲覧

	閲覧日	申請者	目的	閲覧資料名
1	H 24. 9. 6	韓国 国立中央博物館 考古歴史部職員	個人研究	平城京跡第 426・431 - 2・440 次調査検出の井戸内出土遺物
2	H 24.10. 1	奈良文化財研究所職員	個人研究	平城京跡第 354 次調査出土の犬資料
3	H 24.11.14	大阪大学大学院学生	個人研究	ウツナーベ古墳造り出し採集資料
4	H 25. 3.19	京都府埋蔵文化財調査研究センター職員	資料調査	平城京跡第 286 - 2・631 次調査出土の製塩土器

印刷・製本仕様データ

表紙紙：アートポストカード220kg/m²・マットpp加工
見返し：白色土質紙110kg/m²
巻頭図版：特アート紙135kg/m²
本文：白色マットコート紙104.7kg/m²
本文フォント：ヒラギノ明朝体
製本：綴りき・糸かがり綴じ

©2015 by the Nara Municipal Board of Education

No part of this publication may be copied or reproduced in any form without written permission from the copyright owner. Printed in Japan.

奈良市埋蔵文化財調査年報

平成24(2012)年度

ISSN 1882-9775

印刷 平成 27 年(2015)年 3月18日

発行 平成 27 年(2015)年 3月27日

編集 奈良市埋蔵文化財調査センター
630-8135 奈良市大安寺西二丁目281番地
TEL 0742-33-1821
FAX 0742-33-1822
URL <http://www.city.nara.nara.jp/>
E-mail maizoubunka@city.nara.lg.jp

発行 奈良市教育委員会
630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1
TEL 0742-34-1111(代)

印刷 株式会社 明新社
630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

**ANNUAL RESEARCH REPORT
OF
ARCHAEOLOGY IN NARA CITY AREA
2012**

CONTENTS

- I PRELIMINARY REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL
EXCAVATIONS IN NARA CITY AREA IN 2012.**

- II REPORTS OF ARCHAEOLOGICAL SCIENCE.**

- III REPORTS OF CONSERVATION AND MANAGEMENT
FOR ARCHAEOLOGICAL SITES AND MATERIALS
IN 2012.**

- IV BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL
RESEARCHCENTER OF NARA CITY.**

**NARA MUNICIPAL BOARD OF EDUCATION,
2015**